Hitotsubashi University

Insights into the Socio-economy of Europe ~Online field trip~



Global Leaders Program 2022

Faculty of Economics

HITOTSUBASHI UNIVERSITY

Insights into the Socioeconomy of Europe

Reviewed and edited by

Milen Martchev and Toki Masuda

Global Leaders Program 2022

FACULTY OF ECONOMICS

目 次(Contents)

謝	辞(ACKNOWLEDGEMENTS)····································
序	文(FOREWORD)····································
	apter 1 INTRODUCTION
1.	参加者プロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
2.	基礎ゼミナール概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Ch	apter 2 RESEARCH & PRESENTATIONS
	Meeting with Students from Paris University (2022.12.5. 16:00- (8:00- (TF))
1. N	Mizuki Tamura · · · · · 12
	Difficulties of Immigrant Descendants in Education in France
2. 1	Nao Tozuka · · · · · 19
	Environmental Policy and Smart Urban Development in the EU
3. \	Yoshitaka Nakajima · · · · 25
	(*Deleted at his request)
4. 1	Minhyoung Lee · · · · · 31
	From Ignominy to Heritage, from Heritage to Daily Life:
	The Oppression and Revitalisation Effort of the Breton Language and its Asian Equivalents
5. k	Koki Kozu·····40
	The Future of the Currency in Europe and Asia
6. (Chie Hu 46
	Financial Reconstruction in Germany
7. N	Yuki Uno · · · · 56
	Religious Discrimination in France
8. I	Brennan McCabe····· 63
	Possibility of Free Tertiary Education
9. 7	Takako Chisaka ····· 68
	French Living Standards
10.	Xiao Chen
	The Implications of the PACS (Solidarity Civil Agreement) for Japanese Society
11.	Kazuya Kato
	An Analysis of the Distribution of Seats in the European Parliament
12.	Risako Usui · · · · 88
	The Possibility of Introducing a Gender Quota System for Company Board in Japan

Chapter 3 OUR ONLINE FIELD TRIP
1. Special Lecture by Mr. Kariya · · · · 94
2. Visits at Mitsubishi Chemical Europe 98 3.
Visits at Tokio Marine Europe
4. Visits in Japan Airlines · · · · · 105
5. Visits at The Japan Fondation (Maison de la Culture du Japon à Paris) · · · · · · 109
Chapter 4 PERSONAL REFLECTIONS
1. Minhyoung Lee
Socially Distanced Autopsy on the Modern World
2. Yoshitaka Nakajima · · · · · 122
Looking Back on the Days I Spent at Prof. Masuda's Seminar
3. Koki Kozu
The Importance of Not Being Obsessed with Numbers
4. Nao Tozuka · · · · · 125
Living with an Awareness of the Issues
5. Mizuki Tamura
The Importance of Learning Together
6. Kazuya Kato
Looking Back
7. Takako Chisaka · · · · · 129
Personal Reflections
8. Chie Hu
Knowing My Weakness
9. Yuki Uno
Learning My Strength and Weaknesses
10. Xiao Chen · · · · · 132
Personal Reflections
11. Brennan McCabe
Reflecting on a Year in the GLP Program
12. Risako Usui · · · · · · · 134
My Personal Reflections

欧州短期海外調査報告書の刊行に寄せて

一橋大学経済学研究科長·経済学部長 塩 路 悦 朗

一橋大学経済学部では、日本語・英語の両方で優れたコミュニケーション能力を持ち、経済学の専門知識と分析スキルに基づいて活躍できるリーダーの育成を目指す「グローバル・リーダーズ・プログラム」(GLP)を2013年度から実施しています。その目標は内外の状況と課題を正確に把握し、その解決方法を探るために不可欠な幅広い教養と深い専門性を併せ持つ学生の養成です。そのような意欲と能力を持つ学生を世界に送り出すことを、私たちは目指しています。

欧州短期海外調査はGLPの一環として毎年1月末に実施してきました。過去2年間はコロナ禍のために現地調査を断念しました。今年度は渡航制限緩和により、実現に向け、参加学生の期待は大きかったと思います。しかし諸般の事情を考慮し、3年連続で見送ることとしました。一方で、5月にはTDK及び三菱ケミカル・ヨーロッパ、6月には東京海上ヨーロッパ、7月には日本航空、11月には国際交流基金のご協力で、オンライン企業研修を実現できました。12月にはパリ大学日本学研究科の修士課程大学院生とのオンライン討論会を行いました。

本企画に参加した学生は、増田都希先生の担当される「基礎ゼミナールA」(春夏学期) および「同B(秋冬学期)で事前準備を周到に行ったうえで、研修や討論会に臨んでいます。そうして得た成果を和文と英文でまとめたものが本調査報告書です。したがって、この調査報告書は「短期」と銘打ってはいますが、教員と学生の1年にわたる濃密な共同作業が生んだ成果といえます。多彩なテーマにわたり熱心に学生をご指導いただきました増田先生、また英文校閲やプレゼンテーションの指導を頂いたマルチェフ先生には、この場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。

海外との様々な繋がりを要する調査研究を大学の講義の一環として実施するためには、 多くの方々のご協力とご支援が不可欠です。貴重な学生交流の機会を与えて下さったパリ 大学の皆さん、ご多忙のなか学生のオンライン訪問を温かく迎えて下さった企業の皆さん、学生 への支援を惜しまれなかった西千紘さん、梶浦里葉さん、高田智恵子さん、この他、欧州短期 海外調査を実現するためにお力添えを頂いたすべての方々に心から感謝を申し上げます。

最後になりますが、本調査に参加した学生の皆さんは、現地訪問が実現しなかった失望 にも負けず、ロシアのウクライナ侵攻でこれまで以上に混迷を深める欧州の経済・社会を理解しようと精一杯取り組み、この報告書に表されている優れた成果を挙げたことに、ぜひ自信を持ってください。今回の挑戦を通して培った知識と経験が、皆さんのグローバルな舞台でのさらなる活躍へ繋がるようにと期待しています。

Foreword and Acknowledgements

Etsuro Shioji

Dean, Graduate School of Economics & Faculty of Economics

Since 2013, the Faculty of Economics at Hitotsubashi University has implemented the Global Leaders Program (GLP) which aims to cultivate global leaders able to combine expert knowledge in economics with advanced communication skills in English as well as in Japanese. Such leaders must comprehend complicated situations and explore appropriate solutions, which requires blending broad knowledge with deep expertise. Our mission is to develop skilled professionals who possess the necessary enthusiasm and capabilities to achieve these goals.

As part of this program, we normally dispatch a group of students on a short-term international field study in European countries every year. The Coronavirus pandemic had forced us to cancel it during the past two years and so in this academic year, with travel restrictions loosening, there was much expectation among the students that they could perhaps resume their visits. However, after due consideration, we decided to abandon our original plans once again. Despite this setback, our dedicated GLP teams made excellent efforts to ensure various alternative arrangements. The students participated in online company visits with TDK, Mitsubishi Chemical, Tokio Marine Europe, Japan Airlines, and the Japan Foundation. They also conducted an online debate with students enrolled in the Master's Program in Japanese studies at *Université de Paris*.

All participants in the EU short-term international field study took the classes offered by Professor Masuda in conjunction with this project: Special Seminars A (Spring-Summer) and B (Autumn-Winter). These classes are designed to broaden the students' knowledge on a variety of problems that the EU is nowadays having to cope with, and to prepare them for presentations and (currently online) discussions with overseas students. Granted, the current report is nominally a product of this "short-term" study, but it represents the result of a year of hard work and collective activities by teachers and students. We are most grateful to Professor Masuda and Professor Milen Martchev for their invaluable guidance, lectures, and support for the students' presentations and drafts.

We would also like to express our sincere gratitude for the support of our friends at Université de Paris as well as the staff at the above-mentioned companies and institutions who welcomed us warmly, which is essential in carrying out this program as part of our department's coursework. We also appreciate the wholehearted support by the GLP Global Office at the Faculty of Economics: Ms. Chihiro Nishi, Ms. Satowa Kajiura, and Ms. Chieko Takada. We shall be delighted if this program helps the participants go on to become professional leaders in the global arena in the near future.

一橋大学大学院経済学研究科特任講師 増 田 都 希

2022 年4 月、ヨーロッパでのコロナウィルスの感染者は下降の一途をたどり、日本でもマスクの着用を除けば、ほぼ以前のような生活が戻っていました。ヨーロッパの入国制限も緩和・撤廃に踏み切る国が相次ぎ、今年こそ現地研修ができるのではないか、そのような期待感と共に2022年度の本研修ははじまりましたが、ヨーロッパではすでに別の危機が勃発していました。戦争です。2022年2月24日、プーチン大統領によってウクライナ東部での「特別軍事作戦」の実施が発表され、キーフを含む諸都市でミサイル攻撃や空襲が開始されました。その前日には、すでにゼレンスキー大統領がウクライナ全土に「非常事態宣言」を発令しています。しかしそれでも、戦争が長期化はしないだろうとタカを括っていましたが、大間違いでした。2023年1月現在、いまだ戦争終結に向けた道筋すら見えません。第一次世界大戦時、西部戦線の一部地域で生じたクリスマス休戦も、ウクライナでは起こりませんでした。コロナ禍と戦争を遠因として、今年度も現地研修はかないませんでした。

2015 年ノーベル文学賞の授賞式のスピーチで、ウクライナにルーツを持つスヴェトラーナ・アレクシエーヴィッチは、こう述べています「ソ連戦争でアフガニスタンにいたとき、最近ウクライナのドンバス難民と話したとき、人間がいかに早く文化を捨て、怪物が出現するかを耳にしました。獣が姿をあらわすのです」約400 年前、ホッブズも同様に人間の中に獣がいると言いました。自身が生き延びるためなら、人間は人間に対するオオカミになる、と。この400 年間、二つの世界大戦と無数のローカルな戦争、植民地での殺戮や略奪を繰り返しながらも、私たちは近代国家を建設し、民主主義を浸透させ、国際機構を樹立しましたが、それでも人間の内なる獣を消すには十分ではないようです。日本語では「戦後」と言いますが、実際には1945 年以降、世界中から戦争が消えた年はほとんどありません。アレクシエーヴィッチのスピーチはこのように続きます「それでも、私は書く……私は書き続ける」なぜなら、彼女によれば「アートの目的は、人間の中に人間を蓄積すること」だからです。人間のなかの獣に対抗するには「アート」によって、言い換えれば「文化」によって人間の中に人間性を培っていくしかない。分かりやすい解決策になびきそうになる気持ちを抑え、議論し、模索し続けるしかないのだと彼女は言います。

「欧州短期海外調査」の目的も、分かり合えないかもしれない人々との協調を試み、力ではなくことばで解決策を模索しようとする人材の育成にあります。今年度は様々なルーツを持つ学生が参加し、これまでで最も多様性に富んだメンバーと共に、この目標に向かって充実した時間を過ごすことができました。久々にほぼすべてのゼミを対面で行うことができたこともあり、学生同士が打ち解けるのは早く、また何より全員が非常に意欲的にゼ

ミに取り組んでくれたことで濃密な学びの時間を持つことができました。顔を合わせて共 に 学ぶことの喜びを、改めて感じられた一年でした。年度初めには現地研修の実施への期 待が 高まっただけに、不実施の決定に対するショックは大きかったですが、最後までモチベーションを維持しようと努めてくれた学生たちを誇りに思います。

今年度もまた多くの方々のご協力を賜ることで、実り多き研修になりました。フランク フ ルト及びデュッセルドルフの如水会会員の皆さまのお力添えをなくして、今年度の企業研 究は成り立ちませんでした。ドイツ生活の長い刈谷圭介様は、市民生活、教育、労働などド イツでの生活の生きた情報を伝えて下さいました。三菱ケミカル・ヨーロッパの山西洋 様 からは、SDGS 時代の化学メーカーのあり方を模索する企業努力についてご教示いただきま した。東京海上ヨーロッパからは中村様、高橋様、大谷様の三名の本校卒業生がご参加く ださいました。学生たちにとっては馴染みの薄かった保険業界についてご説明いただくと 共に、小グループで学生と意見交換を行って下さいました。日本航空株式会社の城宏和 様はコロナ禍とSDGS の時代において、物流に活路を見出した航空業界についてお教えいた だき、また一橋大学に留学経験のある同僚のStaab様は、ドイツ人から見たドイツについて お話しくださると共に、職場での多様性について学生に問いかけてくださいました。海外 赴任経験のある女性卒業生が依然として少ない中、国際交流基金の小島瑞希さんにパリ日 本文化会館での駐在経験をお聞かせいただきました。パリと東京の二つの職場を経験した 出産間近の女性先輩のお話から、学生たちは女性のキャリア形成という点でも多くの示唆を 受けました。ご多忙の折に、研修に快くお力添えくださった皆さまに、改めて御礼 申し上げ ます。

12月には、パリ大学日本学科修士1年の学生たちとの討論会も実施しました。小グループに分かれて、双方の学生が互いの国・地域について発表し、意見交換をする場を設けることができました。授業後には有志が集まって、雑談をしたり、連絡先を交換することができたようです。時差がある中でのスケジュール調整等、準備に多大なご負担をおかけしていますが、昨年度に引き続きご担当下さったパリ大学の砂庭真澄先生には、心より感謝いたします。

最後に、本研修の英語教育を担うミラン・マルチェフ先生には今年度も大変にお世話に なりました。厚く御礼申し上げます。また、コロナ禍にもかかわらず、以上のような貴重な学びが継続できていることは、ひとえに事務局の方々のおかげです。本研修事務局の西千 紘様、グローバル・オフィスの梶浦里葉様、高田千恵子様に重ねて感謝申し上げます。

Foreword

Toki Masuda

Assistant Professor, Graduate School of Economics

In April 2022, the prevalence of coronavirus cases in Europe continued to decline, while daily life in Japan had largely returned to pre-pandemic conditions, apart from the mask-wearing protocols. Several countries in Europe had also relaxed or lifted travel restrictions, providing optimism for onsite training programs to resume. However, a new crisis emerged in Europe, as war broke out. On February 24th, 2022, President Vladimir Putin announced the initiation of a "special military operation" in Eastern Ukraine, prompting missile strikes and aerial bombardments on cities, including Kyiv. President Zelensky had declared a "state of emergency" throughout Ukraine the preceding day. As of January 2023, a resolution to the conflict remains elusive. The Christmas truce that occurred in parts of the Western Front during WWI did not occur in Ukraine. The combined impact of the coronavirus pandemic and the war has precluded the execution of field trips during the current year.

During her acceptance speech for the 2015 Nobel Prize in Literature, Svetlana Alexievich, who has Ukrainian roots, stated, "When I was in Afghanistan during the Soviet war, and recently, speaking with Donbass refugees in Ukraine, I heard about how quickly man sheds culture, and a monster emerges. The beast is revealed". As Hobbes said over four centuries ago, the inherent 'beast' within mankind emerges in the pursuit of self-preservation: wherein man is a wolf to man. Despite the progression of civilization, the advent of modern nation-states, the spread of democratic values, and the establishment of international institutions over the past four centuries, it appears that these developments have not been sufficient to eradicate the bestiality within humanity. In Japanese, the term 'post-war' is used, but there have been very few years since 1945 in which war was absent from the world. Alexievich continues, "Yet I write... I continue to write...". Because, according to her, "The purpose of art is to accumulate the human within the human being". The only way to counter the beast in man is to cultivate humanity in man through "art", or in other words, through "culture". She stresses the importance of resisting the allure of simplistic solutions, constantly engaging in discourse, and seeking to attain this objective.

The aim of our EU short-term international field study project, too, is to cultivate human capital capable of fostering cooperation with individuals from disparate backgrounds and solving problems through words, not force. This year, with participants from a wide variety of backgrounds, we had one of our most diverse groups of members ever working together to achieve a common goal. For the first time in a while, we were able to conduct nearly all seminars in a face-to-face format, which facilitated the rapid building of friendships among the students. More importantly,

they all worked very hard in our seminars, which made for a very intense learning time. It was a year that reminded us of the joys of in-person instruction and collaboration. The decision to forego the field training program despite the high expectations for its implementation at the start of the year was a disappointment, but I am proud of the participants for their perseverance and the determination they demonstrated until the conclusion of the program.

The success of this year's training was once again made possible by the collaborative efforts of many stakeholders. The implementation of this year's corporate research would not have been feasible without the invaluable support provided by all members of Josui-kai in Frankfurt and Dusseldorf. We were fortunate to have Mr. Kariya, who has extensive experience living in Germany, provide us with first-hand insights into German society, including education, labour, and civic life. We also received invaluable information on chemical industry initiatives in the realm of sustainable development goals (SDGs) from Mr. Hiroshi Yamaguchi from Mitsubishi Chemical Europe. As many as three Hitotsubashi graduates from Tokio Marine Europe participated in the event, including Mr. Yuto Nakamura, Mr. Shogo Takahashi and Mr. Yuki Otani. They gave us an overview of the insurance industry, which was unfamiliar to the students, and we exchanged opinions with them in small groups. We were also privileged to have Mr. Hirokazu Jô from Japan Airlines share his perspective on how the airline industry has adapted to the logistics challenges posed by the Coronavirus pandemic and SDGs and to have Ms. Staab, who has studied at Hitotsubashi University, provide a perspective on diversity in the workplace. While few female graduates have been posted abroad, Ms Mizuki Kojima from The Japan Foundation shared her experience of being stationed at Maison de la Culture du Japon à Paris. In terms of women's career development, the students have also received a lot of suggestions from the experiences of a senior woman close to childbirth who has experienced two workplaces, one in Paris and one in Tokyo. In December, we held a productive discussion session with first-year master's students from the Department of Japanese Studies at the University of Paris, where students from both sides gave presentations about their counterparts' countries and regions and engaged in a cross-cultural exchange of ideas. We extend our heartfelt gratitude to Professor Masumi Sunaba of the University of Paris, for her continued stewardship of this event, despite the challenges posed by time-zone coordination and other logistical preparations.

Finally, special thanks to Professor Milen Martchev, who is responsible for our students' English language education in this training program. In addition, I would like to thank our administrative staff for helping the above valuable learning to continue despite the Covid-19 disaster and for their support of this training program: Ms. Chihiro Nishi, Ms. Satowa Kajiwara and Ms. Chieko Takada of the Global Office.

Chapter 1 INTRODUCTION

1 参加者プロフィール

GLP9 期生の中島義貴です。特に特筆する点もない至って普通の一橋生です。芦屋市出身で関西弁を話しますが、(自分で言うのもあれですけど)普段は完璧な標準語で喋っています。残念ながら今年も短期海外調査を実施することは出来ませんでしたが、一緒にいて楽しく、明るい仲間に巡り会えたこと、とても嬉しく思っています。ゼミのメンバーと、真面目な話もちゃんちゃらおかしい話も、心置きなく話せた一年でした。

話は変わりますが、経済学ってとっても楽しいですよね! 本当に日々感動しています。昔から国際関係や外交論に関して興味が強かったので、マクロや国際経済などの話を聞くと真面目に興奮します。最近のおすすめは浜田宏一先生、若田部昌澄日銀副総裁らリフレ派です。アベノミク

スを支えた彼らはこれからどうなるか、期待と不安でドキドキ。

経済学部2年中島義貴



法学部3年 戸塚 菜生



はじめまして。法学部3年の戸塚菜生と申します。普段は法教育を行う活動に参加し、中学校や高校で法律の出前授業を行っています。このゼミに参加した理由は、学部間の垣根が低く、自分の興味・関心に応じて幅広い知見を獲得できるという一橋大学の特性を活かし、法的な視点だけでなく、経済・社会・文化的な視点から多角的に物事を捉える力を養いたいと考えたからです。また、コロナ禍において、誰かと共に一つのことに集中して取り組む経験から遠ざかっていたときに、この短期海外調査に出会い「短期」とはいうものの、一年間、様々なバックグラウンドをもつ他の一橋生とともに、自らの興味・関心か

ら敷衍させて幅広く学びを深められるという長期的なプログラムであることも魅力に感じました。

残念ながら今年度も現地調査の夢は叶いませんでしたが、このゼミを通じて、社会の課題を見つけ、それに向き合おうとする強い意志をもつ仲間に出会い、世界の変化に目を向け、常に課題意識をもつことの大切さを改めて実感することができました。今後も自分の課題意識に対して主体的に挑戦していきたいです。

経済学部2年 宇野 有紀

経済学部2 年の宇野有紀と申します。私がGLP への参加、及び短期海外調査の参加を決めた理由は「よっ友」を作りたくなかったからです。授業中に会話が弾んでも、授業が終われば「よっ」と軽く挨拶をするだけの仲になってしまう。そんな人間関係に違和感を感じていました。新しいコミュニティーに飛び込みたいと思っていた頃、GLP第9期生を募集していることを知り、迷わず応募しました。一年にわたる研



究レポートの作成やパリ大での発表に向けた準備を共にしてきたGLP 生といつしか学外でも 会うようになり、踏み込んだ話もできるようになりました。

私は現在、ミュージカルサークル「劇団WICK」の団長を務めています。代表を務めるような性格ではないですが、ゼミのメンバーがそれぞれの所属団体で情熱を持って活動に取り組んでいる姿に刺激を受け、コミュニティー内で主体的に動こうと決意しました。学業やサークル活動、留学など学生時代にしかできないことを優先し、残りの大学生活を有意義なものにしたいと思います。

社会学部2年 田邑 瑞希



こんにちは。社会学部2年の田邑瑞希と申します。 普段は教育社会学という、教育を社会学的な視点から 考える分野の勉強をしています。趣味は読書で、 TEDxHitotsubashiU、一橋地歴同好会アインズという2つのサ ークルに所属しています。

経済学部生ではない私がこのプログラムに参加した理由はいろいろありますが、1年間ゼミに参加して1つのテーマについてじっくりリサーチしてみたい! フランスにも行けるし!!と思ったことが決め手となったと思います。

実際に参加してみると、他の授業の課題やサークル活

動も相まってそれなりに大変でしたが、期待した以上のことを学ぶことができたと感じます。 詳しいことはPersonal Reflectionを読んでいただければと思いますが、今後の大学生活や人 生でも役に立つであろう気づきが多かったので、今年のプログラムでフランスに行けないと 決まったときも、比較的にショックは小さかったと思います(もちろん落胆しましたけどね!)。 これを読んでくださっている方がどんな方かわかりませんが、もし私と同じ 他学部生で、参加してみたいけどちょっと不安だな、と迷われている方がいらっしゃった ら、ぜひ申し込みだけでもしてみることをお勧めします。



経済学部2年 臼井 理咲子

初めまして。経済学部2年の臼井理咲子です。私は、高校時代にフランス語を学び始めたことをきっかけにヨーロッパ圏の芸術文化や環境・人権政策に興味をもち、渡欧して自分の目で見て学び感じ取りたい!という強い気持ちから今回の研修に参加しました。残念ながら本年度もコロナとウクライナ戦争によるインフレの影響で渡欧は叶うことができませんでしたが、尊敬する志の高い仲間とともに刺激的で貴重なゼミ生活を送ることができ感謝の気持ちで一杯です。来年度以降は、資金集め(特に民間企業からのご支援)に早い段階から学生が主体的に参加するなど新たな挑戦に取り組むことができれば渡欧が可能になるのではと希望を抱いています。

さて、私の趣味は部活で取り組んでいるゴルフ、と音を聞くことです。音楽鑑賞はもちろんですが、普段街を歩いている時、雑踏の中から色々な音や生活音を拾い取って意識を向けることも好きです。音は物に何か変化が与えられた時に生じるものなので、何かに集中してじっとしていることが苦手な私は、安心するのかもしれません。ぜひ、ヨーロッパの歴史ある美しい街並みの数々も、景色からだけではなくそこにいる人々によって生まれる"音"にも注目していつか楽しんでみたいです。

経済学部2年 胡 千惠

経済学部2年の胡千惠と申します。

高校入学前からダンス部に入りたいと思っていたものの、高校のダンス部のレベルの高さに圧倒されてしまい、初心者である私がそこに混じって踊る勇気が出ず、機会を逃してしまいました。この苦い経験から、現在は2つのダンスサークル(セファランセラとSpica)に所属しており、学園祭前の準備期間などはダンスの練習技のまま授業に参加していました。



このゼミに入った理由としては、GLP の必修条件であったことと、実際にヨーロッパに出向き、人々や街並みの雰囲気を体感したかったからです。残念ながら今年も現地に行く ことはできず、オンライン開催となってしまいましたが、自分の興味分野である財政学に関する研究レポートを作成する機会を得ることができたことや、素敵なゼミのメンバーに も出会えたことから、有意義かつ貴重な時間であったと感じます。



経済学部2年 干坂 貴子

こんにちは!経済学部2年の千坂貴子です。趣味はピアノや旅行、他にはNetflix に一日数時間費やすことなどです。高校生の間ロンドンに住んでいたこともあり、元々欧州には興味がありました。GLP に所属しているという理由もありますが、ヨーロッパ諸国で10日間過ごし、歴史的な深さを感じると共に、経済学的な視点から欧州について勉強してみたいと思い、このゼミへの参加を希望しました。今年 こそは実際に渡欧することができると信じていたので、行けなくなったことを知ったときは本当に絶望的でした。ゼ

ミのみんなでエッフェル塔の前で写真を撮ることなど、パリとアムステルダムでやりたいことを皆で頻繁に話していたので、余計辛かったです。ですが、ゼミのメンバーが皆それぞれ多様で面白い人々だったので、毎週のゼミがとても楽しいものとなりました。

また、ヨーロッパにまつわるトピックを選び、1 年を通して取り組んだレポートを発表する機会があったことも貴重な経験となりました。短い時間ではありましたが、パリ大学 の 方々とズームを通して交流し、自身のトピックを発表すると同時に彼らの日本に対する視点や考えを知ることができたことは非常に新鮮かつ興味深いものでした。今年行く予定の留学では実際に対面で現地の人々と交流し、視野を広げていくことを望んでいます。

経済学部2年 マッケーブ ブレンナン 礼

GLP に所属する経済学部2 年のマッケーブといいます。中学2 年の前に地元の長野を離れてアメリカに引っ越し、そこで高校を卒業して帰国しました。趣味はゲーム、バイク、料理などです。

もともとアメリカに住んでいながらも、なぜ欧州にて知見を広げるためのGLP に参加したかというと、欧州自体の特異性に大いに興味をひかれたからです。誰もが知るように、ヨーロッパは激しい戦乱の時代が殆どを占めているにも関わらず、ここ半世紀ほど、とて も革新的な同盟を成立させてきました。その実情を経済的な観点に焦点をあてながら深掘りしていく機会がとても魅力的でした。



その他の理由としては、日本やアメリカに住んでいたとはいっても、自分がいた長野やマサチューセッツからほとんど出ることがなかったため、比較する機会があまりなかったことがあります。ヨーロッパは様々な文化が密集しているため、自分の今までの経験や東京に住んでいる現状をそのまま対照することができ、初めて自分の過去が一つの価値を生み出す機会に思ったのです。

残念ながら短期海外調査が中止され、パリ大生との 短い交流やゼミ内の活動だけではあまり当初の試みは 果たせませんでしたが、貴重な経験であったことには 変わりません。他の地域を今までの自分が育った場所

と直接的に比較するという行為、そしてその結果を周りの優秀な学生や教授にフィード バックをいただきながら完成させていくプロセスは間違いなく自分を成長させてくれました。

経済学部2年 加藤 和也

初めまして、経済学部2年の加藤和也と申します。千葉の海沿いの田舎出身で、大学入学を機に国立で一人暮らしを始めました。好きなことはテニスです。よくぜいの直前までサークルでテニスをして、イケてる服装をした人達の待つ教室に、背中にラケット刺してテニスウェアで駆け込んでいたのはいい思い出です。テニスと服装を両立しようとして私服でテニスをしたこともありますが、なぜ早めに切り上げて着替えるという選択肢がなかったのかは甚だ疑問です。さて、私は海外経験がないどころか英語も思うように話せず、グローバルなキャリアプランや目標も特



に持っていませんでしたが、好奇心だけを頼りに選考に応募しました。この一年間を通して、企業研修や輪読、調査レポートの執筆やパリ大学との討論会などたくさんの貴重な経験をさせて頂きました。加えて、志が高く才能や実力を兼ね備えたメンバーに囲まれる環境はとても刺激的で、彼らに出会えただけで間違いなく参加して良かったと思います。自分の実力は一旦置いておいて、機会を見つけたら積極的に挑戦することの価値を実感する

ことができました。これからも沢山のことに挑戦して、いつかビッグな男になれるように 頑張りたいと思います。

経済学部2年 神津 昂希

こんにちは。経済学部2年の神津昂希です。私は、長野県佐久市という日本で最も海から遠い地域の出身で、幼いときから山をテリトリーにして育ちました。この生活も悪くはないですが、都会での生活も憧れるものです。佐久市出身の大先輩である新海誠監督が作成した「君の名は。」で、三葉が叫んだ「もうこんな町いやや!こんな人生いやや!来世は東京のイケメン男子にしてくださーい!」と



いうセリフには、全佐久高校生の思いが詰まっていると言っても過言ではありません。い や、流石に過言かもしれません。

さて、そのような私も大学生活が2年過ぎました。映画内で三葉が体感したような、東京に対する驚きは大学1年目で網羅しましたが、この2年目では、GLPという全く別の衝撃が待っていました。特にこのゼミでは、多様なバックグラウンドを持つ仲間と活動を行い、多様な考え方に触れる中で、日々、大きな刺激をもらいました。田舎から都会へ、という物理的距離ではなく、心理的な面で、世界が広がりました。残念ながら今年も渡航は叶わず、ヨーロッパで実際に見聞を深めることはできませんでしたが、パリ大学とのズーム交流も非常に貴重な経験となりました。何よりこの12人+先生の13人で作り上げた1年は、それだけで大きな財産です。

この経験を基に、将来、佐久の先輩方にも負けないグローバルリーダーになれるよう、 自己研磨、自己啓発に励みたいと思います。

社会学部3年李旻炯

社会学部3年の李旻炯(イミンヒョン)と申します。韓国からの留学生で、趣味は読書と旅行、ニュースを見てストレスを受けること、そして猫の画像を見てそのストレスを癒すことです。2年間の兵役を終え、復学のため日本へ帰国しようとしたら、空前絶後の伝染病が世界中に広がり1年間足止め。ようやく来日し、欧州短期海外調査に参加してヨーロッパに行けるとウキウキしていたら、戦争と物価高騰でまさかの渡航中止。厳しくメン

タルを鍛錬されながら、立派な大人になっていっています。

様々な不運に苛まれながらも、欧州ゼミでその「不運」とも考え得る世界的なアノマリーをアカデミックな視座から客観的に見つめ直し、今日のヨーロッパ、延いては世界の在り方について考える機会を得られたことは、とても貴重な経験だったと思います。これまであまり関わることのなかった経済学部の学生たちとの交流も、色々と新鮮で楽しかったです。2023年以降は大学院進学を準備し、言語社会学の研究者になることを目指していきますが、欧州ゼミで受けた刺激と培った研究スキルをさらに



錬磨し、今後も頑張って行きたいと思っております。

経済学部2年 陳 暁



GLP9 期生の陳暁です。

高校時代に金融危機の再発リスクについて研究をしたことで経済学に興味を持ち、大学では国際経済学、開発経済学を中心とする分野の実証分析にのめり込んでいます。私が経済学部GLP・欧州短期海外調査への参加を決めたのは2021年の年末でした。2021年はアメリカの外交方針が多国間主義に一変した中から始まり、パンデミック下

におけるワクチンの開発・流通、COP26 での気候変動に関する対策の策定など、様々な面において国際協力の重要性が際立った一年でした。この中で、私は欧州連合がどのように 域内の各国の利害を調整して課題を乗り越え、発展を計画しているのかを現地訪問を通じ て学びたいと考え、欧州短期海外調査を志望しました。新型コロナウイルスの感染が収束しつつある中で、去年に引き続き現地研修が中止になったことは残念でしたが、同じく日本と世界の諸事情に探究心をもつ仲間たちとの出会いの中で、未来に向けて私が社会で果たすべき役割について再考することができました。

2 基礎ゼミナール概要

経済学部2年 臼井理咲子

本ゼミでは、輪読・企業研修・論文作成・プレゼン発表・パリ大学との交流会など多岐にわたる貴重な体験を行いました。取り組んだ時系列順に、詳細をご報告させていただきます。春夏学期の初回授業では、お天気にも恵まれ、早速教室を飛び出し西キャンパスの芝生の上で円になり自己紹介や先生からゼミの概要の説明を受けました。1年を通してメンバーの仲がよく、アットホームで活気ある雰囲気の中ゼミを行うことができたのは、振り返ると、このように初回授業から自由なコミュニケーションスタイルを尊重して下さった 先生のご意向のおかげだったと感じられます。その後、数回の授業に渡り、本年度の課題図書『新しく学ぶ西洋の歴史ーアジアから考える』2016の輪読を行いました。輪読では、本書を貫くテーマである西洋とアジアの歴史の関連性について理解を深めるだけでなく、章ごと主張・コンテクストを見極め、難解な文章の本質を掴む訓練を積むことができました。

6月から8月は、本ゼミの主活動である論文の執筆を行いました。まず初めに、情報に富んだ論文書き方ガイダンスを受けたのち、実際に図書館で参考文献を選定しながら各々の研究テーマの策定を行いました。研究手法や議論の型などについてゼミ生同士でフィードバック行い各々の方向性がある程度定まったところで、執筆は自主作業に移行しました。フィードバックでは、鋭い視点から次々と的確な指摘をする仲間の姿から、大変刺激を受けました。

さらに、こうした執筆活動の間に、約5回のオンライン企業研修を行いました。(株) TDK、三菱ケミカル・ヨーロッパ、Tokio Marine Europe S.A、(株)日本航空、国際交流基金でご勤務の本校OGOBの方々からの講演を拝聴し各産業への理解を深められた他、海外で働くことが、より身近で、魅力的な選択肢に感じられるようなエピソードを多数ご紹介いただき大変印象深い時間となりました。

秋冬学期には、執筆した論文についての英文プレゼンテーションを、パリ大生との交流会での発表の準備として行いました。当初、1 月末に渡欧し現地で交流会を行う予定でしたが、残念ながら本年度もコロナウィルスや、インフレによる物価高の影響でオンライン 開催に変更となりました。ゼミ生一同、渡欧をゼミ活動のモチベーションとし大変期待し ていただけに渡欧中止は大変ショックな知らせでした。しかし、この経験を通じて日頃与えられている環境が、どのような方々からの多大なるご支援や働きかけの上で成り立っていたかということを改めて認識し、社会に出る上で大切なマインドセットを体得できたと 個人的に感じております。1年間を通して手厚いサポートをしていただいたグローバルオフィスの皆様に感謝申し上げます。

12 月の頭に行われた交流会では、一橋大学側は、各々の研究テーマプレゼンテーション発表、パリ大学側からは、芸術から社会制度など日本に関する多種多様なトピックについ ての発表が行われました。日本について研究する学生には、幼少期に見たアニメや漫画か ら日本に興味持ったという人も多く、今後日本が世界でのプレゼンスを保つためには、ソフトとハードの両面で魅力を対外発進する必要があると肌で感じました。

さらにゼミ活動の終盤には、「日本で徴兵制を受け入れること」についてディスカッションを行いました。ウクライナで今起こっていることを学び、日本で徴兵制を受け入れた場合、リアルに戦地に行くことを、個人個人がどう受け止めるか考え、意見を交換しました。この時間では、他者の意見に触れ自分のスタンス相対化する作業の中で、馴染みのなかった政治的な話題に関しても、自分も譲れない思想や意見を持っていることに気がつくことができました。ぜひ、今後チャンスがあればこうしたディスカッションを、パリ大学の方と行ってみたいと強く感じました。

最後に、本ゼミを実り多きものとしてくださったメンバー、先生方、卒業生や関係者の 皆 様に感謝申し上げます。

Chapter 2 RESEARCH & PRESENTATIONS

Difficulties of Immigrant Descendants in Education in France

Mizuki Tamura

What educational difficulties are Maghreb immigrant descendants in France likely to face?

Let's look at them from the perspective of both social class and ethnic origin.

1. Introduction

My research topic is this: "Difficulties of immigrant descendants in education in France." And, here are my research questions:

- 1. What is the reality of the school achievement gap between the descendants of immigrants and their non-immigrant counterparts?
- 2. Are current educational policies in France effective in resolving the educational difficulties that immigrant descendants tend to have?

First of all, let's take a very brief look at the history of immigration in France. After WW2, the French government started a mass introduction of immigrants for its post-war reconstruction. It declared the suspension of new immigrants several times, but even now the total number of immigrants has increased.

Next, please look at this chart. It shows the distribution of the number of immigrants by country of origin. It shows that more than half of them have non-European roots, and half of those have roots of 3 countries in the Maghreb, like Algeria, Morocco, and Tunisia.

So, from now on, I will focus on the descendants of immigrants originating from these 3 countries.

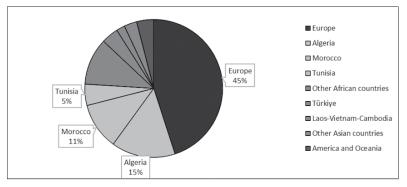


Chart 1: Distribution of the number of immigrant descendants by the original countries. (Source: INSEE, 2017)

Let's move on to school achievement of immigrant descendants.

First, let's check some basic information about school achievement. In France, to graduate from a *lycée*, which is later secondary education equivalent to high school in Japan, students must pass the nationwide standard examination called *baccalauréat*. And it is strongly related to employment after school. School achievement is mainly measured by 3 elements: standard test scores like PISA, or panel survey in 1997, the percentage of enrolment in higher education, and the percentage of *baccalauréat* degrees obtained.

For a long time, students who have immigrant roots were thought to be more likely to fail in these points, but now many studies have proved this inaccurate. In fact, taking into consideration various kinds of sociological elements like the social class or academic background of parents, immigrant descendants achieve the same level as their non-immigrant counterparts in many cases. Therefore, I think what matters is factors related to their birth class, though the immigrant origin itself cannot be ignored.

2. Difficulties of Immigrant Descendants in Education

Let's take a look at some of the difficulties of immigrant descendants in education based on this idea. In my opinion, they can be divided into 4 groups.

First, it is more difficult for the descendants of immigrants to obtain necessary information. In secondary education in France, there is a large difference in career achievement by birth class, partly because there are large differences in information obtained in each social stratum. Also, immigrant parents often have difficulty in understanding French, so it is difficult to access much information about the education system even when they have high educational aspirations for their children.

Second, there is the gap among schools or regions. This map shows the percentage of immigrants in the general population by region. The darker the colour, the higher the percentage. This gap often leads to a gap in education content. For example, regions where many students have immigrant origins may have a limited number of courses for higher education, which can narrow students' options.

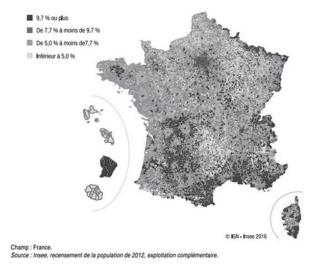


Fig.1: Distribution of immigrants in France (Source: INSEE, 2017)

Third, inequality in career guidance is said to be widening social inequality. It is usually based on the opinions of teachers and career guidance specialists. Several studies suggested the opinions are decided according to students' birth class and so on. This system often works against immigrant descendants. Also, it is pointed out that immigrant parents may lack sufficient information or experience regarding career guidance opportunities.

Finally, the discrimination against immigrants cannot be ignored. This is strongly related to a society that stigmatizes immigrants. In schools, there are subjective criteria grouped under the general category of "behaviour" and they often put students with immigrant roots, especially male students with Maghreb roots, in the worst class. Also, school officials are likely to have apprehension or negative feelings towards their parents or place of residence and often ignore them.

In addition, there are difficulties after school. One of them is employment discrimination based on name, etc. Also, there is discrimination regarding place of residence, as I mentioned. I think there is the possibility of a negative chain, namely difficulties in education, followed by employment discrimination, and then failure of social ascent, and when their children are born in the same situation, the cycle will be repeated.

3. Current Education Policies in France

Are current education policies in France effective in solving these problems?

At present, they are mainly addressed by two different policies, REP and REP+.

REP means Priority Education Networks in English, which are networks organized by secondary and primary schools facing social difficulties.

REP+ means Reinforced Priority Education Networks in English. They are organized by area,

and schools with the most severe concentration of socioeconomic difficulties and more specific circumstances must be supported.

These policies have a lot of advantages compared to previous policies like ZEP. Here are some of them. They emphasize individualized support in difficult situations, which can improve the gap among schools or regions. They provide opportunities for teachers to provide extra guidance and support to immigrant parents. And they also promote more cooperation among schools and also between schools and regions. However, there is room for improvement, of course.

4. Conclusion

To summarize, taking socioeconomic factors and social class into consideration, the gap in school achievement between immigrant descendants and their non-immigrant counterparts isn't that big. However, there are still difficulties for immigrant descendants in education in France. And today's priority education policy in France has been improved to try and solve some of these issues. Furthermore, there is room for improvement such as reducing stigmatization of selected schools.

Finally, I want to mention some educational difficulties in Japan. There are serious disparities in educational opportunities due to different socioeconomic background or regions. Also, there are invisible types of discrimination that cause difficulties for certain people. If you would like to know more, please ask later. Anyway, thank you for listening.

References

市川直子「フランスの教育制度と公民教育」文京学院大学総合研究所

『文京学院大学外国語学部紀要』第14号2015年2月, 161-179頁.

- 江口隆裕『移民政策と国民―アメリカ・フランスの同化主義か、シンガポールの多文化主義 かー』神奈川大学出版会,2021年.
- 江口隆裕「フランスにおける同化主義の意義 ―国家統合原理としての共和国的価値とその限界 ―」神奈川大学法学会『神奈川法学』第50巻第1号,2017年,1-32頁.
- 大前敦巳「フランスの学力向上策と個人化された学習支援の多様性」志水宏吉、鈴木勇編『学力政策の比較社会学国際編 PISAは各国に何をもたらしたか―」明石書店,2012年,79-98 頁.
- 厚生労働省大臣官房国際課, 2008 ~ 2009 年 海外情勢報告」諸外国における外国人労働者 対策」2010 年.

https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/10/index.html(最終閲覧日:2022年9月13日) 鈴木勇編『学力政策の比較社会学【国際編】—PISA は各国に何をもたらしたか』明石書店, 2012年, 79-98頁.

園山大祐「移民・外国人にみる中等教育の大衆化と職業参入」園山大祐編『教育の大衆化は

- 園山大祐「教育の大衆化は庶民階層にどのような教育効果をもたらしたか」園山大祐編『教育の大衆化は何をもたらしたか一フランス社会の階層と格差一』勁草書房,2016 年 「b 1-11 頁.
- 園山大祐「1980 年代以降のフランスにおける中等教育の民主化と教育不平等:庶民階層と移 民にみる進路決定要因に着目して,九州大学学位論文(博士),2018 年.
- 園山大祐「「移民系フランス人」の学業達成と庶民階層に見る進路結果の不平等―中等教 育内部 にみる自己選抜と周縁化のメカニズム―」青土社『現代思想』第45巻第7号,2017 年4月,184-197頁.
- 鳥羽美鈴「学校教育による平等・統合とその挫折」宮島喬『移民の社会的統合と排除一問わ れるフランス的平等一』東京大学出版会,2009年,91-106頁.
- 日本文部科学省『諸外国の教育統計』2021年.

https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/syogaikoku/1415074_00010.htm (最終閱覧日:2022 年9 月13 日)

- 服部憲児,田口遥「フランス優先教育政策の存在意義と今後の課題―地域に対する積極的差別是正措置の影響分析―」京都大学大学院教育学研究科『京都大学大学院教育学研 究科紀 要」第61号,2022年3月,151-175頁.
- 細尾萌子『フランスの高大接続からのヒント ―思考力・表現力と内申点の評価―』名古屋大学 大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター『名古屋大学大学院教育発 達科 学研究科附属高大接続研究センター紀要』第4号,2018年,80-110頁.
- マチュー・イシュー著,村上一基訳「移民の子どもの小学校入学から中学校卒業までの学業成績の差異」園山大祐『フランスの社会階層と進路選択一学校制度からの排除と自己選抜のメカニズムー』| 関草書房,2018年,253-292頁.
- 満足圭江「現代フランス社会における「ライシテ(政教分離)概念」の変容―イスラム子女のスカーフ問題をめぐって―」東洋哲学研究所「東洋哲学研究所紀要」第20号, 2004年.
- 森千香子「移民社会フランスの新たな挑戦」三田評論ONLINE, 2019年.
- https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/features/2019/07-5.html(最終閲覧日:2022年8月15日) 森千香子『排除と抵抗の郊外―フランス〈移民〉集住地域の形成と変容―』東京大学出版会, 2016年.
- 渡辺千尋「移民と移民政策の変遷」宮島喬『移民の社会的統合と排除―問われるフランス的 平等―』東京大学出版会, 2009 年, 31-45 頁.
- BBC NEWS, "France to lower school starting age from six to three", March 27, 2018. https://www.bbc.com/news/world-europe-43562029 (Accessed on August 17, 2022).
- INSEE, "L'essentiel sur... les immigrés et les étrangers", 2022. https://www.insee.fr/fr/statistiques/3633212#graphique-Tableau1_radio1 (Accessed on August 14, 2022)

INSEE, "recensement de la population", 2008.INSEE, "Être né en France d'un parent immigré", 2017.

Roland Bénabou, Francis Kramarz, Corinne Prost, "The French Zones d'Education Prioritaire: Much Ado About Nothing?", *Economics of Education Review* 28 (3): 345-356.

報告要旨

本レポートでは、戦後フランス社会に急増したマグレブ系移民の子孫が、その教育の過程で直面しやすい学業困難について、社会階層と民族出自の影響の両方の観点から説明する。それを踏まえて、現在の教育政策(REP,REP+)がそれらを解決するのに効果的であるものの、いまだに改善の余地があることを述べる。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

全体的に和やかな雰囲気だったと感じる。私のグループでは、最初にパリ大学の学生が 日本のロリータファッションやアイドル文化など、日本の大学生にとっても身近なテーマ をわかりやすく発表してくれたため、質疑応答も活発に行われた。一橋の学生の方は真面 目なトピックが多く、プレゼンの間はやや真面目な空気が流れていた。プレゼンの後に余った時間で、なぜ日本語を勉強しているか、日本語のどんなところが難しいかなどといった素朴な疑問をパリ大学の学生に聞くことができ、他国の学生から見た日本や日本語の印象 を知ることができて面白かった。

2. 質疑応答

- 質問:どうしてこのトピックを選んだのか。
 - ➤ 日本では移民や外国人の子どもが近年増え続けているにもかかわらず、彼らに対する 政策が「ない」ため、移民出自の子どもに対する教育の歴史が長いフランスの例を 知りたいと思ったから。

この質問の後には、コレージュに通っていたころにあった移民出自の生徒に対する差別 の一例を話してくれた。

3. プレゼンに関して

時間が気になって少し早口になってしまった。フランスの内容に関しては、その大部分を すでに知っているようだったので、内容を日本の外国人の子ども等に絞ればよかったと思う。

4. 今後の課題に関して

まずリサーチの問題設定に関して、実際に現地に住んでいるフランス人の意見を聞けるテーマに設定したのは、質疑応答の時間で実体験を聞くことができたので良かったのでは ないかと思う。ただ、「構造的差別」というセンシティブなトピックゆえに、プレゼンや質疑応答の際に少し緊張感が漂ってしまった気がする。

分析方法に関しては、見つけられた移民統計やデータが少なく、使用するデータの年代 にあまり一貫性を持たせられなかった。分析する移民の子孫の世代をもう少し限定し、使用データの時期に一貫性を持たせることが今後の課題であると考える。また、移民の子孫に関する量的データは分析に組み込めたが、個別具体的な事例を扱った質的データをうま く見つけることができず、分析に生かすことができなかった。教育における構造的差別の問題の大枠をとらえることはできたと思うので、今後は質的データの分析も組み込むことにより、リサーチに厚みを持たせたいと考える。

Environmental Policy and Smart Urban Development in the EU

Nao Tozuka

How can we make our cities both liveable and environmentally friendly?

We will look at cases from Germany and the Netherlands.

1. Introduction

In recent years, there has been a series of extreme weather events in many parts of the world. The World Meteorological Organization is of the opinion that the markedly higher temperatures and increased precipitation observed in Japan and around the world are related to the long-term trend of global warming. Under these circumstances, what kind of environmental policies are being adopted? In particular, what measures is the EU, the only regional union with its own legal system, adopting to take advantage of its uniqueness?

2. Environmental Policies in the EU and Their Impact

EU countries have been negotiating collectively under the EU One Voice and, in 2019, the EU announced the "European Green Deal" as a policy of change to achieve its goal of becoming the world's first climate-neutral continent by 2050. Moreover, the Council of the European Union adopted the "European Climate Law", making the reduction targets pledged in the Paris Agreement legally binding within the EU. Thus, the EU has taken a stance on global environmental policy at the Union level, and EU member states have introduced their own policies within the EU in order to jointly achieve their goals.

3. Smart Urban Development as an Environmental Policy

"Smart urban development" is defined here as urban development that aims not only to improve the living environment but also to solve environmental problems. In the EU, which is active in environmental initiatives, efforts are being made to develop smart cities as part of environmental policies such as the realization of a low-carbon society. The EU Operational Treaty has made it a legal obligation that environmental protection requirements must be integrated into the implementation of EU policies, especially for sustainable development. In addition, the EU is using its budget and its financial instruments for cities which try to realize the sustainable urban development.

4. Perspective from Germany: an environmentally advanced country

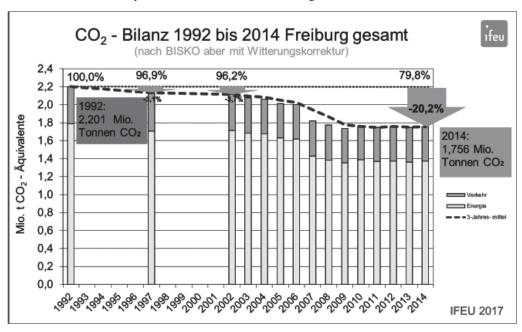
Freiburg, a regional city located in southwest Germany, is known worldwide as an

environmentally conscious city. By promoting energy-efficient housing and introducing renewable energy, the city aims to reduce CO2 emissions by 40% from the 1992 level by 2030. In terms of urban planning, Freiburg is also at the forefront of the world in its transportation policy, which prioritizes LRT (Light Rail Transit) and bicycles, and restricts the entry of automobiles into the city center. The Vauban District, a 38ha area located at the southern end of Freiburg, has been undergoing redevelopment since 1997 as a leading district in Freiburg's environmental policy.

The main characteristic is the transportation infrastructure. Two communal parking lots are located at the corners of the Vauban area, so the cars do not enter into residential areas due to the regulation of automobiles. This so-called "park-and-ride" system is intended to prevent carbon dioxide emissions from cars used by residents and tourists.

The second major characteristic of this district is that all of the housing is multi-family housing. This is based on the idea that collective housing is more energy efficient than single-family housing.

Graph 1 shows that the CO2 emissions of all sectors relative to the number of inhabitants in Freiburg decreased from 11.38 tons in 1992 to 7.97 tons in 2014. This corresponds to a decrease of 30.0% compared to 1992 emissions.



Graph1: Total CO2 emissions in Freiburg from 1992 to 2014

Source: Institut für energie und umweltforschung Heidelberg (2017)

5. Perspective from the Netherlands: an environmentally advanced country

A report on sea level rise compiled by the National Oceanic and Atmospheric Administration was released on February. According to the report, sea level rise is accelerating and is estimated to rise by 25 to 30 centimetres by 2050. The Netherlands, where approximately one-quarter of the land area is below sea level, is required to take urgent measures to deal with the threat of sea level rise. The Netherlands, which faces the challenge of rising sea levels due to environmental issues, has focused on "smart agriculture" as an environmentally friendly form of farming. For instance, they are analyzing data to automatically create a most efficient environment for plants. This reduces waste. Moreover, they actively utilize CO2 in their agriculture. In detail, CO2 is emitted during power generation, so they piped it into greenhouses to promote photosynthesis in plants.

6. Future Vision of Cities Learning from the EU

The first vision is the URBACT program. This program focuses on cooperation between EU cities on urban policies, aiming at mutual development and cooperation, which will lead to more effective development and growth of the EU as a whole. The second vision is the World cities Project: Cooperation between EU Cities and World Cities. The EU and non-member countries are working together on a wide range of areas such as technology, innovation, and environmental policy to promote sustainable development worldwide.

7. Conclusion

In conclusion, I have focused on the possibility of considering environmental policy from an urban perspective. We know that it is possible to combine smart urban development, which enriches our lives, with addressing environmental issues. Now that we are facing a common global challenge of environmental problems, countries must work together to solve them. Therefore, cooperation between EU cities and world cities is required to create environmentally friendly cities in every region. By exporting the advanced initiatives of their respective cities, we can pursue the cities which accomplish convenience of living and environmental protection at the same time.

References

浅岡美恵「【判決紹介】オランダ最高裁「危険な気候変動被害は人権侵害」科学が要請する削減 を政府に命じる『気候ネットワーク』2020年2月29日

https://www.kikonet.org/info/publication/Urgenda-climate-case

(2022年8月11日最終アクセス)

上野泰也「気候変動でオランダ最高裁が驚くべき判決『日経ビジネス』2020年1月28日国立研究開発法人情報通信研究機構「欧州におけるIoT とスマートシティの研究開発に

関する動向」2017年1月

a1489129184837.pdf(nict.go.jp)(2022年8月9日最終アクセス)

佐藤俊輔「欧州グリーンディールとその対外的側面『経団連タイムス』2022 年3 月 17 日 https://www.keidanren.or.jp/journal/times/2022/0317_14.html

(2022年9月4日最終アクセス)

ダーベル暁子「EU の炭素国境調整メカニズム『三井物産戦略研究所』2021 年12 月 https://www.mitsui.com/mgssi/ja/report/detail/_icsFiles/afieldfile/2021/12/14/2112e_darvell.pdf (2022 年9 月4 日最終アクセス)

藤堂安人「第15 回ドイツ・フライブルク市ボーバン地区 居住地区からクルマを排除」 2018年1月5日『日経BP 総研クリーンテック研究所』 https://project.nikkeibp.co.jp/atclppp/PPP/080200047/121000023/?P=2 (2022年8月9日最終アクセス)

内閣府「Society 5.0 とは」

https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/(2022年8月2日最終アクセス)

日本政府代表団「国連気候変動枠組条約締約国会合(COP26)」2021年 900518177.pdf(env.go.jp)(2022年7月30日最終アクセス)

日本貿易振興機構(ジェトロ)ブリュッセル事務所 海外調査部「『欧州グリーンディール』の 最新動向政策パッケージ「Fit for 55」の概要と気候・エネルギー目標」2021年12月 20210051.pdf(jetro.go.jp)(2022年7月30日最終アクセス)

ロナルド・ホール「欧州連合都市開発政策と国際協力」欧州委員会地域政策総局, 2016年8月 https://doc.future-city.go.jp/doc/pdf/forum/2016_06/02_05_hall_jp.pdf (2022 年8 月 13 日最終アクセス)

ワーヘニンゲンUR 農業経済報告書, 2012 年

Climate change knowledge portal (CCKP) Netherlands 12021.

Netherlands - Sea Level Rise | Climate Change Knowledge Portal (worldbank.org) (Accessed on September 4, 2022)

Europe magazine「世界の最先端を行くEU の気候変動対策」2021.

https://eumag.jp/feature/b1021/(Accessed on July 30, 2022)

Fiona Wieland URBACT launches new call European Commission, February 23, 2017. European Commission, official website (europa.eu) (Accessed on August 14, 2022)

Hans Hertle, Frank Dünnebeil 「CO2-Bilanz Energie und Verkehr für die Stadt Freiburg bis 2014」 Institut für energie und umweltforschung Heidelberg, July 27, 2017.

2014 Freiburg Klimaschutzbilanz.pdf(Accessed on August 14, 2022)

Knoema The World's Leading Exporters of Agricultural Products 2020.

The World's Leading Exporters of Agricultural Products - knoema.com (Accessed on August 14, 2022)

報告要旨

環境問題という世界共通の課題を抱える今、各国が協力してその解決に取り組まなけれ ばならない。環境先進国であるドイツやオランダの事例に基づき、私たちの生活をより豊かにするスマートな街づくりと、環境問題への対処を両立していけることが分かった。地 域レベルで先進的に取り組むEU都市と世界都市の協力によって、環境に配慮した都市を 各地に創っていくことが求められている。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

交流授業は非常に穏やかな雰囲気で行われた。プレゼンテーションについては、決められた時間内で適切な情報を伝えるため、簡潔に内容をまとめることができたとともに、地球規模で抱える問題についてその課題意識を提示できたと思う。しかし、一方的な発表になってしまったという反省点はある。パリ大学の学生たちは、プレゼンテーションの合間 に聞いている側に対していくつか質問を投げかけてくれたため、双方向でコミュニケーションをとりながら楽しんで聞くことができ、大変興味深い時間になった。パリ大学の学生は日本への関心が高く、日本の文化やアニメについての発表が印象的であった。お互いに発表をした後は、日本の好きなところや日本で行きたいところなどを気さくに話してくれたので、会話が弾んだとともに、海外の学生が抱く日本への想いに触れる有意義な機会になったと感じる。

2. 質疑応答

- 質問: ドイツにおける脱原発への取り組みが2023 年4月まで先送りされることになったが、どう思うか?
 - ➤ 日本で発生した原子力発電所の事故を受け、ドイツはメルケル政権時代からこれまで段階的に原発ゼロを目指してきた。2022 年末での脱原発の完了を目前にして、ウクライナ危機の影響によるドイツ国内で高まるエネルギー不安を理由に、原発ゼロの実現が先送りになってしまったことは、これまでの挑戦を振り返ると大変残念なことだと感じる。

プレゼンテーションを通じて扱った、街におけるエネルギー効率向上の話から、ドイツのエネルギー問題に関する質問を頂けたため、発展した内容の質疑応答になった。

3. プレゼンと今後の課題に関して

地球規模で課題となっているCO2 の排出量の増加に着目し、ヨーロッパにおける環境に負荷のかからない街づくりについて調査した。調査を進めると、ヨーロッパの中でもとく に環境先進国といわれる国々では、独自の形で環境にやさしい街を創り上げていた。実際

に各都市が導入している技術であったり、その取り組みについては文献などを通じて調査 を進めることができた。しかし、定量的なデータを見つけたうえで、街が行う取り組みと CO2 の排出量削減の直接的な因果関係を考察することが困難であった。例えば、フライブルグでは街全体としてCO2 の排出量が減少し続けていることから、集合住宅やLRT の導入といった独自の工夫が全体として良い効果に繋がっていることは考察できるものの、各取り組みがどう影響しているかという詳細な考察をすることができなかった点が反省点とし て挙げられる。それほど先行研究の多くないテーマを設定したために、数的なデータを用いて根拠づけることの難易度が上がってしまったように感じた。しかし、リサーチ全体と しては、様々な言語の文献などに目を通しながら、自らのもつ課題意識に対して深堀りを進める大変貴重な機会になったと感じた。

From Ignominy to Heritage, from Heritage to Daily Life: The Oppression and Revitalisation Effort of the Breton Language and its Asian Equivalents

Minhyoung Lee

Why did the Breton Language lose its speakers? Why is it gaining new speakers at the same time?

In this presentation, I would like to examine the social mechanisms which forced the Breton language to lose (or gain) speakers.

Moreover, by introducing the example of Taiwan, a nation which has dramatically shifted its language policy from monolingualism to multilingualism, I would also want to answer a fundamental question: "What does 'language' mean in modern society?"

1. Introduction: France as a Multilingual State

When we think of a multilingual state, France is not the first country that comes to mind. For many of us, the French language is the language of France. Period. But is that true? Do all French people speak totally homogeneous French? Did they, for hundreds and thousands of years?

The answer is no. There are various regional languages which have historically been spoken in France, and one of them is the Breton language, spoken in the peninsula named Brittany. Only a hundred years ago, almost every Breton spoke the Breton language. But currently, only less than 5% of the Breton population speak Breton on a daily basis.

It is difficult to believe that the language of a community can totally shift from one to another in a century. But that's exactly what happened in Brittany. Why and how was this possible? Will the language die out sooner or later? Let's find out.

2. The Breton Language: A Brief History

The Breton language is a Celtic language. It was brought by the Celtic immigrants from Wales and Cornwall from the late 4th Century to the 7th Century. Breton was widely spoken in both high and low society until the 11th Century, when the nobility of Brittany abandoned Breton and switched to French. Since then, Breton has always been the language of commoners, and French the language of power and nobility.

The Duchy of Brittany, which was a semi-sovereign state in the region, was annexed to the French kingdom in the late 16th Century. The French monarchy was largely indifferent about the language spoken by the lower classes but made it clear that the only official language in France should be French as part of its national unity.

This tight bond between the French identity and the French language was reinforced after the

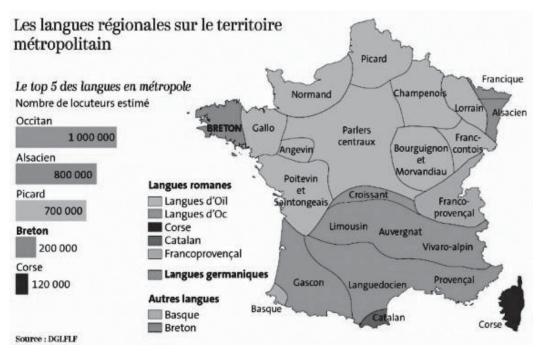


Fig 1. Regional Languages in France (Reference: Le Télégramme 2021)

French revolution. The revolution of 1789 declared French as 'the language of liberty' and required all public education to be conducted in French. On the other hand, regional languages were seen as a hindrance to national unity.

Precipitated by the lack of political and social power of Breton and negative narratives after the Revolution, the decline in the number of Breton speakers accelerated at a very rapid pace from the late 19th Century to the early 20th Century. There are three major social changes which caused the dramatic decline of the Breton speakers.

First, there is compulsory education which was introduced in 1880s. The curriculum and teaching methods were organised in French, therefore there was no room for Breton in the mandatory public education. Also, Breton speakers were punished and shamed if they spoke Breton in school, even during private conversations.

The second major social change was the introduction of conscription. In order to promote communication between soldiers from all over the nation, only French was used in the military.

The industrial revolution was a third great force for change. Industrialisation and economic growth were generally concentrated in the French-speaking areas. A lot of Breton people migrated to the bigger French-speaking cities, and the knowledge of French became essential for social success.

Due to the social changes and oppression, Breton was devalued, associated with illiteracy,

underdevelopment, poverty, and unpatriotic attitudes. On the other hand, the French language was perceived to be the key to a radiant future.

Nevertheless, the language did not completely die out. There have been movements to revitalise the language and cherish Breton as an important part of France's regional heritage and individual identity. From the beginning of the 20th Century, magazines, newspapers, and literary works started to be published in Breton. Songs and chants in Breton were sung in Fest-Noz, a revived traditional Celtic festival.

Also, there were various attempts to provide education in Breton. The most successful establishment is an immersion school Diwan, which has 55 schools and more than 4000 pupils studying in the institution at the moment.

There have also been accomplishments in the public sector. The Office for the Breton Language was recognised as an official institution in 2010. Its goal is to promote and develop the teaching and use of the Breton language in daily life.

However, these efforts have always collided with and sometimes frustrated by the French government. As the current French constitution stipulates, France has only one official language, the French language. This mindset of monolingualism has ignored the actual multilingual situation in France, and by doing so, reinforced and actualised monolingualism.

After the idea of multiculturalism started to be promulgated, France recognised its regional languages as a part of its cultural heritage in 2008, but not as a means of communication, which is what a language is meant to be originally. Last year, the immersion education in regional languages was declared unconstitutional by the Constitutional Council.

3. Taiwan as a Multilingual State

The intertwining of national identity and its single official language can be easily found on the other side of Eurasia. The relationship between Japan and the Japanese language and Korea and the Korean language resembles the relationship between France and the French language, even though there are regional languages like the Ainu language and the Ryukyu languages in Japan, or the Jeju Language in Korea. These languages were disdained during the modernisation and urbanisation period, were practically excluded from the public sector, and are at present on the verge of extinction.

Yet, there is one country in East Asia that has successfully constructed a multilingual nation. It is the Republic of China, or Taiwan. There are largely four varieties of languages spoken in Taiwan: Mandarin Chinese, Hokkien, Hakka, and Taiwan Indigenous Languages.

All these languages are recognised as Taiwan's national languages by law. They are taught at schools and spoken in official news media and regional authorities. Even in public transportation, announcements are made in four languages: Mandarin, Hokkien, Hakka, and English.

The Taiwanese government was not always this generous. After the Chinese Civil War, Chiang Kai-Shek and his capitalist Kuomintang Government fled to Taiwan. Chiang thought of Taiwan as an advance base to recapture the Chinese mainland, and under the oppressive martial law, an overall "Sinicization" policy took place. Language policy was not an exception, but at the core of it. From 1956, the use of 'Fangyan', or demoted local languages, was forbidden in public places, including school, and anyone who spoke in regional languages would face a penalty. The use of non-Mandarin languages was also prohibited or brought into derision in the broadcast media. Hokkien, Hakka, and Indigenous language speakers were discouraged from speaking in their mother tongue, and language shift took place in many families.

As the Kuomintang government lost its political power, anti-monolingualism sentiment grew. After Taiwan's full democracy was accomplished in 1987, embracing local languages became a political strategy in election campaigns to attract local populations. The Taiwan identity was redesigned as a patchwork of diverse ethnicities, and speaking local languages was no longer seen as 'unpatriotic' or 'uneducated'.

A language equity law was passed in 2018 to create a legal foundation of equal treatment of languages. However, Mandarin is still considered as a medium of communication between different ethnicities.

4. Conclusion

Considering that Brittany is a region and Taiwan is a sovereign state, at least internally, it may not be fair to compare these two examples at the same level. But both regions have experienced a rapid language shift caused by an authority with a different cultural nature. In addition, by studying these two cases, it becomes clear that language means something more than just a tool of communication. It is a part of one's personal and ethnic identity, something much more intimate and individual than so-called 'national language'.

Taiwan has become a rare example of a revived multilingual society. Could its policy switch have any implications for Brittany? Or for France as a whole? The Breton language managed to achieve a status of heritage from a state of ignominy. Can it further go from being a piece of cultural heritage to being part of daily life again? Is it appropriate?

There are no simple answers to these questions, but one thing is clear: according to the regionwide survey in 2009, 89% of the respondents replied 'Ya d'ar Brezhoneg' (Yes to Breton)'.

Thank you.

References

- 臼井盛利「フランス語の拡張と少数言語の抑圧—抑圧される側からみた言語政策史的展望」 『人文研究』第128巻, 1996年, 107-149ページ.
- 大場静枝「フランスの言語政策と地域語教育運動―ブレイス語を事例として― 『プロジェクト研究』第5号,2009年,1-13ページ.
- 佐野直子他[特集]多彩なるフランスの地域言語『ふらんす』2022年3月号,4-20ページ. 菅野敦志「台湾における「本土化」と言語政策」『アジア太平洋研究』第12 巻,2009年,223-249ページ.
- タンギ・ルアルン著、後藤澪子訳「ブレイスの言語と文化の復興」原聖編『ケルト諸語文化 の復興』三元社、2012年.
- 中川仁『戦後台湾の言語政策―北京語同化政策と多言語主義』東方書店, 2009年.
- 西山教行「言語政策」三浦信孝・西山教行編『現代フランス社会を知るための62 章』明石書店, 2010年,308-313ページ.
- 原聖「ブルトン語の抑圧と擁護―フランス第三共和制期の公教育体制と少数派言語運動」 『思想』697号, 1982年, 27-44ページ.
- 原聖『周縁的文化の変貌―ブルトン語の存続とフランス近代』三元社, 1990年.
- 松井真之介「フランスはフランス語だけじゃない?―フランスにおける『地域語』文化の 世界と現状―『多言語多文化教育研究センター主催シンポジウム 自分を知り、他者を理解する:ことばと文化が交わるとき』2022年3月2日, https://www.youtube.com/watch?v=VydWqkzc6uI&ab_channel=Myaoh.TV%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5%85%AC%E5%BC%8F%E3%83%81%E3%
- 三木一彦「フランスにおける地域言語の推移と現状―アルザス・アキテーヌ・ブルターニュを事例として―『教育学部紀要』第41 巻, 2007 年, 21-29 ページ.
- Broudic, Fañch. *Parler Breton au XXIe siècle: Le nouveau sondage de TMO-Régions*. Emgleo Breiz, 2010.

83%A3%E3%83%B3%E3%83%8D%E3%83%AB(2022 年8 月7 日にアクセス).

- Chiung, Wi-Vun Taiffalo. "Language and Ethnic Identity in Taiwan." 7th North American Taiwan Studies Conference (2001): 1-27.
- Hornsby, Michael. "The Incongruence of the Breton Linguistic Landscape for Young Speakers of Breton." *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 29, No. 2 (2008): 127-138.
- McDonald, Maryon. We Are Not French!: Language, Culture, and Identity in Brittany. Routledge: 1989.
- Meadwell, Hudson. "The politics of language: Republican values and Breton identity." *European Journal of Sociology* 31, No. 2(1990): 263-283.
- Mendel, Kerstin. "Regional Languages in France: The Case of Breton." *LSO Working Papers in Linguistics* 4 (2004): 65-75.

Ministry of Culture. "Development of National Languages Act," Laws & Regulations Database of the Republic of China (Taiwan), January 9, 2019,

https://law.moj.gov.tw/ENG/LawClass/LawAll.aspx?pcode=H0170143 (Accessed on October 16, 2022).

Ministry of Culture. "Development of National Languages Act," What We Do - Ministry of Culture, n.d.,

https://www.moc.gov.tw/en/content 373.html (Accessed on October 17, 2022).

- Ternes, Elmar. "The Breton Language." Donald MacAulay (Eds.), *The Celtic Languages* (1993): 371-452.
- Timm, Leonora A. "Modernization and Language Shift: The Case of Brittany." *Anthropological Linguistics* 15, No. 6 (1973): 281-298.
- "Enquête socio-linguistique : qui parle les langues de Bretagne aujourd'hui?," *Région Bretagne*, October 8, 2018,

https://www.bretagne.bzh/actualites/enquete-socio-linguistique-qui-parle-les-langues-de-bretagne-aujourdhui/#:~:text=Toujours% 20plus% 20de% 20200 % 20000 % 20 locuteurs&text=5%2C5%25%20de%20la%20population,depuis%20l'enqu%C3%AAte%20 de%202007. (Accessed on August 3, 2022)

"Le difficile comptage des locuteurs de langues régionales en France," *Le Télégramme*, April 7, 2021,

https://www.letelegramme.fr/dossiers/langues-regionales-la-loi-molac-examinee-par-lassemblee/le-difficile-comptage-des-locuteurs-de-langues-regionales-en-france-07-04-2021-12732028.php. (Accessed on January 29, 2023)

"Loi du 21 mai 2021 relative à la protection patrimoniale des langues régionales et à leur promotion," *Vie publique*, May 25, 2021,

 $\label{lossym} $$ $$ https://www.vie-publique.fr/loi/278001-loi-sur-les-langues-regionales-loi-molac\#:\sim:text = 25\%20mai\%202021-,Loi\%20du\%2021\%20mai\%202021\%20relative\%20\%C3\%A0\%20 la%20protection\%20patrimoniale,r%C3%A9gionales%20et%20%C3%A0%20leur%20 promotion&text=La%20proposition%20de%20loi%20apporte,enseignement%20et%20 les%20services%20publics. (Accessed on August 3, 2022)$

報告要旨

かつてはブルターニュ地方西部の全土にわたって幅広く話されていたブルトン語は、いまや人口の5%にも満たない話者を持つ少数言語に転落した。フランス政府が推し進めた単一言語主義により、ブルトン語は国家の統合を阻害する障害物および経済的後進性の象徴と考えられるようになり、その世代間伝承に失敗した。しかし、そのような状況下でもブルトン語を自らの文化的資産として認識し、言語の復興運動に取り組んだ人々がいた。

本レポートでは、フランスのような単一言語主義から脱却し、多言語社会としての新たな 国家像を提示した台湾(中華民国)の事例を紹介することで、現代社会において言語とは どのようなものなのかというより大きなテーマへと議論を拡張することを試みた。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

Zoomを通じてのパリ大学との交流会は、学生同士のコミュニケーションの時間をできるだけ確保するため尽力していただいた二人の指導教員の配慮のもと、とても自由な雰囲気の中で行われた。交流会では一橋の学生とパリ大学の学生がグループ別に集まってそれぞれ準備したプレゼンテーションを行い、質疑応答やフィードバックによって議論を続けた。後半では新しいグループを編成し、またプレゼンテーションと討議を繰り返した。

驚いた点は、日本語を専攻している学生たちが参加してくれるということは知らされていたが、誰もが期待以上の流暢な日本語で話してくれたことである。私自身も日本語を母語としないため、外国語として日本語を勉強することがいかに難しいかはよく理解しており、その上で細かい語尾や助詞の使い分けなどを気にしながら話しているところなどから、学生たちの日本と日本語への情熱がうかがわれた。

セクション後半には、時間が許す限り、プレゼンテーションの内容のみに拘らず日本での生活、日本語学習のコツ、日本語とフランス語を学ぶことの難しさなどに関して自由に話し合った。短い時間だったが、実際にパリの学生たちと交流し、彼らの興味関心と日本について知ることができてとても面白く、有意義な時間だった。

2. 質疑応答

- 質問:ブルトン語によるバカロレアの受験が可能になった。フランス政府もブルトン語などの地域言語の復興のために努力しているのではないか。
 - ➤ バカロレアをブルトン語で受験できるようになったことは私も調査を続けながら分かった。しかし、ブルトン人たちによる地道な行政への働きかけなしに、フランス中央政府が自ら進んでそのような措置に乗り出したとは考え難い。ブルトン語でのバカロレア受験は、ブルトン語復興運動に対するフランス政府の数少ない応答の一つであると考えられる。
- 質問: ブルターニュと台湾は独立すべきだと思うか。
 - ➤ 過去にブルトン語復興運動が政治的な自治運動、延いては独立運動と連携して行われたことは否めない。ただ、それに対して賛同したり異議を唱えたりすることは、私のリサーチの目的とも大きく異なるし、また適切でもないと考えられる。民族の自決権一「民族」をどう定義するかもかなり難解なところではあるが一はその民族自身に与えられなければならないし、もしブルターニュの人々が今のフランス中央政府との関係に著しい不満を抱き、現状を変えたいと思うのであれば、スコットラ

ンドのようにレファレンダムを開催して意思表示をすればいいと思う。また、台湾に関しては「一つの中国」原則に則って国家として認めていない国が多いためしばしば 看過される事実ではあるが、独自の行政・法体系・軍事力を保有する独立国に 近いということを補足しておく。

- 質問:発表者は台湾出身か、それとも台湾に出自を持つか。
 - ➤ 私は台湾出身ではなく、台湾に家族や親戚もいない。生まれも育ちも韓国である。 台湾を発表のテーマとして選択した理由は、ブルターニュとの良い比較対象になり そうな東アジアの国家・地域として最も適切であると判断したためである。台湾には 一度だけ旅行で訪れたことがあり、その時に地下鉄の中で4つの言語で車内アナウンスが流れるのを聴いて驚いた記憶があるが、その経験が今回のリサーチの糸口となった。

3. プレゼンに関して

交流会参加者の中で父親がブルターニュ出身だという学生がいた。彼のお父さんはブルトン語を勉強しているが、フランス語と全く異なるためかなり苦戦しているという話が聴けた。 ある学生は母が日本人で、母とは日本語と話しているがそれは家内だけの話で、フランスには「フランス人になるためにはフランス語を話すこと」が社会的に強く要求される雰囲気があると、自分の考えを共有してくれた。

プレゼンテーションはオンラインで行ったこともあり、あまり緊張せず準備した内容を全部きちんと伝えることができた。だんだん早口になってしまうことをよく指摘されたが、そうならないように気をつけながら話せたことは良かったと思われる。ただ、予定していた時間より少々長引いてしまったことは反省すべき点である。与えられた時間内に必要な情報だけを入れ、しかも分かりやすくプレゼンテーションを構成することはやはり至難であると感じた。

4. 今後の課題に関して

今回のリサーチでは、ブルトン語の歩んできた歴史に注目し、一つの言語文化がいかに して消滅へと向かうのか、そしてその復興運動はなぜ、どのように展開されるのかに焦点 を当てた研究を遂行した。更に台湾の事例を併置することで、ブルトン語の事例が決して特異なものではなく、権力を持つ言語としての「国語」の浮上とその反動として排除される少数言語の衰微は、近代以降から全世界で普遍的に見られる現象であることを確認した。

一つの規範言語が我々の生活の基盤になっている厳然たる事実を認めたうえで、既に仕組まれた単一言語主義による効率的なシステムを大きく改変してまで言語多様性の実現を訴えることはいかなる意味を持つのか。本レポートに即して言うと、「国家語への統一こそが現実に即していない強制的な措置によって達成された不自然なものであり、言語多様性を継承しようとすることはむしろ現状維持に対する人々の要望に応えること」であると答

えられるだろう。

しかし、現実の多言語状況を行政・司法などに反映して可視的にするための具体的なメ ソッドやアプローチに関して言うと、それぞれの言語が置かれている政治的・社会的状況が全く異なるため、絶対に当てはまる「必勝法」などないはずである。今後は、復興運動の成果とその限界が明確に表れたブルトン語の事例を参考にしながら、他の少数言語の復興活動が成功するためにはどのような戦略を取るべきかについて、個別事例の特殊な状況を 綿密に検討しながら考えていきたいと思う。

The Future of the Currency in Europe and Asia

Koki Kozu

Based on the recognition that a currency has important implications for the future of the country or the area that is using it, this report will analyse the future of the currency in Europe and Asia.

1. Introduction

Hello, everyone. My name is Koki Kozu and this is my presentation topic: "The future of the currency in Europe and Asia". I chose this topic because, in my opinion, a currency clearly has important implications for the future of the country or the area that is using it.

From this perspective, I posed these two research questions: Do you think that the Euro will have much more influence on the global world, and in Asia, on the other hand, do you think that a common currency like the Euro is realistic and could be created as well? My presentation aims to answer these questions.

2. Premise

However, in order to think about these propositions, we need to understand the present situation that is very likely to decide the future state of these two regions. So, firstly, I'm going to talk about what the Covid-19 pandemic has brought in both areas. After that, I will look at the influence of China, which is clearly one of the superpowers whose actions cannot be disregarded. Then, from these two perspectives, I will discuss the future of the currency in the two regions.

3. The Future of the Euro

3-1. The influence of the pandemic in Europe

Let's start by looking at the influence of the pandemic in Europe. As you may know, one of the biggest problems has been the expansion of the disparity between EU countries. In the early stage of the Covid-19 outbreak, these countries adopted policies that sealed their borders and gave top priority to the protection of their countries. This meant that countries with greater financial strength were able to take more favourable measures against the Corona virus. As a result, the difference in the economic power of each country became clearly evident. For instance, Italy and Spain, where tourism accounts for the majority of their income, were unable to allocate sufficient funds to the anti-Covid measures due to the decline in their income. As a consequence, their real GDP growth rate fell dramatically compared to countries such as Germany, which has a self-sustaining industrial economy.

3-2. The influence of China

Let's move on to the influence of China. This bar graph represents the amount of cross-border trade in Renminbi. You'll notice that the amount is steadily increasing. On the other hand, this pie chart shows the weights of the five currencies comprising SDR (short for Special Drawing Rights), which is a basket currency. A basket currency is a unit of currency created by weighting several different currencies, meaning that this is a virtual currency mainly used as a reserve asset. For instance, if you were to create a virtual currency consisting of the US dollar, euro, and pound, this would definitely be a basket currency. In this case, even if the exchange rate of the US dollar fluctuates sharply, the fluctuation of this basket currency would be small since the US dollar only accounts for 40% of the total. Like this, the advantage of a basket currency is that the overall fluctuation is reduced by including multiple currencies.

Back to the topic, in 2016, the RMB was added as a component of SDR and that proportion has exceeded that of Japan and the U.K. This implies that the RMB was acknowledged to have an unignorable influence on the world's finance and economic sectors. From these two graphs, it is clear that the RMB has become more and more influential.

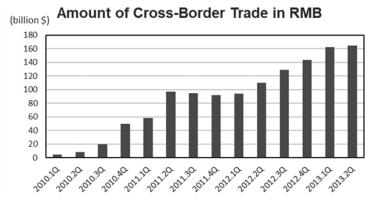


Fig 1. The amount of cross-border trade in RMB (Source: Rakuten 楽天銀行, 2013)

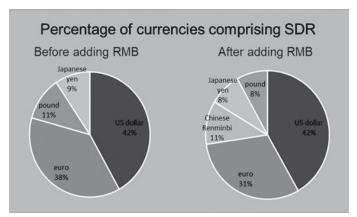


Fig 2. The percentage of currencies comprising SDR (Source: Replace The FED, 2016)

3-3. Summation

What can be said about the future of the Euro from these two sets of information is that it will be difficult to expand the use of the Euro in the future. As we just saw, the expansion of the RMB and the economic recession in the EU bloc due to the Corona pandemic will have a negative effect on the Euro for a long time. But it's not all bad news. Because of the experience of the Euro crisis, EU-wide support programs have been strengthened, and these support relatively poor countries, so there is little fear of a collapse of the EU economic bloc as was the case during the Euro crisis.

Therefore, the euro's international status will remain as it is, although it will be hard to make it more influential around the world.

4. The Future of the Currency in Asia

4-1. The influence of the pandemic in Asia

Now that I showed you my analysis regarding the Euro, I would like to move on to the currency in Asia. Likewise, let's start by looking at the effects of the Corona virus.

Actually, the damage that Asian countries incurred from it has been more or less the same as that in Europe; the isolation of each country due to the border closure and each country's prioritizing its own interests. However, what should be emphasized now is that the restriction on transportation of goods were more severe in Asia. One reason for this is the absence of supernational organizations like the EU, which has delayed the promotion of regional cooperation. ASEAN is indeed a helpful organization, but it is no more than an organization founded on cooperation between nations, so its authority is limited, which made it difficult for countries to help each other. So, please bear in mind that the logistical disruptions were more severe in Asia.

4-2. The influence of China

Next, I would like to show you again the influence of China and the RMB. China's proximity to many other foreign countries makes its influence felt even more strongly. The Belt and Road Initiative strategy currently being promoted by China includes a large area of Southeast Asia. If an RMB economic zone is created here, every single country will be forced to participate in this economic zone. However, is this participation favourable for Asian countries? The experience of the Asian currency crisis has made it clear that it is extremely dangerous to be dependent on a single currency - the dollar in that case, and in that sense, the transition from the current dollar dominated system to an RMB system will not ultimately change the danger.

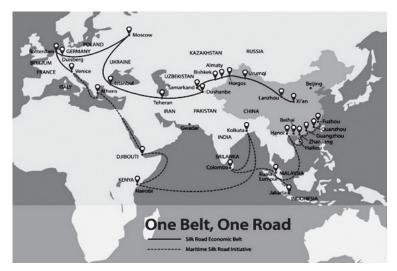


Fig 3. One Belt, One road Strategy and global relations (Source: Sphere Identity, 2018)

4-3. Summation

From this perspective, I would like to state that Asia should introduce the Asian Monetary Unit (AMU). This is a basket currency mainly used as a settlement or reserve asset. The introduction of this system will reduce exchange rate volatility and promote interregional trade, which has been stagnant during the coronavirus pandemic. Additionally, by including China as a participating country, a situation where other participants can benefit from the RMB, but not overly dependent on it can be achieved.

5. Conclusion

So, this is my conclusion; the Euro will retain its current state although it is difficult to strengthen its international role, and in Asia, the introduction of a basket currency is possible and will be beneficial to this region.

References

伊藤亜聖「コロナ以後のアジア―2020年上半期の複眼的記録―」東大社研現代中国研究拠点編『コロナ以後の東アジア―変動の力学―』「東京大学出版会, 2020.

経済産業省「第1節 コロナショック後の世界経済『通商白書2021』2021.

https://www.meti.go.jp/report/tsuhaku2021/2021honbun/i1110000.html(2022 年11 月 15 日にアクセス)。

Rakuten楽天銀行「中国人民元の魅力に迫る~中国への投資を考える~」2013.

https://www.rakuten-bank.co.jp/assets/forexdep/campaign/china/internationalization.html(2022年11月15日にアクセス)。

Replace The FED, "Solution C) CIA's solution by Jim Richards, A New Dollar Based on International Monetary Fund IMF Currency SDR"

https://replacethefed.com/solution-c-cias-solution-by-jim-rickards-a-new-dollar-based-on-international-monetary-fund-imf-currency-sdr-2/ (Accessed on November 15, 2022)

Sphere Identity, "The impact of the Belt and Road initiative on the identity technology", January 2018

https://medium.com/sphere-identity/the-impact-of-the-belt-and-road-initiative-on-the-identity-technology-11af506e229d (Accessed on November 15, 2022)

報告趣旨

本稿では、世界の中で最も緊密な経済連携を誇る地域の一つである、ヨーロッパ、アジア両地域の行く末を考察することを目的とした。それにあたり、地域を特徴づけるファクターの一つである通貨に着目し、ヨーロッパ、アジアの通貨の趨勢を議論することで、各地域の分析、考察を代表させることとした。

リサーチの結果、ヨーロッパでの主要な通貨としてのユーロは、その影響力を拡大することは困難であると結論した。一方、アジアにおいては、ヨーロッパにおけるユーロのような共通通貨が成立可能か、という視点からリサーチを行った。これに対しては、ユーロのような強固に制度化された共通通貨を構築することは非常に困難であるが、共通通貨の前段階であるバスケット通貨を導入することは、構想の余地があり、実現可能な領域だと結論づけた。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

全体としてリラックスした雰囲気であったと思う。3 ~ 4 人でブレイクアウトルームに分かれ、前後半でメンバーを入れ替える形式で討論が行われたが、少人数ということで、お互い積極的に意見を出し合うことができ、活発な議論ができたように感じる。

最初は各々の自己紹介に始まったが、その際、私のグループではパリ大学の学生の皆さんが日本語で問題ないとのことで、非常に流暢な日本語を披露してくださった。これには正直驚いた。終始日本語でのやり取りが多い中で、一橋大学生の発表を英語で行う必要性は必ずしもなかったなと思いつつも、英語でのフォーマルなプレゼンは貴重な経験になったと思う。

パリ大学の皆さんの発表は、日本の社会問題に焦点をあてたものが多く、日本の「中」で生活する我々とは違う「外」からの視点で問題を取り上げてくださり、その意味で既知の問題でも新鮮さを感じた。また、それらの問題をフランス国内のものと比較するにあたり、 現地の声という非常にリアルな形で話を聞けたのは意義深いことであった。

2. 質疑応答

- 質問:バスケット通貨とは何か?もう少し詳しく説明してほしい。
 - ➤ バスケット通貨とは、複数の通貨を加重平均して一例えば、通貨1を40%、通貨2を35%、通貨3を25%のようにして一構成できる、複数の通貨の価値から成る仮想的な通貨のことである。これは、ユーロや日本円のように一般的にお店で使うような通貨とは大きくことなり、準備資産として用いられることが多い。なぜなら、バスケット通貨は複数の通貨から構成されるので、1対1の為替レートの変動より、変動幅を抑えられるからである。

3. プレゼンに関して

時間内にプレゼンをまとめられたのは唯一良かった点だと思われる。しかし、その点以外では、話し方が冗長であったり、一方的で双方向のやり取りが欠けた発表であったりと、工夫の余地が大いにあったと悔やまれる。特に、私の発表テーマにおいて根幹をなす「バスケット通貨」という考え方については、練習段階で質問が繰り返されたため、改善を試みたものの、当日でも質問が寄せられたので伝え方や書き方が不十分だったと思われ、残念である。

4. 今後の課題に関して

リサーチに関しては、実証的な分析、データに則った客観的な分析が不十分であったため、この点を改善できるかが今後の課題である。例えば、欧州でユーロ導入前に利用されていたバスケット通貨であるECU(European Currency Unit)について、その参加国とそれぞれの通貨の比重を分析し、それを基にプレゼン内にて提案したAMUの参加国やそれらの比重を提示できれば良かったと思う。勿論、一大学二年生にできることは限られているが、一例としてでも数値で紹介できる部分があれば、現実的なスケールが数段強かったことだろうと思う。

プレゼンに関しては、前述したが、発表が一方通行になってしまった感が否めなかった。これに関して、プレゼンを始めるときにフックを設けたり、途中で聞き手の理解を確認してみたりできれば良かったと思うし、それらをするだけの余裕ができるような、ゆとりのある内容と進行にできれば良かったと思われる。

Financial Reconstruction in Germany

Chie Hu

Why did the financial reconstruction succeed in Germany from 2011-2015?

This is An analysis of the factors which led Germany to success in its financial reconstruction.

1. Introduction

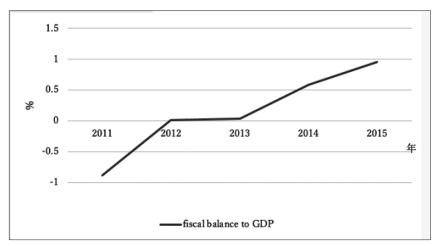
During the Cold War, Germany was divided into East Germany and West Germany. They reunited in 1990, but there was a huge wage gap between East and West Germany. The average wage in West Germany was about 4 times that of East Germany. To fill this gap, the government had implemented a series of policies, and these are three main policies aiming to close the wage gap.

First, the government adjusted the wages to the same level, so East Germans could earn as much as West Germans do. However, many companies in East Germany didn't have enough money to increase the wages, so they decided to dismiss employees. East side's unemployment rate increased from 0 to 20%, while the Western side's was at 5.7% without any big changes. They also applied unemployment benefits to all Germans including East Germany. This aimed to eliminate the social gap, but this policy worsened the financial situation of Germany by significantly increasing government spending. Public debt doubled in only 5 years from 1989 to 1995. Thirdly, they raised taxes to increase government income. This was aimed at balancing the government budget, but the negative effects prevailed over the positive, which lowered Germany's economic growth and international competitiveness.

Since Germany was facing these three difficulties, low economic growth, a high unemployment rate, and a fiscal deficit, Germany was called the "sick man of Europe" during that time. However, nowadays, Germany has a stable rate of growth, low unemployment rate and fiscal surplus. The economy has successfully recovered from that time.

2. Data

In this research, the analysis will be focused on the change in the financial budget of Germany from 2011 to 2015. The main reason is that it was the period when the debt brake rule was implemented in Germany.



Graph1: Fiscal balance to GDP in Germany (Source: 「ドイツ財政収支の推移」2022)

As Graph1 shows, the fiscal balance to GDP ratio improved from 2011 to 2015. It could be concluded that Germany had successfully balanced their income and spending. There are multiple factors that led Germany to a successful financial reconstruction, and these three are the main factors:

- The introduction of the euro
- The labour market reform
- The debt brake rule

3. First Factor - The Introduction of the Euro-

After WW2, Germany adopted the euro from 1999 and started using it from 2002. Since it was the result of a monetary union, the value of the euro is decided by the economies of all countries using it. As the economy of Germany is stronger than that of other countries, the euro become a cheap currency for Germany which didn't correctly reflect the country's economic situation.

Adopting the euro lead to stable economic growth in Germany. Since the economies of other countries in the monetary union are not as strong as Germany's, the euro is cheaper than the Mark. Since Germany is so heavily dependent on exports that 50% of its GDP comes from exports. A stable cheap currency helps Germany to increase exports and derive continuous benefits from it.

The stable economic growth after adopting the euro helped to gain support for cutting the budget. In favorable economic situation the needs for the social security decreases so it is easier to get support for budget cuts in a better economic situation. Also, when the economy has a deflationary gap, the government might need to use fiscal policy to close the gap since they can't

implement monetary policy freely. But if there is stable economic growth, there is no need for it.

Therefore, adopting the euro creates a favourable environment for the government to do financial reconstruction.

4. Second Factor - Labour Market Reform-

In the labour reform, the former Chancellor of Germany, Shroeder, implemented Agenda2010 aimed to strengthen the competitiveness of Germany. Agenda2010 includes labour reform, reform in social security, and tax reform.

In the labour reform, the time of distributing unemployment benefits was shortened. Since unemployed workers cannot rely on unemployment benefits for a long time, this gives people more incentive to search for jobs. The employment protection legislation was changed to decrease the high unemployment rate. The Meister system had been partially removed from some sectors. Creating new jobs became easier, so it is especially beneficial for the younger generation who don't have advanced skills. Also, the rules for dismissing employees were altered. The barriers to entering or leaving the labour market in different sectors were removed so the mobility and the efficiency of the labour market increased.

Therefore, Agenda2010 is effective in financial reconstruction by increasing the international competitiveness and creating a stable economy in the long term.

5. Third Factor - The Debt Brake Rule-

The debt brake rule is a new law stipulating that "The pending must balance with the income without any borrowing" which started from 2009, and implemented from 2011. From 2011 to 2015, only the basic rule was applied. The law stated that the government must make sure the structural fiscal balance to GDP is over 0.35%, and over 0.00% for local government. Check accounts are used to monitor whether the government, or the local governments achieve the goal. Next year's budget will be partially cut if their spending goes over the limit. This creates an incentive for the government to strictly follow the rules.

These are some examples of how the brake rule was applied in policy making, and how it was effective. In 2009, FDP and CDU agreed to decrease taxes, but they decided not to implement the policy since the brake rule took effect. The rule successfully stopped the financial balance from getting worse. Also, when 'the greens' (one of the left-wing parties) proposed to increase government spending by issuing public bonds, Germany's former chancellor Merkel rejected this by using the fiscal balance aim in the debt brake rule as the reason. If there is no debt brake rule, these types of spending might take place since there is less incentive for the government to control the budget. This rule might have stopped the government to get more support by increasing the unnecessary spending. They might promise to increase the amount of social security or give out

more subsidies to collect votes from citizens. But since the debt brake rule was implemented, voters might question the credibility of the candidate, which made it difficult for the government to hold these claims. This law might have changed the mindset regarding government spending, which could indirectly lead to less spending.

Therefore, the debt brake rule is effective in limiting public spending which directly leads to an improvement of the government's budget.

6. Relationship Between These Factors

Three factors which made the financial reconstruction in Germany a success are interrelated and constantly affecting each other. It was difficult to balance their budget without any of these factors.

The debt brake rule was essential. It directly balanced the fiscal accounts since it is a law which all government needs to follow. However, if there is no favourable economic situation created by the labour market reform and adoption of the euro, the debt brake rule might result in a recession. If the government implemented the debt brake rule in recession, budget cuts followed by the rules might create disagreement from the citizens. It will worsen the economic situation and the government might try to avoid following this rule. Therefore, although the debt brake rule might be the most important factor in financial reconstruction, the labour market reform and adopting the euro created the important economic environment for fiscal reconstruction.

Labour market reform and the introduction of the euro are interrelated as well. Germany's labour market reform increased the efficiency, and lowered wages, so it improved the international competitiveness of Germany. However, many mini-jobs (low-wage jobs) were created after this policy was implemented which might have limited the economic growth. But since Germany adopted the euro, they were able to achieve stable economic growth by increasing exports. On the other hand, if a labour market reform was not implemented, Germany might not be able to increase exports. Even if the currency became cheaper, strict rules in the labour market would have increased the costs of production which would have resulted in higher products prices and a lower international competitiveness of Germany.

Therefore, the introduction of the euro, the labour market reform, and the debt brake rule are factors which affect each other, and which made Germany's fiscal reconstruction a success.

References

今井民子, 2016年, ドイツの人口問題と移民, newsdigest.de.

http://www.newsdigest.de/newsde/news/featured/7775-1025/(2022年9月2日最終アクセス) 磯山友幸, 2011 年,ドイツ経済の勝因は 左派政権の「小泉改革」にあり、Wedge ONLIN (ウェッジ・オンライン).

https://wedge.ismedia.jp/articles/-/1422 (2022 年9月4 日最終アクセス)

海津政信,2019年,深刻化する景気低迷、ドイツは何を間違えたのか,NOMURA.

https://www.nomuraholdings.com/jp/services/zaikai/journal/w_201910_01.html (2022 年9月3 日最終アクセス)

唐鎌大輔,2017年,コラム:ユーロ圏を脅かす「ドイツ一強」問題=唐鎌大輔氏,Reuters. https://jp.reuters.com/article/column-forexforum-daisuke-karakama idJPKBN16208G (2022 年9 月 3 日最終アクセス)

唐鎌大輔, 2019 年,ドイツの景気が日本よりも落ち込んでいる理由,東洋経済オンライン. https://toyokeizai.net/articles/-/315001?page=2(2022 年9 月3 日最終アクセス)

熊谷徹, 2010年, 輸出で急成長!ドイツ経済.

newsdigest.de. http://www.newsdigest.de/newsde/column/dokudan/2944-831/(2022 年9月3 日最終アクセス)

厚生労働省,2020年,平成の30年間と、2040年にかけての社会の変容,令和2年版厚生労働白書。

https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/19/dl/1-01.pdf(2022年9月2日最終アクセス) 小林慶一郎, 2004年, 財政悪化、なぜ問題か, RIETI.

https://www.rieti.go.jp/jp/papers/contribution/kobayashi/21.html

(2022年9月2日最終アクセス)

財務省,2021年,日本の財政を考える、財政はどのくらい借金に依存してきたのか. https://www.mof.go.jp/zaisei/current-situation/situation-dependent.html

(2022年9月2日最終アクセス)

財務省,2021年,日本の財政を考える、「借金」の問題点.

https://www.mof.go.jp/zaisei/current-situation/situation-problem.html

(2022年9月2日最終アクセス)

財務省, 2021年, I.我が国の財政健全化目標とその変遷, II.財政健全化の必要性と取組. https://www.mof.go.jp/policy/budget/fiscal_condition/related_data/202110_02. pdf (2022 年9 月4 日最終アクセス)

財務省,2022年,財政に関する資料財務省.

https://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/condition/a02.htm#a02

(2022年9月2日最終アクセス)

時事ドットコムニュース,2021年,コロナ禍で増えた借金「1216兆円」その行き着く先は. 【政界web】:時事ドット,コム時事ドットコム.

https://www.jiji.com/jc/v4?id=20210730seikaiweb0001(2022 年9 月3 日最終アクセス)

田中信世, 2014年, ドイツの労働市場改革~改革は何をもたらしたのか, 季刊 国際貿易と 投資Summer 2014. https://iti.or.jp/kikan96/96tanakan.pdf(2022年9月4日最終アクセス)

ダルダー マイケル, 2017 年, ユーロ相場はドイツには低過ぎる、為替はECB の専管事項 = 首相, Reuters.

https://jp.reuters.com/article/germany-security-merkel-euro-idJPKBN15Y0WA (2022年9月3日最終アクセス)

土田陽介, 2020年, 東西統一から30年が経過したドイツ経済の課題, 東西統一から30年が経過したドイツ経済の課題.

https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/01/report 200127.pdf

(2022年9月2日最終アクセス)

薫貞明,2013年,ドイツでは内需拡大の好循環が生じるか,三井住友信託銀行調査月報. https://www.smtb.jp/-/media/tb/personal/useful/report-economy/pdf/19_2.pdf(2022年9月4日最終アクセス)

ドイツの財政収支の推移,世界経済のネタ帳,2022年.

https://ecodb.net/country/DE/imf ggxcnl.html (2022 年9 月4 日最終アクセス)

ドイツの人口・就業者・失業率の推移. 世界経済のネタ帳, 2022年.

https://ecodb.net/country/DE/imf persons.html (2022 年9 月4 日最終アクセス)

ドイツのGDP の推移、世界経済のネタ帳、2022 年.

https://ecodb.net/country/DE/imf gdp.html(2022年9月4日最終アクセス)

中村匡志.2012 年,ドイツ・スイスの債務ブレーキ制度とEFSF 拡充に関するドイツ保証引受 法 改 正 JETRO.

https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07000809/ch_de_saimu.pdf (2022 年9 月3 日最終アクセス)

中田一良, 2017年,日本の予算制度における財政健全化に向けた課題,三菱UFJリサーチ&コンサルティング.

 $https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2017/03/report_170321.pdf$

(2022年9月3日最終アクセス)

日本放送協会, 2022 年, あなたの「コロナ予算」かかった費用77 兆円の使い道をデータで検証 - NHK, NHK NEWS WEB.

https://www3.nhk.or.jp/news/special/covid19-money/(2022年9月2日最終アクセス)

日本放送協会, n.d. かつては"欧州の病人"、今や"一人勝ち"その国は? NHK news web. NHK NEWS WEB.

https://www3.nhk.or.jp/news/special/german-election- 2017/german-strength/ (2022 年9 月2 日最終アクセス)

橋本将司,2021年,ドイツの財政収支構造分析~日本との比較~.

http://www.iima.or.jp/docs/newsletter/2021/nl2021.18.pdf

(2022年9月4日最終アクセス)

羽森直子, n.d. ドイツ経済の構造変化とユーロ危機に関する分析, EU 及び単一通貨ユーロの貢献.

https://www.kampozaidan.or.jp/pdf/jisseki/report/281_S1.pdf (2022 年9 月2 日最終アクセス)

- Asafu-Adjaye, J and D Chakraborty. (1999), 'Export-led Growth and Import Compression: Further Time Series Evidence from LDCs', *Australian Economic Papers*.
- Bakari, Sayef. (2017). Trade and economic growth in Germany LMU. *Munich Personal RePEc Archive*. Retrieved September 3, 2022, from https://mpra.ub.uni-muenchen.de/77404/1/MPRA paper 77404.pdf
- Barysch, K. B. (2003). Germany the sick man of Europe? CENTRE FOR EUROPEAN REFORM policy brief. Retrieved June 23, 2022, from https://www.cer.eu/sites/default/files/publications/attachments/pdf/2012/policybrief_germany_man kb-5422.pdf
- Feld, Lars P.; Reuter, Wolf Heinrich. (2021). The German "debt brake": Success factors and challenges. Retrieved June 16, 2022, from https://www.econstor.eu/bitstream/10419/235568/1/1761613642.pdf
- GCEE German Council of Economic Experts (2019), The Debt Brake: Sustainable, Stabilising, Flexible, Chapter 5 in Annual Report "Dealing with Structural Change", Federal Statistical Office, Wiesbaden.
- Güngör Turan and Bernard Karamanaj. (2014). An empirical study on import, export and economic growth in Albania. *Academic Journal of Interdisciplinary Studies*. Vol. 3, No, 3, June, 2014.
- Marsh, S., & Hansen, H. (2012). Insight-the dark side of Germany's jobs miracle. Reuters.

 Retrieved September 4, 2022, from

 https://www.reuters.com/article/germany-jobs/insight-the-dark-side-of-germanys-jobs-miracle
 idINL5E8D738E20120208
- Paetz, Christoph; Rietzler, Katja; Truger, Achim. (2016). The federal budget debt brake since 2011: The real test is yet to come. *Econ.Stor*. Retrieved September 4, 2022, from https://www.econstor.eu/bitstream/10419/156379/1/870240501.pdf
- Reuters. (2019). Factbox: 'debt brake', 'black zero' Germany's fiscal rules under scrutiny. *Reuters*.

 Retrieved September 3, 2022, from

 https://www.reuters.com/article/us-germany-debt-factbox-idUSKCN1V51XU
- Reuter, W.H. (2020), Benefits and Drawbacks of an "Expenditure Rule", as well as of a "Golden Rule", in the EU Fiscal Framework, Study requested by the ECON Committee, European Parliament, Brussels.

報告要旨

日本の歳出と歳入を折れ線グラフで示した際、歳出が年々増加しているのに対し、歳入 が伸び悩んでいることから、「ワニの口」と揶揄されることがある。日本の財政は公債金に依存しており、公債金額は今後も増加していくことが見込まれている。国の借金増加は将来世代への負担の先送りとなっているだけでなく、様々な弊害が伴うことから、日本にとって重大な問題であると考える。日本政府は2002年度から国・地方のプライマリーバランスの黒字化を目標とした財政健全化目標を掲げているが、計画は幾度も頓挫し、先延ばしに されているおり、目標が形骸化している。2011年から2015年にかけてドイツがどのようにして財政再建を達成したのかを分析することで、現在の日本の事態を打開するための足掛かりを得られるのではないかと考えたため、本トピックを選択した。

本報告では、ドイツが財政黒字化を達成できた主な要因としてユーロの導入、労働市場 改革、債務ブレーキルールを分析・考察した。各政策単体では財政再建を果たすことはで きないが、要因同士が互いに影響を与え、財政再建に必要な経済基盤やインセンティブを 作り出したことが重要であると考えた。各要因についての説明とそれが財政再建に与える 影響の分析をした後、要因の相互関係について全体的な考察を行った。財政黒字化におい て、底堅い経済成長は重要であると考えられるが、間接的な要素であるため、それのみでは 財政再建を推進することが難しい。そのため、ユーロ導入や労働市場改革は間接的に財 政再 建に貢献しているが、直接的な作用を持つ債務ブレーキルールの後押しがなければ財政健全 化は成功しなかっただろう。しかし、債務ブレーキルールが形骸化することなく、財政再建 を達成することができたのはユーロ導入や労働市場改革によって底堅い経済基盤が作られた からである。このようなことから、3つの要因は互いに連携しながら財政再建を達成したと 結論づけることができた。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

討論会はzoomを通して開催された。ブレイクアウトルームに振り分けられ、各グループ 内でプレゼンテーションを行った。パリ大学の学生は皆日本語を学習していたため、英語 で会話を行う準備をしていたものの、日本語と英語で会話をすることができた。パリ大学 の学生の発表では、達磨の起源や奈良の鹿に関する問題など、日本に関する幅広いテーマ が扱われていた。日本人も知らない情報が多く説明されていたことや、日本語でプレゼンテーションを行っていたことから、日本に対して深い興味を持っていることが強く伝わり、 嬉しく思う反面、自分がフランスについて何もリサーチを行っていないことや、フランス 語が全く話せないことが、相手の国に興味を持っていないということを示しているようで 申し 訳なく感じた。

個人発表終了後に自由に交流する時間があったが、オンラインかつ初対面であったこと から、踏み込んだ話をすることができなかったと感じる。しかし、短時間で国際的な交流

を行うことができたのは貴重な機会であったと感じる。今回の討論会を通して、自分の意図することを十分に伝え、相手の考えを引き出し、スムーズな交流を行うためには、英語力だけでなく、情報発信能力や質問力を培う必要があると気付かされた。このような気づきを今後の生活に活かし、自身を高めていきたい。

2. 質疑応答

- 質問:財政再建を行った国は他にもいくつかあるが、なぜドイツについてリサーチを行 おうと思ったのか。
 - ▶財政再建を行なった国の中でドイツに焦点を当てた理由は主に2つある。1つ目は、ドイツは日本と同様に第二次世界大戦の敗戦国であり、自動車産業を主軸に戦後復興を実現した国であるからだ。自動車産業によって著しい経済成長を遂げ、自動車産業が国の経済に大きな影響を与え続けていることから、産業面において日本に類似していると考えた。2つ目は、ドイツの人口構成が日本と似ているからだ。国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年推計)によると、日本の2040年の高齢化率は35.3%(厚生労働省,2020)になると推計されており、ドイツでは、「現在のままでは、2040年にはドイツの人口の40%以上が65歳以上√今井,2016)になると予想されている。日本の財政赤字拡大は高齢化による社会保障費の増加が主な原因とされているため、同じように少子高齢化が進んでいる状況に直面しているドイツを分析することでより日本の財政再建に応用可能な足掛かりを見つけることができると考える。

3. プレゼンに関して

討論会におけるプレゼンでは、事前準備の成果を発揮できたと感じる。プレゼンの時間内にリサーチの考察部分の詳細を説明をすることができた点がよかった。しかし、事前準備において内容の取捨選択を行ったことで、バックグラウンドや3つの要因に関して満足した説明をすることができず、わかりづらかったのではないかと感じる。質疑応答の時間において、パリ大学の学生が何を質問すればいいのか困っている様子であったことから、プレゼンの内容を理解するのが難しかったのではないかと考え、背景知識に関する説明を丁寧に行う必要があったと感じた。また、聞き手に質問をすることや、聞き手の意識をひく工夫を怠っていたことから、一方的なプレゼンになってしまったと反省している。

4. 今後の課題

本研究におけるリミテーションを2つ説明する。

1 つ目は、対象とする期間が短いことだ。リサーチでは、2011 年から2015 年に対象を絞ったが、その後の推移について考察を行っていない。財政再建は困難な道のりであり、達成するには多くの協力と努力が必要であるが、財政黒字を維持することはそれ以上に難しい

のではないかと考える。理論上では、経済状況に合わせて財政出動や財政収縮を行うとされているが、実際は、政府の裁量によって決定されていることが多いため、財政収縮を行うインセンティブが少ないと考える。財政再建を実施している期間においては、それが注目されるため、気の緩みが起こりにくいが、財政再建が達成された後は、注目度の減少とともに、歳出が増加していく可能性があると考える。そのため、財政再建が成功しているかどうかを測るには、より長期的なビジョンが必要であると考える。

2 つ目は、日本に応用できるポイントを指摘することができなかった点である。本リサーチの動機がドイツの成功例から日本が学べることを探すことであった。しかし、日本の財政状況や日本の財政再建に関する法整備についてリサーチが不足していたため、日本とドイツの経済状況を細部まで比較することができず、ドイツから学べる点を報告することができなかった。日本の財政に関する論文やデータを読み解き、日本の財政状況に関する知識を得ることで、日本が今後どのような方法で財政赤字を脱却することができるのか考察することができると考える。

Religious Discrimination in France

Yuki Uno

What are the possible causes of discrimination against descendants of Maghreb immigrants in France?

Further investigation into identifying similar causes between the cases of discrimination

towards certain ethnic groups in France and Japan

1. Introduction

In recent decades, many incidents that portray the failure of integrating immigrants into France have become apparent, especially those involving Maghrebi immigrants—for example, the Islamic scarf controversy since 1989, the French riots in 2005, and the murder of Samuel Paty, a French teacher, in 2020. Why is it so difficult to achieve unity between different communities? This research investigates the possible causes of discrimination against descendants of Maghrebi immigrants.

2. The History of Immigration in France

Major countries of origin for migrants in France are Algeria, Morocco, and Tunisia, also referred to as Maghreb countries. In 2021, the French national institute of statistics, INSEE, estimated that 2.28M second-generation Maghreb immigrants live in France, which represents more than one-third of the total second-generation immigrants. The reason why France has a large population of people with a foreign origin is because during the period of reconstruction after World War II, France recruited immigrants from all over Europe, especially from former French colonies in the Maghreb like Algeria, Morocco, and Tunisia to compensate for the labour shortage. These countries declare Islam as their official religion, so the majority of the Muslim population in France are people of Maghreb origin. I want to clarify now that second-generation immigrants are people who are born in France and have at least one parent who is an immigrant; hence, they have French citizenship.

3. Cases and Studies on Discrimination against Maghrebi Immigrants

Next, I will move on to the identified cases and studies of discrimination towards French Muslims in France. Researcher Marie-Anne Valfort conducted an experiment where she submitted resumes of fictitious individuals who were all French citizens of Lebanese origin to job openings. The results conclude that the assumption that someone is Muslim rather than Christian or Jews is a significant factor in the selection and Muslim applicants are less likely to be contacted by

employers for a job interview despite them being highly educated. Discrimination is not only seen in the job market. After the 2015 terrorist attacks in Paris, there was a 223% increase in reports of abuse, which consists of verbal and physical abuse. Moreover, women wearing hijabs, a headscarf that shows religious belonging, were often the target of discrimination in public spaces.

4. Causes of Discrimination

As the research and statistics show, Islamophobia in France is salient. But, what causes the alienation of Muslims?

One possible cause could be the French Republican values. Article 1 of the constitution states that the government shall ensure the equality of all citizens before the law, without distinction of origin, race or religion. Therefore, this means that as long as you are a French citizen, criteria such as ethnicity, race, or religion that categorize individuals are negated. The dilemma of this value is that, disregarding differences to ensure equality among people can hide the inequality that already exists. State institutions are not allowed to process data of a personal nature indicating the racial or ethnic origins of persons, which makes it impossible to identify inequality in employment or in the daily life that is caused by ethnic differences.

Another possible cause is the weaponization of Laïcite by politicians. Laïcite is the constitutional principle of secularism which states that religion, along with religious symbols and attire, should be absent from the public sphere and only be expressed in the private sphere. This principle was originally meant to guarantee religious freedom, but after multiple attacks by Islamic extremists, politicians have been proposing laws that restrict religious freedoms, particularly ones that target the Muslim community. For example, in 2004, the headscarf was banned to wear in government buildings including schools and universities. In 2010, France passed a law that bans full-face coverings in public. These target Muslim women who wear them. Moreover in 2021, a new bill was passed that restricts home-schooling, online hate speech, and takes control of religious funding. These reinforcements stigmatize the Muslim community as a threat. This is problematic for those Muslims who identify themselves as French because they have a higher possibility of facing discrimination just because of their attire, even if they aren't devout Muslims.

Lastly, the effects of social media can also be discussed as a possible cause of discrimination. The algorithm will allow users to only see what they want to see, which worsens the division between people who have negative feelings towards Muslims and people who don't. Moreover, the credibility of the information released on social media cannot be verified, but those who use social media as the main source will be more likely to be influenced by rumours or extreme opinions.

5. Discrimination in Japan Based on Ethnicity:

Looking at the Case of Zainichi-Koreans

Next, I will be talking about ethnic discrimination in Japan, and then move on to the similarities between France and Japan.

In Japan, there are 270,000 Zainichi-Koreans who have the right to permanently stay in the country. They are descendants of first-generation Korean immigrants who came to Japan during the colonial period.

Mistreatment that Zainichi-Koreans have experienced is as shown on the slide. Regarding bullying, 40% of the respondents in a survey said that they experienced bullying regarding their ethnicity in elementary school. In terms of prejudice, some find it difficult to disclose their origin when talking about marriage to their partners or their partner's family. In terms of hate speech, there was an extreme case in 2010, where members of xenophobic groups attacked Kyoto Korean Daiichi Elementary School and verbally assaulted children on campus.

The possible causes of discrimination towards Zainichi are similar to the case of France. The Japanese government does not collect any data regarding hate crimes and has no way to identify the prejudices that lie in our society. Secondly, although the Hate Speech Act was passed in 2018, there is no legal validity to this law since people who engage in hate speech are not penalized for their actions. Thirdly, since Japan is a homogeneous society, we often do not recognize the discrimination that exists in our surrounding environment. For example, in a colour pencil kit, the colour light orange is labeled as "hadairo" which means skin colour. Another example is when a sumo wrestler who has won the top-division title is covered in the news, the reporter would often emphasize the nationality of the wrestler. As you can see, since Japan often categorize people or things according to certain features, Japanese people may be racist without them even realizing.

6. Similarities between France and Japan in the Context of Ethnic Discrimination

As we examine the existing discrimination in France and Japan, two similarities can be noticed. One is, governments not collecting data regarding discrimination based on ethnicity or origin. If no data regarding mistreatment are accumulated, there is no way to acknowledge that discrimination exists in the first place. Another is the lack of law enforcement. There must be heavier fines levied in order to increase the credibility of the legal risks firms or individuals run when they discriminate.

7. Conclusion

Therefore, my answer to my research question, "What are the possible causes of discrimination against descendants of Maghrebi immigrants in France?", is the downside of French Republican Values, the weaponization of Laïcite by politicians and the media. Moreover, by comparing

France and Japan, the lack of data collection and law enforcement were the apparent causes of discrimination. A possible solution other than improving these two points is the implementation of an Equality Ombudsman, a government agency that works on behalf of the government to promote equal rights and opportunities to combat discrimination.

References

岡野八代『シティズンシップの政治学』白澤社, 2003年.

河東田博「スウェーデンの新差別禁止法―スウェーデン滞在を終えて」『立教大学社会福祉 研究所ニュースレター』第29号,2009年.

木下佳人「在日韓国人若者世代の生きづらさはどのようなものか 一友人・恋人への自己開示に注目して一『社会分析』46 号, 2019 年.

塩尻和子「イスラームの栞」『月刊監査役』8月号, 2013年, p.82-83.

出入国在留管理庁「在留外国人統計(旧登録外国人統計),2021年.

https://www.moj.go.jp/isa/content/001356650.pdf (Accessed on August 16, 2022)

自治体国際化協会パリ事務所「フランスの地方時自体における社会統合政策 『CLAIR REPORT』 517 号, 2021 年, p.52.

人権教育啓発推進センター「ヘイトスピーチに関する実態調査報告書」 https://www.moj.go.jp/content/001201158.pdf, 2016 年.

谷富夫「在日韓国・朝鮮人社会の現在―地域社会に焦点をあてて」駒井洋 編『定住化する外国 人』明石書店,1995年, p.133-161.

福岡安則・金明秀『在日韓国人青年の生活と意識』東京大学出版会, 1997年.

福田邦夫「フランス労働市場と外国人労働力―アルジェリア人移民労働者を中心に『アジア 経済』21 巻6号,1980年.

宮島喬『移民の社会的統合と排除』東京大学出版会,2009年.

梁英聖『レイシズムとは何か』筑摩書房,2020年.

Adida, C. L., Laitin, D. D., & Valfort, M.-A. (2010). Identifying barriers to Muslim integration in France. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 107(52), 22384–22390. https://doi.org/10.1073/pnas.1015550107

Denueve, C., 2002, «Besoins de main-d'œuvres des entreprises et à l'immigraionquelles perspectives?» F.Héran (rapports du séminaire présidé par), *Immigration, marché du travail, intégration*, La Documentation Française.

Dubois R. 2015. 'Presse et islamophobie, qu'en est-il ?'. Le sens des images, 15. January; and Salingue J. 2012. 'Les obsessions islamiques de la presse magazine'.

(Accessed August 8, 2022)

Glasser, A. "New French report shows rise in attacks on Muslims, sustained targeting of Jews"

Human Rights First May, 6, 2016,

https://humanrightsfirst.org/library/new-french-report-shows-rise-in-attacks-on-muslims-sustained-targeting-of-jews/ (Accessed August 11, 2022)

"Immigrés et descendants d'immigrés", Insee, November 25, 2021

https://www.insee.fr/fr/statistiques/5432149?sommaire=5435421&q=immigrants (Accessed August 20, 2022)

Lajevardi, N., Oskooii, K., &Walker, H. (2002). Hate, amplified? Social media news consumption and support for anti-Muslim policies. *Journal of Public Policy*, 1-28. doi:10.1017/S0143814X22000083

"L'essentiel sur... les immigrés et les étrangers", *Insee*, August 10, 2022 https://www.insee.fr/fr/statistiques/3633212 (Accessed August 20, 2022)

Moya, M. "FORGOTTEN WOMEN: The impact of Islamophobia on Muslim women in France"

European Network Against Racism (ENAR) May, 2016,

https://www.oper.eu.org/ym.content/unleade/forgetten_women_report_france___finel.pdf

 $https://www.enar-eu.org/wp-content/uploads/forgotten_women_report_france_-_final.pdf \\ (Accessed August 20, 2022)$

報告要旨

フランス国民は、憲法第一条により法のもとでの平等が保証される。多くのマグレブ系 移民二世以降の世代はフランス国籍を取得しているフランス国民であるが、実際、労働市場や日常生活などで不当な反ムスリム差別を受けることがある。本稿では、フランスにお ける宗教的差別の原因を明らかにするとともに、差別が存在する原因の共通性を日本とフ ランスの事例を比較しながら示すことを目的とする。今回の調査の結果、フランスにおけ る民族差別の主な原因は、人種別統計の禁止、ライシテ(政教分離)を理由とした法律の制定、そしてソーシャルメディアの影響である。また、両国に共通する原因は、雇用格差や差別に関する人種別統計と差別に関する法規制が不足していることである。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

パリ大日本語学科修士1年の方々との交流会はオンラインで開催された。パリ大の学生と一橋の学生を含んだグループが作られ、それぞれがグループ内で研究発表を行なった。 私の発表するテーマが宗教差別とセンシティブな内容であることから交流会の前は、批判的な意見が来ると予想し緊張していたが、当日の雰囲気は比較的カジュアルだったため、落ち着いて話すことができた。個人的に嬉しかったこととしては、自分の研究目的と成果が相手にしっかり伝わったことである。フランスの共和国モデルやライシテを疑問視するアプローチの仕方に対して否定的な意見を述べる人はおらず、フランスの差別の現状やこのテーマに対する個人的意見を共有してくれたことで、この課題への理解がより深まった ので、とても有意義な時間を過ごせた。

今回の交流会で驚いた点は、パリ大生の日本語力の高さである。英語で質問すると、必ず日本語で返答していて、積極的に日本語を話そうとする姿勢に感銘を受けた。また、私のグループのパリ大生は、あみぐるみや少女漫画『ベルサイユの薔薇』におけるジェンダーの描写などについて発表していたことから、日本の伝統や文化への関心が高く、日本人とは異なる着眼点を持っていたことが興味深かった。

一方で、交流会を通して自分のフランスの知識が薄いことが浮き彫りになった。それぞれが発表し終わった後、フリートークの時間があったのだが、フランスの文化について深く話すことができず、大変申し訳なく思った。外国人と交流する時は、事前に相手の国のことを調べて積極的に質問したり、話を振ったりすることが大変重要だと気付かされた。

2. 質疑応答

- 相手からの質問:なぜこのテーマを選んだのか?
 - ➤ ムスリムの多いインドネシアに滞在していた経験もあり、どういう理由でイスラム教徒が差別の対象になってしまうのか興味があったため(過激派によるテロ行為の影響を除いた原因)また、フランスでは法律で人種別統計を取ることが禁止されているが、人種などのカテゴリーに人を分類することは、差別を悪化させるのか、それともなくす効果があるのか気になっていたから。
- 私からの質問:私が発表した内容は、現実とかけ離れていると思いますか?
 - ➤ 2015 年にパリ同時多発テロ事件が起きたことで、ムスリムに対して否定的に思う人 や偏見を持つ人は多いと思います。あなたが述べた差別の原因以外で言うと、マス メディアの存在があると思います。テレビ局が政治家による反移民や反イスラム的発 言を意図的に流すこともあるので、メディアによる印象操作の影響はあると思います。

3. プレゼンに関して

交流会に向けて、2ヶ月以上プレゼンの準備をしていたため、自信を持って発表することができたと思う。プレゼンが終わった後もフランスのイスラムフォビア(イスラーム嫌悪)の現状や人種差別に関する考え方についても積極的に話し合うことができたので、私の研究内容や意図が伝わっていたことが嬉しかった。ある学生が、フランスでは出身地を聞く時に、Where are you from?と聞くこともレイシストだと思われるから気をつけてねと言っていたのが興味深かった。相手が移民の親を持つフランス人で、本人がフランスに帰属意識を持っていた場合、問題になるからである。また、これは今回のプレゼンに向けて準備していた際に一橋に留学していたフランス人からもらったアドバイスだが、「ムスリム系移民」というと全てのムスリムが移民だと限定して言っているように聞こえるので、表現を変えた方がいいと言われた。日本以上にフランスでは人種や民族に関する内容を話

すときは、一つ一つの言葉に意識を向けて慎重に話す必要があるということを学び、大変 興味深かった。

反省点としては、誰に対してのプレゼンなのかをもう少し意識していれば、より良いプレゼンができたと思う。確かに私の研究の大部分はフランスにおける宗教差別についてだが、パリ大の学生はこの問題についての最低限の知識は持っているはずなので、日本における差別問題についてより時間を割いた方が、彼らの注目を集めることができたのではないかと思った。

今後の課題に関して

本研究の課題として最初に挙げられるのは、参考文献としてフランスの研究論文が不足 していることである。私は日本語と英語で書かれた論文や本を参考にしてレポートを書き上げたのだが、最新の研究は少なく、参照できる文献も限定されてしまった。この課題を解決するにはテーマに関連したフランスの研究論文を翻訳し、参考にする必要があると思 う。

二つ目の課題は、フランスと日本を比較して見つけられた共通性が他の国の一例に当てはまるかどうかを検証する必要がある。差別が存在する原因の普遍性を突き止めることができれば、この研究に新たな価値を生み出すことができるのではないだろうか。

Possibility of Free Tertiary Education

Brennan McCabe

Is free tertiary education worth it, and if so, is it achievable in Japan?

Taking a closer look at its benefits and potential costs.

1. Introduction

Hello, everyone. My presentation is about public spending on tertiary, or higher education, and whether free college is a possibility in Japan.

2. Assessment of the Present World

First, let me touch upon a recent trend in the world, where education is considered a right by the developed world. You can see this in the fourth goal of the SDGs, and many countries offer—free education up to a certain level. In Japan, however, it is only until middle school or nine years—of education, that the government completely pays for, excluding lunch, uniforms, pencils, and erasers. On the other hand, many European countries offer free tertiary education to all of their citizens, and some even pay for foreign students. You can see this in the chart here. The blue represents private, while the grey represents public. Just by looking at this chart, one may conclude that Japan's education is not so accessible for college students. Even if you study hard to get into a public university, which is subsidized by the government, you'll most likely have to pay half of the price of private, which is around 7000 dollars a year.

3. Germany as an Example

Let's take a look at Germany, a country with a similar scale in higher education. As you can see, while the budget is smaller, Germany is able to afford the nearly three million population in higher education. That is not to say the quality is bad, especially considering their economic capacity and their professors' salaries.

4. The Current Situation in Japan

So why is free higher education not achieved in Japan? Some reasons might include that colleges are simply more expensive than German ones, in terms of raw cost. Japan's universities are commercialized at a large scale, as seen before in the slide with many graphs. This is also fuelled by the accessible nature of student loans, with nearly half of Japanese students making use of them. If students can simply take out loans to pay for overpriced education, there is no economic pressure

for colleges to decrease their prices. Another reason is, for public universities in Japan, the average student-to-teacher ratio or TS ratio is more favourable to the students, which translates to higher costs.

5. Benefits of Higher Education

We all know the various benefits that a college education gives us. Salaries are by far the most famous and objective scale that can be used to assess its value. But there are many more "passive" benefits, which include, but are not limited to, skills that allow for a wider career internationally, future tax revenue for the government, and many others such as these.

6. Difficulties Implementing it in Japan

So, with these in mind, Japan should strive to make higher education free. But could they? The answer is, theoretically, yes. They definitely have the budget for it, and with major changes like nationalizing the majority of colleges and allocating more funds from primary education and research, they could make it happen. If you look at the budget of these two countries, it is obvious. They are both allocating around 5% of their annual spending to research and education, with Japan's budget being around 740 billion Euros as of this month.

I could also go into detail about how with this budget, more can arguably be done and they're rather sloppy, but to end it in the short time I have, let me ask you a more general question to consider.

7. What We Should All Consider

I would like to ask the current students and citizens here, and possibly future parents, which part of education do you believe the public should invest in? Here are some things to think about. The UK and US are both known for their prestigious universities and shockingly high tuition. While private universities do make prices go through the roof, they come with competitiveness within the schools and lead to an acceleration in the actual quality of education. Other factors too obviously have to do with this, but one reason the UK and US are said to have the best, most-known schools in the world, is arguably due to their prices.

But also, primary education is said to be very important for an individual's life. Instead of having one teacher teach some 30 students, would it be better if they got more attention, or maybe got extracurricular activities subsidized? Let me hear what you think.

References

厚生労働省「平成29年賃金構造基本統計調査」

厚生労働省『令和3年賃金構造基本統計調査』

総務省統計局『労働力調査』冷和3年

独立行政法人 日本学生支援機構『令和2 年度学生生活調査結果』

文部科学省「諸外国の統計」平成31 年版

文部科学省「学校基本調査」令和元年度

文部科学省「学校基本調査」令和3年度

文部科学省「科学技術要覧」令和2年

文部科学省『私立大学等の令和3年度入学者に係る学生納付金等調査結果』

財務省「予算はどのような分野に使われているのか」

https://www.mof.go.jp/zaisei/current-situation/index.html

OECD (2021), Education at a Glance 2021: OECD Indicators, OECD Publishing, Paris, https://doi.org/10.1787/b35a14e5-en.

Alyabyeva, A. (2019, May 8). Right to education: The case of Germany. UCLan Cyprus law blog. Retrieved September 2, 2022, from

https://lawblog.uclancyprus.ac.cy/right-to-education-the-case-of-germany/#:~:text=In%20 the%20German%20Constitution%2C%20the,includes%20the%20right%20to%20education

German Academic Exchange Service. (n.d.). Costs of education and living. www.daad.de. Retrieved September 2, 2022, from

https://www.daad.de/en/study-and-research-in-germany/plan-your-studies/costs-of-education-and-living/

Germany: Constitutional Court Rejects Challenge to Pandemic Prohibition of In-Person Classes; Finds Constitutional Right to Education. 2021. Web Page. Retrieved from the Library of Congress,

<www.loc.gov/item/global-legal-monitor/2021-12-14/germany-constitutional-court-rejects-challenge-to-pandemic-prohibition-of-in-person-classes-finds-constitutional-right-to-education/>.

Federal Ministry of Education and Research. (n.d.). Professorship. Professorship - Research in Germany. Retrieved September 2, 2022, from

https://www.research-in-germany.org/en/your-goal/advanced-research/career-options-and-dual-careers/professorship.html

Federal Statistical Office, Wiesbaden 2022 | created: 2022-08-28 / 15:31:37

https://www-genesis.destatis.de/genesis/online?operation=abruftabelleBearbeiten&levelindex =1&levelid=1661693454400&auswahloperation=abruftabelleAuspraegungAuswaehlen&auswahlverzeichnis=ordnungsstruktur&auswahlziel=werteabruf&code=21311-0001&auswahltext=

- &werteabruf=Value+retrieval#abreadcrumb
- "Student Dormitories in Germany." Study in Germany, 14 Oct. 2019, https://www.study-in-germany.de/en/community/student-dormitories-in-germany/.
- European Union Agency for Fundamental Rights. "Article 14 Right to Education." EU Charter of Fundamental Rights, 3 June 2022,
 - https://fra.europa.eu/en/eu-charter/article/14-right-education#explanations.
- German Federal Ministry of Justice, "Basic Law for the Federal Republic of Germany," Translated by: Professor Christian Tomuschat, Professor David P. Currie, Professor Donald P. Kommers and Raymond Kerr, in cooperation with the Language Service of the German Bundestag, https://www.gesetze-im-internet.de/englisch_gg/
- European Court of Human Rights,
 - https://www.right-to-education.org/sites/right-to-education.org/files/resource-attachments/ ECHR_Guide_Art_2_Protocol_1_ENG_0.pdf
- Trostel, Philip A. "It's not just the money the benefits of college education to individuals and to society." (2015).
- Chan, Roy Y. "Understanding the purpose of higher education: An analysis of the economic and social benefits for completing a college degree." Journal of Education Policy, Planning and Administration 6.5 (2016): 1-40.
- Abel, Jaison R., and Richard Deitz. "Do the benefits of college still outweigh the costs?." Current issues in economics and finance 20.3 (2014).
- Horowitz, Jonathan. "Relative Education and the Advantage of a College Degree." American Sociological Review, vol. 83, no. 4, 2018, pp. 771–801. JSTOR, https://www.jstor.org/stable/48588568. Accessed 1 Sep. 2022.
- Lawrence, Elizabeth M. "Why Do College Graduates Behave More Healthfully Than Those Who Are Less Educated?" Journal of Health and Social Behavior, vol. 58, no. 3, 2017, pp. 291–306. JSTOR, http://www.jstor.org/stable/44504742. Accessed 1 Sep. 2022.

Web 記事最終アクセス日:2023 年2 月2 日

報告要旨

近年、世界の先進国のほとんどでは教育が権利として扱われ、一定の水準までのものが 無償化されている。しかし、国によって高等教育(大学水準の教育)の扱いは大幅に変わる。 近年ではヨーロッパを中心に多くの国では大学へのアクセスが経済的により容易になって きているものの、日本やアメリカではそうとは言えない。一方で、大学教育がもたらす便 益 は、生涯年収などから多岐にわたって確認されている。実際に高等教育無償化の是非を 規模 が日本に近しいドイツをモデルに、さまざまな効用やコストの観点から検証し、日本 での実 現可能性についてリサーチを行った。

討論会報告

1. 場や学生の雰囲気

全体として、楽しい雰囲気の中有意義な2 時間を過ごせた。パリの学生が主に日本に興味を持っている方で構成され、真剣にヨーロッパを中心とした地域が日本人からどう見えるかに関心があったようだ。

ただ、一橋とパリ大学の間では課題の根幹が異なり、我々が様々な社会問題を取り上げる中、彼らは自由に日本について興味を持ったことをプレゼン形式で発表してくれた。それは短い時間の中、アカデミックになりすぎずに楽しく交流できたことに寄与しながらも、どうしても同じ立場で大学レベルでの討論をする上での障壁になったように思う。

パリ大学側の発表は、今までは気づかなかったような日本の変化や近年のトレンドについてのものが多かった。個人的に興味があるか、現地で実際にあるかなど、それぞれが興味関心で選んだテーマであっただけに、日本に住む我々の視点から自身のテーマについての経験や考えを多く聞かれた。実際に日本に来たことがある生徒もいるものの、多くの生徒が行ったことがないようだったので、彼らの目の付け所はユニークだった。それぞれが日本に興味を持つようになったきっかけも様々であり、以外にもアニメなどの知られたものではなかったため驚いた。

2. 質疑応答

時間の関係上、特に発表に対する質問はなかった。

3. プレゼンに関して

時間をかけて書き上げた長いレポートを、短い時間しか与えられずにプレゼンテーションにすることは、案の定非常に難しかった。同じ内容をわかりやすく伝えることは到底不可能だったため、全体像をデータと一緒に説明し、質疑応答という形で特に気になった部 分に対して返答していく形でのプレゼンだった。先生方やクラスメイトからの指摘を通して完成度は上がったものの、やはりフランスの学生からは今までにはなかった視点や新たな指摘を得ることができたため、プレゼンでの手応えを通じて討論会の意義を改めて実感 できた。

4. 今後の課題

何かをプレゼンという形にするということは、限られた時間で何かを噛み砕いて説明するということを最初の段階では理解できなかった。最初から物事の全体像をその意義を含めて見直すことができていれば、必要以上に情報量の多く、完成に多くの時間を要するプロジェクトにはなっていなかったはずだと思っている。今後は、物事を開始する前に理想的な結果や作業の理由について考えてから始めるように心がけたい。

French Living Standards

Takako Chisaka

Is France a wealthy country overall? We will explore this from the perspective of labour and welfare.

1. Introduction

Hello everyone! My name is Takako, I'm currently a second-year student majoring in economics. My presentation will be focusing on France's living standards from the perspective of a Japanese person living in Japan. To try to identify why the specific living standards are achieved in France, I will be focusing on labour and welfare.

2. Motive and Research Question

A thought occurred to me when I watched a Netflix show called "Emily in Paris". I'm sure a lot of you are familiar with this show, which depicted a fabulous life full of parties and events in Paris. Most characters were wearing high brand clothes every day and were living a very "sparkly" life. At first, people would probably aspire that kind of lifestyle, and would assume that living in Paris is actually full of those things. However, I heard from various people and saw on social media that this show was getting a lot of backlash for idealizing the French lifestyle too much. Then, this brought me to a question.

Are French people wealthy? From what I've heard from my French friends, my image of the French lifestyle is that the worktime is short, and people have long lunchbreaks. Comparing it with the Japanese lifestyle that I'm familiar with, I personally thought that France probably has a relatively high standard of living.

3. What Is "Wealth"?

Before I get into the actual data that I gathered, I will first define wealth in my own way. I will try to see if the French lifestyle fits into the "wealth" that I've defined. I came up with two factors that need to be met to define a country as "wealthy". The first is that most citizens must have enough money to spend freely on something more than daily goods. This would include things like traveling, dinners at restaurants, weekend shopping and so on. Second is that the majority of citizens must be satisfied with their life. This could be seen by things like their happiness level, wages, and welfare.

4. Living Standards in France

Now, I'd like to start looking into the actual living standard of France. First, please look at this map (Figure 1) published by the World Happiness Report. The scale is shown on the bottom. The redder the country is, the happier the people are. It is difficult to measure people's happiness on my own, so I used this kind of existing data to see whether French people are overall happy with their life or not. From this map, you can see that France is pretty close to orange-ish red, which means that they're relatively happy with their life.



Figure 1: World Happiness Score 2021 (Source: The World Happiness Report 2020)

Next, there is a statement published by the OECD, "Money, while it cannot buy happiness, is an important means of achieving higher living standards". Money is usually not the only factor that decides a person's happiness level, but it sure is one of the largest factors. So, please take a look at this graph (Figure 2) published in the OECD's Better Life Index of France. OECD is mostly composed of developed countries, but you can see that France has an average income that is \$4000 higher than the OECD average.



Figure 2: France's average household income (Source: OECD Better Life Index)

Lastly, I looked into a huge part of French culture, which is "vacances". This data is from 2006 so it's a little old, but I learned that 73.5% of the French citizens go on this long vacation called "vacances". Starting in August, most schools, offices, factories, and even authorities are

closed for a month. There's even a system to help people without enough money so that they will be able to go on vacation. The government would pay for their airplane tickets and so on. This suggests that French people overall have a high standard of living because most of them can go on a long vacation. It's important that this vacation is available not only for the rich, but for the poor and the middle class as well. This really helps to define the overall average life standard in France.

So, from all these data that I've collected, I concluded that the French lifestyle fits into my definition of "wealthy". Of course, France has various kinds of social issues just like other countries, but from the observations that I've made, I can conclude that France has a relatively high life standard.

5. France's Labour System

Now, I would like to explain my insights into why this type of life standard has been achieved in France. First, I focused on labour. Please look at this graph (Figure 3) also published by the OECD.



Figure 3: France's average time off (Source: OECD Better Life Index)

You can see that France has an hour more time off per day compared to the OECD average. This means that French people work an hour less compared to those in other developed countries. A difference of one hour is huge if you think about it in a 24 hours scale. Also, there's this law called "Right to Disconnect". This legally allows people to ignore work associated emails and calls on the weekends and any other days they're not at work. Lastly, the legal maximum weekly working hours in France is 35 hours. However, in Japan and Germany, they're set at a maximum of 40 hours a week. Of course, not everyone works the legally set amount of hours, some people work less, some people work even more. But it's important to note that the legally set maximum working time is less than other countries in the first place.

Also, I focused on the shift in the minimum wage in France. Since 2005, the minimum wage has been increasing mostly every year. Now, it's at 11.07 euros which is equivalent to 1540 yen. This is so much more than the highest minimum wage in Tokyo right now. It's important to note that the same minimum wage is used across the whole country in France. In Japan, the minimum wage differs between prefectures, and some prefectures have a minimum wage that is about 2 euros-worth lower than Tokyo's. This could be another reason why France as a whole country has a relatively high standard of living.

6. France's Welfare System

Next, I looked into the welfare system in France. I have learned that France spends the highest percentage of their national GDP for social spending, which means that they're spending the largest amount of money on welfare. France even exceeded the total social spending of Finland. I expected Scandinavian countries to be at the top of the list of social spending amount, so this was quite surprising to me. Also, according to the OECD, the amount of money OECD countries spend on welfare has been decreasing in the past 10 years, so it is even more impressive that France still spends this much on welfare.

So, as an example, I collected some data about the unemployment insurance policy. France and the UK have a similar policy, and they both spent the same amount of money on the policy, which was 2 billion euros. However, if you look at the amount of people who received the money from this policy in each country, you can learn that the UK distributed the money to about 400,000 more people. This means that each person in France got more money from this policy compared to the UK. This example really shows how the French welfare system is supporting its citizens so that they can achieve a relatively high life standard.

7. Comparison with Japan's Situation

Finally, I compared the data I'd collected to the ones from Japan. These two graphs (Figure 4 & 5) are also published in the OECD better life index, but from the Japan version.



Figure 4: Japan's average household income (Source: OECD Better Life Index)

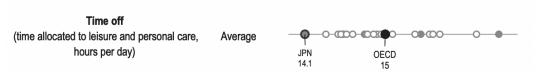


Figure 5: Japan's average time off (Source: OECD Better Life Index)

You can see that Japan's average income does exceed the OECD average, but only slightly and it is \$3000 less than France. However, the Japanese average time off is now an hour LESS than the OECD average. From what I've seen, most Japanese people don't even get 14 hours of time off per day, they work even more than this average data. Comparing these two sets of data with the ones of France, I can conclude that Japanese people work more than French people but get paid less than them.

8. Conclusion

So, from all the data that I collected, I concluded that France's lifestyle is relatively wealthy. The reason why I've been emphasizing about the relativeness is because I of course cannot conclude anything about France's overall living standards since I have never lived there, and I am also not French. However, compared to the Japanese lifestyle that I'm familiar with, I saw a big difference between the labour and welfare systems in France and Japan, which made me believe that France has a higher standard of living, comparatively speaking.

References

BBC (2015) "French work week: Do they really work less?"

https://www.bbc.com/news/34667552

Eurofound (2021) "Right to disconnect"

 $https://www.eurofound.europa.eu/observatories/eurwork/industrial-relations-dictionary/right-to-disconnect#: \sim: text = Call%20 for \%20 an \%20 EU\%20 directive, disconnect \%20 outside \%20 their \%20 working \%20 hours$

OECD (2020) "Better Life Index" https://www.oecdbetterlifeindex.org/countries/france/ OECD (2020) "How's Life in France?"

OECD (2020) "How's Life in Japan?"

Republique Français (2022) "Increase of minimum wage in France"

https://www.welcometofrance.com/en/increase-of-the-minimum-wage-in-france

World Economic Forum (2021) "These countries spend the most, and the least, on social benefits" https://www.weforum.org/agenda/2021/02/social-spending-highest-lowest-country-comparison -oecd-france-economics-politics-welfare/#:~:text=France%20remains%20the%20country%20 most,all%20spending%20more%20than%2025%25.

World Happiness Report (2020) https://worldhappiness.report/

JETRO(2022) プランスの労務知識 第6回 労働時間 1"

JETRO(2022) プランスの労務知識 第9回 解雇"

天瀬光二(2010) ドイツ・フランス・イギリスの 失業扶助制度に関する調査"

飯田 芳也 (2008) "フランスバカンス制度についての一考察日本での長期休暇普及のため に何を学ぶか"

厚生労働省"労働時間•休日"

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/roudoukijun/roudouzikan/index.html#:~:text=%E4%BD%BF%E7%94%A8%E8%80%85%E3%81%AF%E3%80%81%E5%8E%9F%E5%89%87%E3%81%A8%E3%81%97%E3%81%A6,%E3%81%AA%E3%81%91%E3%82%8C%E3%81%B0%E3%81%84%E3%81%91%E3%81%BE%E3%81%9B%E3%82%93%E3%80%82

鈴木 宏昌 (2012) プランスのバカンスと年次 有給休暇" 労働政策研究・研修機構 (2013) 賃金・労働時間・解雇法制"

https://www.jil.go.jp/foreign/basic information/france/2013/fra-4.html

(Web 記事最終アクセス日: 2023 年2 月2 日)

報告要旨

この報告書ではフランスの生活水準の実態を明らかにした上でなぜその水準が達成できているかを労働と福祉の観点から論じた。独自の『豊かさ』の定義にフランスが沿っているかを具体的なデータを用いて分析していった。結果、幸福度や賃金、バカンスの文化などの要因から、フランスの生活水準は比較的豊かだと結論づけた。その後、日本の生活水準と比較することで、日本ではフランスのような生活様式が実現できるかについても論じていった。特に、労働時間と賃金の関係性がフランスと日本とでは真逆であることが大きな発見となった。

討論会報告

1. 場や学生の雰囲気

第一印象としては、英語で話し合うと思いきや、パリ大学の方全員が流暢な日本語を話していて驚いた。実際、英語でプレゼンテーションをするかと思いきや、一つ目のブレイ クアウトルームでは「日本語でして欲しい」というリクエストがあったため、英語ではな く、日本語で一度プレゼンテーションをした。皆のテーマリストを見たときに、日本の文化にまつわる興味深いトピックが多く、できれば全部聞きたかったが、2時間弱という非常に短い時間の中で3 種類のプレゼンテーションを聞くことができた。私のプレゼンテーションはフランスの生活水準についてだったため、正直何かしらネガティブなことを指摘されるのではないかと緊張していたが、皆とてもフレンドリーで心地よい空間であった。私自身も現地のフランス人から見たフランスの生活水準の実態を聞きたかったため、意見交換できたことが嬉しかった。

また、限られた時間ではあったが、アニメなど日本文化について少しばかり語り合えたことも楽しかった。字幕なしで日本語のアニメを見ることができることに驚いたと同時に感銘を受け、私も一度挫折したフランス語の勉強を再開してみようと思うことができた。

2. 質疑応答

私のトピックがフランスの生活水準にまつわるものだったため、特に当本人からの質問はでず、コメントがメインであった。

フランスの生活水準が高いと結論づけたプレゼンテーションだったが、日本人からみて そのように見えることはとても意外かつ嬉しいとのコメントをいただいた。私自身、「実状と 違う」などのネガティブなコメントがくると思っていたため、喜んでもらえたことは嬉 しかった。一方で、フランスの貧富の差や、パリ市内とそれ以外の地域の生活の質の差な ど具体的な生活水準についても説明してもらうことができた。現にフランスで生活してい る彼らの貴重な意見を聞くことができた。

3. プレゼンテーション

プレゼンテーションでは前述したように一度目は日本語で行い、二度目は英語で行った。 それぞれ説明したかったことを全て説明することができたが、一度目のプレゼンテーション後にいただいたフィードバックを通して、二度目は改善したものを発表できたと思う。 スライド自体もゼミ内での発表練習を通して幾度も編集することで、わかりやすいものに 仕上げられたと思う。

4. 今後の課題

ゼミ内での発表練習の時点から、時間内でプレゼンテーションをまとめることが困難だった。毎回制限時間をオーバーしてしまい、時間が足りないと思うばかりだったが、短い時間の中で簡潔に多量の情報をまとめる能力も重要なのだと実感することができた。今後は、制限時間内でも十分な情報量を含めると同時にわかりやすいプレゼンテーションを作成し、発表できるよう心がけていきたい。

The Implications of the PACS (Solidarity Civil Agreement) for Japanese Society

Xiao Chen

Do we need a system which is similar to PACS in Japan?

1. Introduction

Over the last decade, many countries have made progress in the legalization of same sex marriage. In France, which has legalized same sex marriage in 2013, had implemented the PACS system as the first milestone. Do we need a system that is similar to PACS in Japan? This will be the main topic of my presentation today. My presentation will introduce the background and the evolution of PACS and its contents at the beginning, then examine possible positive and negative social reactions and finally its implications on Japanese marriages and society.

2. What is PACS?

PACS stands for "civil solidarity pact" in French and is a legal contract between adult couples. When a couple signs this contract, it grants the almost the same rights as married couples regardless of the sex. Under PACS, couples will: receive an estate tax deduction; be allowed to declare joint tax after three years; be less likely to be transferred to a remote location when either one is a government employee. PACS guarantees legal rights and financial benefits for same sex couples living together in France.

3. Historical Background

There are two main factors that pushed the creation of PACS in France. First is the increasing pressure from world-wide effort to stop the discrimination against same-sex couples. Second is the attempt to grant legal rights and benefits to heterosexual couples who live together without formal marriage.

4. Positive Impacts

PACS was a significant step forward toward full equal rights for same-sex couples. After PACS, same-sex couples can enjoy more tax benefits than ever before, such as Social Security, inheritance, and housing rental agreements. Studies have also shown that PACS also had a positive effect in the French fertility rate. In France, families with many children receive a large number of benefits and childcare is ensured. Combined with the effect that PACS brings, this has led to growth in France's overall fertility rate.

5. Problems

In the meantime, a wide range of disputes took place. Religious groups and conservative political parties oppose the civil solidarity pacts, saying PACS will destroy the traditional family system. Moreover, although PACS was a significant step forward, it still does not fully give same- sex marriages the exact same rights as opposite-sex marriages. However, once PACS was created, the government was satisfied and hesitated to make further efforts for a long period of time. Furthermore, the court did not allow same-sex couples to adopt a child and use artificial methods of reproduction.

6. Change

The French government made changes after PACS was implemented. In 2005, the difference in tax treatment between married couples was eliminated. Finally, in 2013, same-sex marriage had been officially recognized. In 2021, a law extending the assistance of reproductive technologies, including artificial insemination and in vitro fertilization to single women and female couples, was passed.

7. Implications for Japanese Society

In Japan, there has been a recent trend of local authorities issuing partnership certificates, with Shibuya City in Tokyo taking the lead. However, these certificates are not legally binding. There are still many obstacles for the legalization of same-sex marriage in Japan. It is worth exploring the implementation of a system similar to PACS in Japan. We can expect that more attention will be paid to the LGBTQ community and support for the equal rights for same-sex couples will increase. The benefits of PACS can also be enjoyed by heterosexual couples in Japan. Under the current system, it is mandatory for a couple to share the same surname when getting married. However, if a system similar to PACS is implemented in Japan, couples who do not wish to have the same surname can avoid it by taking advantage of the system. However, that there are several points to consider when introducing PACS in Japan. Studies on PACS show that creating civil pacts which are looser than legal marriage contributes to the rise of fertility rates. However, that might not because the number of couples who live together is low compared to France. In addition, surveys have shown that same-sex couples in Japan have different priorities and needs compared to those in France. For example, in Japan, while the access to medical and welfare resources and financial support has high demand from same-sex couples, they do not look positively about being bound by the duties of traditional marriage laws in Japan. Therefore, it is crucial to take these unique demands and needs of Japanese same-sex couples into consideration when exploring the feasibility of introducing a PACSlike system in the country.

8. Conclusion

In conclusion, the central idea of PACS was that it was originally aimed to provide legal security for same-sex couples. PACS has developed along with the changing needs of society. As can be seen from the current situation in Japan, the inequalities faced by the LGBTQ communities and the declining birthrate are becoming more and more problematic. The need to consider the introduction of a system like PACS in Japan to provide more rights for couples, regardless of their gender, is higher than ever. I believe that constructive discussions should be continued toward the establishment of more equal rights for same-sex couples. Thank you for listening.

References

- 井上たか子『フランス女性はなぜ結婚しないで子供を産むのか』] 勁草書房, 2012.
- 大村敦志「パクスの教訓 フランスの同性カップル保護立法をめぐって」岩村正彦,大村敦志編『個を支えるもの』東京大学出版社,2004.
- 北原零未「フランスにおけるPACS の位置づけと概況」『經濟學論纂』,中央大学経済・商業学会51巻1-2号,2011.
- 小関武史「パックスに見る現代フランスのパートナーシップのあり方」中野知律, 越智博 美編『表象されるアイデンティティ』明石書店, 2008.
- 丸山茂「PACS ―同性愛の制度的承認か?―」丸山茂『家族のメタファー ジェンダー・少子化・社会』早稲田大学出版部、2005.
- 佐藤典子「フランスのPacs 法成立と象徴闘争としての親密関係の変容」,『哲學』No. 112, 三 田哲學會, 2004.
- 栖原彌生(2005)パクスもう一つの「人権宣言」」若尾祐司・栖原彌生・垂水節子編『革命と性文化』山川出版,2005.
- 堀江有里,同性間の〈婚姻〉に関する批判的考察 日本の社会制度の文脈から 」,『社会システム研究』第27号,2010.
- 丸山茂「PACS ―その実践と問題―」『家族のメタファー ジェンダー・少子化・社会』, 早稲田大学出版部, 2005.
- 山口龍之「フランスの新家族制度・民事連帯協約 (PACS) について『沖大法学』 VOL. 21, 1990.
- ロランス・ド・ペルサン, 齊藤笑美子訳「パックス: 新しいパートナーシップの形」緑風出版, 2004.
- 第189回国会参議院本会議録第7号27頁(平27. 2. 18), https://kokkai.ndl.go.jp/#/detail?minId=118915254X00720150218¤t=1, (2022 年7 月 29 日にアクセス).

報告要旨

本報告は、フランスにおけるPACS(連帯民事協約)について、成立の経緯や内容を取り上げた上で、日本において類似制度の導入の是非について検討したものである。PACS の導入時には、宗教団体や保守層の反対、未解決の養子縁組や人口生殖の問題を抱えながら も、改善を重ね、最終的には2013 年の同性婚合法化につながった。日本においても法的強制力のないパートナーシップ制度が存在するが、同性カップルの持つ権利は未だに保証されていない。本報告では、日本社会において導入した場合の利点を検討した上で、問題点もいくつか指摘し、最終的には、PACS制度を導入するのにあたって、日本における同性カップルの具体的な要望やニーズを考える必要があると結論づけた。

パリ大討論会報告

Zoomで行われた討論会に参加できなかったため、ここでは研究発表とその課題について 報告を行う。

研究発表とその課題について

本研究では、フランスのPACS制度を日本にも導入する場合日本社会にどれほどの影響があるのか、というテーマに基づいて分析行った。研究にあたって感じた難点は、主に資料の収集と分析手法の不足の2点にまとめられる。資料の収集については、PACS に関する日本語や英語の研究調査資料が欠如していると同時に、フランスにおける婚姻制度の最新の動向を反映した研究の不在が問題となった。さらに、PACS 制度を理解するためにはフランスの婚姻制度を知る必要があり、フランスの婚姻制度の制定を分析するためにはフランスの家族観の変遷についても把握しなければならず、膨大な量の書籍や情報から研究に用いる部分を抽出することが特に困難だった。また、本来であれば政策の分析にはデータと統計学に基づいた分析が望ましくあるが、本プログラムの性質上、分析に多くの時間を割けられないということが遺憾だった。特に、PACS がフランスの出生率に対する影響に関しては、実証分析をする上で技術面での制約があったため、影響があると述べた論文を紹介するだけにとどまった。今後の研究をする上で、経済学というツールをさらに活用できるように、勉学に努めていきたい。

An Analysis of the Distribution of Seats in the European Parliament

Kazuya Kato

What are possible ways to achieve an equal distribution of seats in the European Parliament?

We will consider this from the viewpoint of two types of equality.

1. Background Information

Before I get to the point, let me give you some background information about the EU and the European Parliament so that you can better understand my presentation.

First, EU law is very unique in that it takes precedence over the laws of the EU member countries. Therefore, EU law is crucial to those countries. The European Parliament has legislative power in the EU and is deeply involved in the enactment of EU law. In addition, the Parliament has the final say on electing the President of the European Commission. Since the President is the head of the EU administration, this is another important role of the Parliament. Thus, the European Parliament has various vital roles and powers, and it goes without saying that the distribution of the number of seats that make up this Parliament is a significant issue.

Next, here is some information about the distribution of seats. First, MEPs (MEP stands for "member of the European Parliament") are elected by each member country. In other words, each country elects as many members as the number of seats it is given. The seats can vary between 6 and 96, in proportion to the population of each country. However, in reality, the distribution is not completely proportional to population, but is rather based on the principle of diminishing proportionality. This means countries with smaller populations are given more seats than the exact proportional distribution.

2. The Current Distribution of Seats

Now, let's get to the main topic. Through my presentation I would like you to think about what "equal seat allocation" means for the European Parliament and what political equality means.

The allocation of seats has been revised due to Brexit in 2019, so I will speak based on the latest number of seats. The gray bars in this figure represent the number of seats before Brexit and the blue bars represent the corresponding number after Brexit. The fewest number of seats is six, including Malta and Luxembourg, while Germany, the country with the most seats, has 96, indicating a large difference among the member countries.

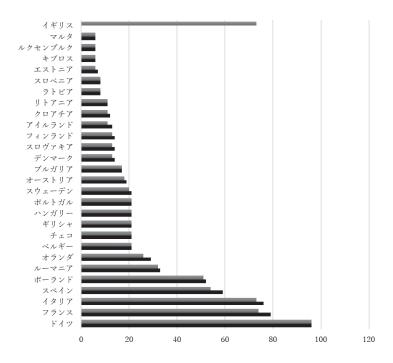


Fig.1 The current distribution of seats (Source: European Parliament 2020)

At this point, let's consider the disparity in the number of voters per representation. This graph shows the number of voters divided by the number of seats in the European Parliament. For example, in Germany, about one member of parliament is elected for every 710,000 people, while in Malta the ratio is about one per 60,000 people. This means there is a 12 times disparity in the value of a vote between Germany and Malta. In other words, it is as if each Maltese citizen has 12 votes when compared to the German citizen, which is not fair. As the graph shows, the current distribution of seats places countries with large populations at a disadvantage.

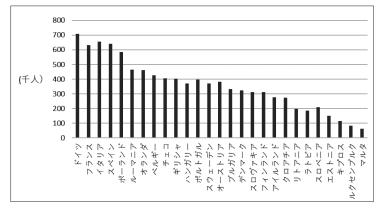


Fig.2 The disparity in the number of voters per representation (Source: 世界の統計2022, eurostat2022)

3. The Distribution of Seats Based on the Population Proportionality

Therefore, we must consider the distribution of seats based on complete population proportionality as much as possible. The following method was used here. First, divide the number of voters in each country by some constant number. Second, round that value to the nearest integer. Third, adjust the constant number so that the sum of those values equals 705 which is the current total number of seats. Using this method to determine the constant number, it was found to be 504,000.

This graph shows the number of new seats in each country when the constant is calculated as 504,000. As you can see, countries with large populations, such as Germany and France, have a significantly increased number of seats, while countries with small populations, such as Malta, have seen a considerable decrease in their number of seats.

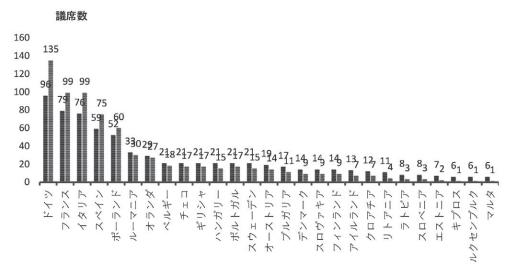


Fig.3 The distribution of seats based on the population proportionality (Source: 世界の統計2022, eurostat2022)

This graph shows the disparity in the number of voters per representation for the new distribution. You can see that it has approached a fairly equal situation. Although rounding makes this population proportion imperfect, the disparity has narrowed to a maximum of 1.86 times, compared to 12 times for the current distribution.

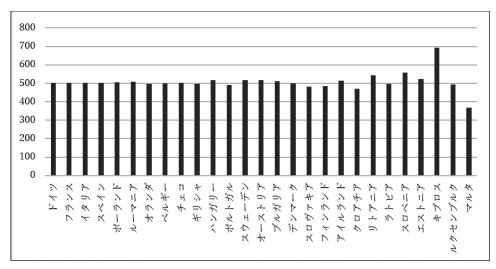


Fig.4 the disparity in the number of voters per representation for the new distribution (source: 世界の統計2022, eurostat2022)

4. Another Kind of Equality

Next, let us consider another kind of equality. Based on population proportion, the country with the largest number of seats can have an advantage in the Parliament. To take an extreme example, if a meeting is held with 50 people and 49 are from Country A and only one is from Country B, it is clear that a conclusion in favor of Country A is likely to be reached. This problem can be solved by making all member countries have the same number of seats. For example, every country has one vote, likewise in the United Nations General Assembly. This is also an equal distribution of seats in the sense that the positions and opinions of all member countries can be equally reflected.

5. A Comparison of the Two Types of Equality

In order to consider which of the two types of equality we have discussed so far should be chosen, we must think about what the European Parliament represents. However, there are actually two sides to this problem, neither of which cannot be ignored. One is the European Parliament as a representative of the EU citizens and the other as a representative of the member countries. If we give precedence to the former, complete population proportionality is appropriate, and if the latter, the same number of seats per member state is appropriate. In my opinion, a way of seat allocation that emphasizes only the equality of one or the other kind should be avoided.

6. Conclusion

Although the allocation of seats on the basis of diminishing proportionality could be

considered one of the possible compromises, I would like to propose a completely different plan here with reference to the United States Congress. That is introducing a bicameral system in the European Parliament. Specifically, one house would be composed of the same number of members elected in each country, and the other house will have seats allocated on the basis of complete population proportionality which I have already discussed. Although various issues need to be considered for the actual implementation of a proposal like this, such as the need to separate the agendas to be discussed in the two Houses, such a bicameral system could ensure the simultaneous application of the two kinds of equality, so I think this is worth considering.

References

池本大輔 •板橋拓己 •川嶋周一 •佐藤俊輔『EU 政治論―国境を越えた統治のゆくえ』有斐閣, 2020 年.

欧州連合「欧州市民年とEU 市民権」IEU MAG L 013 年3 月21 日 https://eumag.jp/feature/b0313/(最終アクセス2022 年8 月16 日) 外務省「欧州連合 (EU) 概況」

https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/eu/data.html(最終アクセス2022年8月20日)

- 一森哲男『議席配分の数理―選挙制度に潜む200年の数学―』近代科学社,2018年.
- 一森哲男「Webster 方式の偏りについて:議員定数配分問題」『日本応用数理学会論文誌』25 巻.
- 国際連合広報センター「総会』国際連合広報センター』

https://www.unic.or.jp/info/un/un organization/ga/(最終アクセス2022年8月14日)

国連広報局『国連のここが知りたい』国際連合広報センター,1998年.

国立国会図書館議会官庁資料室「EU(欧州連合)―EU 法について」『リサーチナビ 国立 国会図書館』即022 年7月21日

https://rnavi.ndl.go.jp/jp/politics/eu-law.html(2022年8月4日最終アクセス)

最高裁判所「選挙無効請求事件』「最高裁判所判例集」2017年

https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/091/087091_hanrei.pdf (最終アクセス2022 年8 月 8 日)

総務省統計局「人口・面積(4)」『世界の統計2022』2022 年3 月 https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2022al.pdf#page=15(2022 年8 月5 日最終アクセス)

総務省統計局「世界の統計2022」

滝澤祥子「欧州自動車工業会、EV 普及へ現実的な取り組みを欧州委に促す『日本貿易振興機構』2020年12月16日

https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/12/e82d4764e0e696f0.html (最終アクセス2022 年8 月 13 日)

- 田中俊郎「欧州議会選挙について教えてください」「EU MAG」 1014 年4 月 23 日 https://eumag.jp/questions/f0414/(最終アクセス2022年8月16日)
- 日本経済新聞社「区割り法が成立「1票の格差」2倍未満に『日本経済新聞』**2017**年6月9日 https://www.nikkei.com/article/DGXLASFS09H05_Z00C17A6EAF000/ (最終アクセス2022 年8 月 8 日)
- 日本経済新聞社「欧州議会選挙とは 5年に1度、EU市民が投票『日本経済新聞』2019年5月28日

https://www.nikkei.com/article/DGXKZO45345380Y9A520C1EA2000/ (最終アクセス2022 年8 月 5 日)

米国大使館「早わかり「米国の選挙」―連邦議会議員の選挙『米国国務省出版物』 https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2987/#enlist (最終アクセス2022 年8 月 19 日)

前田篤穂「欧州議会、ブレグジットに伴い議席配分を見直し『日本貿易振興機構 ビジネス 短信』2020年2月3日

https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/02/f29a566b65f98050.html

(2022 年8 月 6 日最終アクセス)

安田啓「欧州委、温室効果ガス55% 削減目標達成のための政策パッケージを発表『日本貿易振興機構』2021年7月15日

https://www.jetro.go.jp/biznews/2021/07/b625104627664e28.html (最終アクセス2022 年8 月 10 日)

安田啓「欧州会計検査院、EV 充電インフラ整備に関する報告書公表『日本貿易振興機構』 2020年4月15日

https://www.jetro.go.jp/biznews/2021/04/d26e54d68e4e3abb.html (最終アクセス2022 年8 月 13 日)

鷲江義勝『EU-欧州統合の現在』創元社,2020年.

European Commission "Eurostat 2022"

European Parliament "Redistribution of seats in the European Parliament after Brexit" *European Parliament* 2020 年1 月31 日

https://www.europarl.europa.eu/news/en/press-room/20200130 IPR71407/redistribution-of-seats-in-the-european-parliament-after-brexit

(最終アクセス2022年8月6日)

European Parliament "Rules of Procedure of the European Parliament" *European Parliament* https://www.europarl.europa.eu/doceo/document/lastrules/TOC_EN.html?redirect (最終アクセス2022 年8 月 5 日)

European Parliament "MEPs by Member State and political group" *European Parliament* https://www.europarl.europa.eu/meps/en/search/table(最終アクセス2022 年8 月 8 日)

European Union "Official Journal of the European Union, C 306, 17 December 2007" An official website of the European Union

https://eur-lex.europa.eu/legal-content/EN/TXT/?uri=OJ:C:2007:306:TOC (2022 年8 月5 日最終アクセス)

European Union An official website of the European Union 2021 年

https://eur-lex.europa.eu/legal-content/en/TXT/?uri=CELEX:52021PC0559

(最終アクセス2022年8月11日)

Ina Sokolska "The European Parliament: electoral procedures" *Fact Sheets on the European Union* 2022 年5 月(2022 年8 月4 日最終アクセス)

報告要旨

本レポートは、欧州議会の議席配分について批判的な視点から分析し、どのような議席 配分が平等といえるのかについて考察した。初めに欧州議会の議席配分が重要となる根拠 を述べ、議会の選挙制度についても確認する。そして現在の議席配分において、加盟国の間で一票の価値に大きな差があることを指摘する。そこで、現行の議席配分は人口逓減比 例の法則に基づいて行われているが、仮に完全人口比例を目指して議席配分を行えばこの問題が大幅に改善され、人口比例という点では平等性が担保される。しかしながら、完全人口比例に則れば大国が有利になってしまうという問題があるため、続いて加盟国間の立 場を平等にする観点からも議席配分を考える。結論として、上に挙げた二つの平等性はともに重要であるため、欧州議会は各加盟国の代表の集まりであるとともにEU市民の代表でもあることを踏まえると、両者を両立させる仕組みが必要になり、その一つの案として欧州議会に二院制を導入することを提案した。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

今回の討論会は、1 グループあたり5 人から6 人のブレイクアウトルームに分かれて行われ、グループのメンバーを変えて各自二回発表する形であった。私は全てのやり取りが英語で行われると思っていたので、ルームに分かれてすぐ「よろしくお願いします」と言われて驚いた。プレゼンテーションは一橋側が英語で、パリ大学の方々が日本語で発表し、質疑応答はそれぞれの発表言語で行われた。印象的だったのは、発表以外の雑談が流れで日本語を使ってやり取りされる中で、難しい用語や説明は英語で言い換えて意思疎通を図ったことである。というのも一橋大学にはたくさんの留学生がいて、授業などで英語が彼らとの共通言語としての役割を果たしていることは何度もあったが、彼らの多くは日本語も何不自由なく話すことができ、普段の会話において英語が円滑なコミュニケーションを助けているという感覚はなかった。パリ大学の学生とのやり取りでは、日本語よりも英語の方が伝えたいことを伝えやすい状況になっていたため、その違和感に感動した。

パリ大学の学生のプレゼンテーションのテーマは「達磨と仏教の禅の関連性」や「奈良公園の鹿」など親しみやすいものではあったが、知らないことばかりで聴いていて非常に面白かった。テーマとしては私たちの方が堅かったので、パリ大の学生の発表の時と私たちの発表の時では少し雰囲気が異なっていたように思えたが、いずれにしても真剣にお互いのプレゼンテーションを聞いてコメントしあっていて、とても良い雰囲気だったと思う。

2. 質疑応答

複数の質問を頂いたが、プレゼンテーションの内容をさらに深堀するような質問は出なかった。

- 質問:日本人であるあなたが何故ヨーロッパの議会の議席配分を研究の対象にしたのか?
 - ➤ 結論として特にこれといった理由はない。ただ、もともと平等の問題に関心があったことに加え、日本の高校地理ではヨーロッパの経済格差は深く学習するのに対して政治の平等性については学ばないので、欧州の政治的平等性はどのようであるか気になっていた。そのような中で欧州議会の議席数に関するネットニュースの記事をたまたま見つけたから。
- 質問:なぜ議席数に着目したのか?
 - ➤ 哲学や倫理学の分野に立ち入って議論をしようとすると、あまりに議論が難しく なったり抽象的になってしまったりする恐れがあるので、数が明確で単純に比較がしやすい議席数を分析の対象として選んだ。
- 質問:日本の選挙では一票の格差問題はないのか?
 - ➤ 日本でも選挙区の間で一票の価値に差があるという問題が発生しており、選挙のたびに議論の的になっている。ただ日本では2倍程度の格差で問題になっているのに対して、欧州議会ではプレゼンテーションで説明した通り現状最大約12倍もの格差が存在している。

3. プレゼンに関して

一回目のルームでは時間に余裕がなく用意してきたプレゼンテーションすべてを発表す る時間がなかったので、欧州議会の議席数が重要である理由や選挙制度の確認を急遽省くことになった。その結果少しわかりづらく、流れとしても唐突なものになってしまったの は否めない。ただプレゼンテーション自体は円滑に行うことができた。もう少し聞き手の 反応に気を配りたかったが、ズームの画面の中の小さな枠に映る人のリアクションを確認しながらプレゼンテーションをするのはかなり難しいと感じた。二回目のルームでは全部を発表することができたので、聞き手の反応も良かった。尺の関係でいくらか大雑把な説明で済ました箇所があったので、それらについて質問されるつもりでいたが、特にそのような質問は出ず、簡潔なプレゼンテーションとして通ったようであった。

4. 今後の課題に関して

一票の価値をそろえる、つまり人口比例の観点からアプローチする平等と、加盟国同士の立場や影響力をそろえるという平等の二つを両立する方法の一つとして二院制を欧州議会に導入することを提案したが、今後の課題としては、それ以外の解決案がないかを模索することと二院制の導入がどの程度現実的で、実際に導入するとしたら具体的には議席数等をどのように設定するのか等を考えることが挙げられる。これらを考察するにあたって、二院制の構造を持つ米国議会が参考になると考えられるので、米国議会について深く調べる必要があると考えられる。また、各国が同数の議席を持つ方の院の議席数を考えるのにあたっては、アフリカ議会の議席数など、他の国際組織の議席配分なども参考にしながら考察したい。

The Possibility of Introducing a Gender Quota System for Company Board in Japan

Risako Usui

What is expected of the women involved in order for Japanese society to accept the quota system.

We will refer to prior cases in France.

1. Introduction

One of the systems used in society as a means of resolving disparities and discrimination is positive action. This system aims to realize substantial equal opportunity by, for example, providing special opportunities to a certain extent to those disadvantaged due to social or structural discrimination. In Japan, the Equal Employment Opportunity Law was enacted in 1999 as the first positive action law. Ever since, positive actions have been introduced in various political, economic, and other fields, and they have contributed to birding the gender gaps in both Japan and other countries. Nevertheless, Japan is left behind in terms of gender equality as evidenced by various indicators such as the Gender Gap Report. While much of the previous literature points to the existence of a legally binding quota system as the reason for this gap, there is a limited body of literature that suggests means of building social consensus to enable the introduction of such a system.

This paper first introduces the quota system to increase the percentage of female managers in Japan, from a France-Japan comparison perspective. It also examines what is needed to foster social consensus building to make the introduction of a quota system possible.

2. The role of the quota system

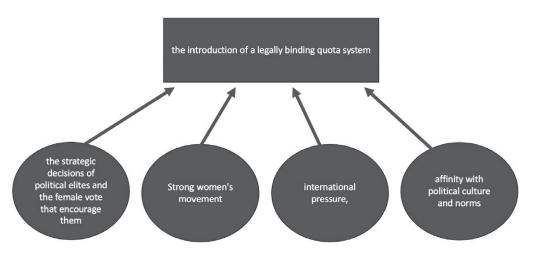
One innovative means of reducing gender disparities in Japanese companies is a gender quota system with legal implementation. A gender quota system is a positive measurement instrument aimed at accelerating the achievement of gender-balanced participation and representation by establishing a defined proportion (percentage) or several places or seats to be filled by or allocated to, women and/or men, generally under certain rules or criteria.

In France, as a result of the introduction of the director quota law with fines in 2011, the percentage of female directors rose from 7.2% in 2007 to 45.1% in 2020. Japan, on the other hand, has been on an upward trend in recent years, but still lags behind other developed countries previously, at 12.6% in 2022. Over the past decade, Japan has seen several new initiatives, such as the amendment of the law in 2014 to make it mandatory to include the number and ratio of female and male executives in integrated reports, and the formulation of the Fourth Basic Plan

for Gender Equality (2015), which aims to increase the ratio of women in managerial positions to 15% by 2020. However, none of these measures include fines or other enforceable measures as seen in France. Of course, to improve the low ratio of female executives in Japan, it is essential to simultaneously address multiple related issues such as the education system, childcare support, and male participation in childcare, but it can be inferred from the examples of other countries such as France that the introduction of a legally binding quota system will have certain numerical and tangible effects. What barriers does Japanese society face when seeking to introduce a quota system with such benefits?

3. 4 Conditions that promote quota implementation

Since quotas have already been implemented in 100 countries, there is an accumulation of research on the political conditions that promote their implementation. Krook suggests that the strategic decisions of political elites and the female vote that encourage them, international pressure, and affinity with political culture and norms are the 4 main conditions that drive society to adopt the gender quota system.



Drawn up originally based on Krook's thesis

4. What Japanese society lacks

According to Miura, of the four elements mentioned in the previous Decter, the particular problem in Japan is the lack of momentum in the women's movement. Although women's groups in Japan may be small in size, they have been able to form alliances and flexibly deal with focused issues. A wide variety of women's organizations must work together on the single issue of introducing quotas. In France, where the parité law was introduced, it is known that the debate in the parliament, cross-party solidarity and lobbying by women politicians, and discussions centered

on feminist intellectuals had a strong influence, while the social movement for the parité law by general citizens' groups played an important role (Bereni 2015). However, in Japan, there is a general agreement that not only women's movements but also social movements are generally weak in Japan. In Japan, the quota system has not yet been fully recognized by society, and therefore, the social consensus on the quota system has not yet been formed to the fullest extent, according to a previous study.

Furthermore, it is assumed that the awareness of the women themselves is also related to the low level of women's movement activity. Data is showing that women's motivation for promotion is extremely low compared to men's. The study conducted using a database of surveys of companies, managers, and general employees, conducted an empirical analysis of the determinants of the willingness of men and women to be promoted and found that the percentage of general employees who wanted to be promoted to manager or higher was 52 percentage points higher for men than for women, but a 44-point gender gap remained after adjusting for individual and company attributes.

Furthermore, when 1,065 female managers were surveyed about their motivation for being promoted to a managerial position (section manager or above), 58.7% said they were "asked by their supervisor and readily accepted," followed by 25.5% who said they were "asked by their supervisor and had no choice but to accept," and 11.9% who said they "wanted to accept (on their initiative). The fact that more than 80% of the respondents became managers at the urging of their superiors suggests that Japanese women have not yet created the conditions that would encourage them to voluntarily introduce a quota system.

5. Conclusion

In conclusion, I have first suggested that the introduction of a legally binding quota system will have tangible effects on improving gender equality in corporate boards in Japan. Despite its advantage, it was also inferred that a lack of momentum in the women's movement in Japan hold back its implementation. Indeed, Social movements are generally weak in Japan but also, the fact that women's motivation for promotion is extremely low compared to men's leads to a low level of women's movement activity. I conclude that it is necessary to create an environment where women voluntarily recognize a need for its implementation and are encouraged to express their voices to the public to build social consensus to introduce a quota system .

References

Krook, Mona Lena. \(\times \) Quotas for Women in Politics: Gender and Candidate Selection Reform Worldwide. \(\times \) Oxford University Press. 2009.

https://academic.oup.com/book/8767

Nikkei Asia 「Japan pushes to put more women in the boardroom」2018 年

https://asia.nikkei.com/Politics/Japan-pushes-to-put-more-women-in-the-boardroom

三浦まり「クオータ制と日本の課題」 国際女性 No. 27 2013

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kokusaijosei/27/1/27 96/ pdf/-char/ja

内閣府「第4次男女共同参画基本計画(平成27年12月25日決定)」

https://www.gender.go.jp/about danjo/basic plans/4th/index.html

内閣府男女共同参画局「共同参画6月号 | 2022年6月

https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2022/202206/pdf/202206.pdf

金融庁「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令(案)に対するパブリックコメントの結果等について2014年10月

https://www.fsa.go.jp/news/26/sonota/20141023-1.html

堀 江 孝 司「政治システムと社会運動への比較政治学的アプローチ―女性運動の国際比較 を題材に―(上)」

file:///Users/risakousui/Downloads/%E6%AF%94%E8%BC%83%E6%94%BF%E6%B2%BB %E5%AD%A6.pdf

村上 彩佳「フランスの性別クオータ制「パリテ」に関する社会学 的研究―女性たちの運動と 差異のジレンマに焦点を あてて |2018年

https://japanlinkcenter.org/jalc/linkSakiAnnaiOto/mRRidirect/index?doi=10.18910/69290

Adecco Group Japan 女性管理職を対象にした意識調査(2018年・2021年比較)2022年 https://www.adeccogroup.jp/pressroom/2022/0308

川口章「昇進意欲の男女比較」2012年

https://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2012/02-03/pdf/042-057.pdf

報告要旨

本プレゼンでは、まず、フランスでの事例との比較を軸に、日本の女性管理職割合を向上させる手段としてクォーター制度を紹介する。さらに、クオーター制度導入を可能とする 社会の同意形成を育むために何が必要か、デモンストレーションなどの社会運動に注目 しながら、当事者である女性目線で検討する。

パリ大学討論会報告

1. 討論会の雰囲気

パリ大学の学生が、積極的に質問を投げかけ傾聴の姿勢を絶えず見せてくださりオンライン開催ではあったものの、大変活気のある印象深い時間となった。

2. 質疑応答

● 質問:フランスの若者は、日本の若者に比べデモンストレーションやストライキなど

の社会運動に参加することに抵抗がないと聞いているが、パリ大学の皆さんの生の意見を聞きたい。

➤ 確かに、全体的な風潮としてフランスの若者が社会運動に積極的に参加する傾向があることは、正しいと思う。しかし自分自身は、少し怖いので参加したことはない(zoom のブレイクアウトルームで一緒になった3人は全員参加したことがなかった)ただ、友達からの話を聞くと、道に食べ物屋さんが出ていたり、参加者がカラーフルにメイクをしたりと半分お祭り騒ぎのようなデモもあり、政治や社会課題そのものにそこまで興味がない若者も参加しやすいと思う。

個人の意見であるため慎重な情報収集と検証が必要と考えられるものの、政治や社会課題そのものにそこまで興味がない若者も参加しやすいという雰囲気という新しい視点から、研究のさらなる発展性に期待を持つことができた。

3. プレゼンと今後の課題に関して

本プレゼンでは、日本における企業の女性管理職のクオータ制度の導入可能性について検 討した。先行文献を読み進める中で、男女格差是正に向けた政策の日仏比較研究はホッ トな話 題で、すでに多方面からの研究蓄積があるため、自身のプレゼンに新規性と独自性 をみいた すことに苦労した。そのような折、偶然一緒にお茶をしていたフランス人留学生 に「フランス から離れて生活していて一番恋しいものは何?」と尋ねた所 「料理とデモ、 フランスのデ モに久しぶりに参加したい! 」という予想外の返答に、日本とフランスにおける社会運動に 対する印象の違いを感じ取り、大変驚いた。この小さな会話をきっかけに、当事者である 市民がクオータ制度導入に向けて、どの程度主体的な動き(例えばデモ)を起こすことがで きるのか、そしてそうした活動が法改正などの実行力をもつ社会変革にど の様に結びつく のかという視点に興味を持ち、調査することにした。実際、クオータ制度 の導入には、強力 な女性運動が必要な条件であると指摘する先行文献がすぐに見つかり、 更なる仮説検証を 行うことができる可能性に期待を寄せた。しかしながら、社会運動に関する定量的なデータ の入手が困難であったため、新規制のある考察をすることができなかった点が反省点とし て挙げられる。それでもなお、日本においては、女性の昇進意欲そのものが低いため、仮に 社会運動が盛んに行われる環境が整った場合にも、クオータ制度 導入が当事者である女性 による主体的な運動のテーマとして自然発生しない可能性に触 れ、本テーマの本質的な 意義に新たな疑問を投げかけることができたと思う。

Chapter 3 OUR ONLINE FIELD TRIP

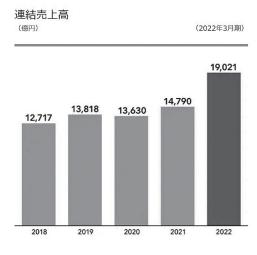
1. Special Lecture by Mr. Kariya

戸塚 菜生・田邑 瑞希

1. TDK株式会社について

TDK株式会社(以下TDK)は磁性技術で世界をリードする、総合電子部品メーカーである。 1935年12月7日設立。経営理念は「創造によって文化、産業に貢献する」であり、見えないところで「当たり前」を支えることを重視している。主な業績としては、磁性材料の一つであるフェライトを使用した磁性部品であるフェライトコアを世界ではじめて製品化したことがあげられる。フェライトは、スマートフォンやパソコン、電化製品、産業機器、自転車など日々の暮らしを豊かにするテクノロジーの進化を支えている。

現在、従業員数は116,808人で、のちに紹介するように国内外に広範なネットワークを保持している。経営の状況として、下図からわかるように連結売上高は2022年に入って大きく伸びている。



(TDK 概要」より引用)

2. TDKの事業

①ICT: 超高速・大容量ネットワーク社会の実現

TDK独自のコアテクノロジーを駆使した電子部品やセンサが、さらなるスマートフォンの進化を支えている。また、高周波・電源部品といった、高い信頼性を持つ電子部品が5G の基礎となる基地局・サーバなどの通信インフラの発展に貢献している。

②自動車

環境負荷の低減を目標に、先進運転支援システムや自動運転の実現を支援する幅広い電子部品・電子デバイスを提供している。TDKの技術により幅広い電子部品や電子デバイス

を提供し、自動車の安全性・環境対策を支えている。

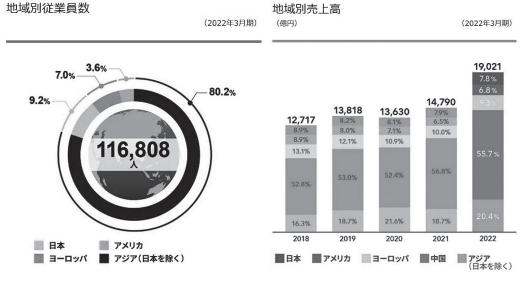
③工業用ロボット

生産効率の向上や省エネルギー化のために、高精度な工業用ロボットのニーズが高まっている中で、各種モータ用マグネットや各種センサ類の提供を通じ、生産設備のスマート化に取り組んでいる。

3. TDKのグローバル拠点について

世界中の30以上の国や地域に、工場や研究所、営業所などの拠点を設置しており、総拠点数は263カ所、従業員数は約12.9万人(2021年3月時点)である。そのうち、ヨーロッパにあるのは45カ所であり、他は中国などアジアの拠点が多い。

また、地域別従業員数と地域別売上高は以下のグラフのようになっている。



(TDK 概要 より引用)

4. 当日の研修内容について.

当日の研修は、刈谷様が送ってくださった事前資料をもとに私たちがあらかじめ考えた 質問にお答えいただく形で進められた。

事前資料の内容は主に以下のように構成されていた。

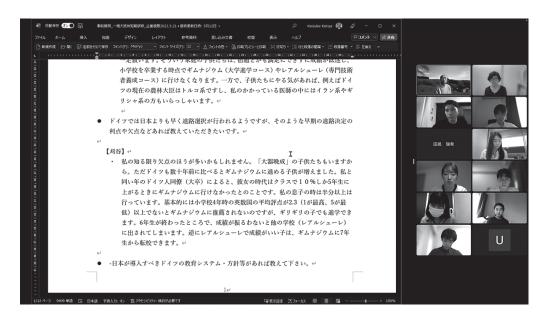
- ・ドイツという国・ドイツでの生活/生活上の注意や困難
- •ドイツの教育制度
- •ドイツのコロナ対応
- •ドイツ人から見た日本

このように、事前資料の内容は企業に関する項目があまりなく、刈谷様が長期でドイツ

に滞在する一生活者として独自に考えてくださったものが多かった。

私たち学生の考えた質問の分野は、ドイツの教育制度や産業/経済、移民問題をはじめとする政治、そしてウクライナ紛争の影響など多岐にわたるものであったが、刈谷様はその一つ一つに非常に丁寧にお答えくださった。またそのような相互の問答を通じて新たにドイツと日本の自然災害や経済、ドイツ企業におけるジェンダー平等など、幅広い分野に関連した多くの質問が生まれたが、その都度刈谷様はご自身の経験をふまえてお答えくだ。さった。

最後に刈谷様から私たち学生へ「とにかくまずは思い切って外に出て、自分の目や肌で海外を感じること、そしていろいろなことに興味をもって柔軟に生きること」の大切さについてメッセージをいただき、研修は終了した。



5. 感想

法学部3年 戸塚 菜牛

日本では小学校から高校まで、ある程度カリキュラムに沿って全国で同様の教育を受け、高校卒業時に専門学校への進学を決めたり、大学の学部の選択をしたりするのと比べ、ドイツでは進路の決定がかなり早い段階で行われることで、長い期間にわたり専門性の高い教育を受けられるように感じました。そのような教育制度があることによって、高い専門性をもってテクノロジー分野などで世界をけん引していけるのだと思いました。また、現地で20年以上勤めていらっしゃる方の実体験とともに、ドイツと日本の具体的な労働環境の違いをお聞きし、その差異は大変印象深いものでした。完璧主義な日本という国では、なかなかドイツのような労働環境の整備は難しいと感じますが、コロナウイルス感染症の流行に伴って働き方や働く場所の変化が起こっている今なら、広い意味で働き方の変革と

して日本の労働環境も改善していけるフェーズにあるのではないかと思いました。良い労働環境について明確な解はないものの、ある国にとっての「あたりまえ」が他の国ではそうでない中で、各国の労働者らが労働環境の改善を追求する余地は十分に残されていると感じました。

また、ドイツにおける労働に加え、ドイツ国民が日常的に行う環境対策についての話もお聞きし、現在、テクノロジーを使った環境に配慮した都市開発や街づくりについて調査している中で、省エネ住宅やリサイクル活動など、環境先進国であるドイツで行われている環境対策を世界に応用していく可能性についても考える機会になりました。

社会学部2年 田邑 瑞希

私はEU諸国の教育制度に関心があるので、ドイツでの進路選択や教育の現状について 伺えて大変勉強になりました。特に、Duales Studium の制度を知ることができてよかった です。以前、世界各国の高等教育の実情と課題点について論じた本を読んだとき、多くの 国の高等教育が理論偏重型であり、身につけた知識を実践する機会に乏しいため結果的に学生た ちが自分の学んだことと実社会での実践とを結びつけることができなくなること が、問題 として挙げられていたことを思い出しました。Duales Studium の制度はそういった問題へ の一つの解決策となりうるのではないかと考えました。もちろん、自分が学んで いる分野以外の企業で実習するのが難しいため、制度の入り口となる段階で専門性により ある程度将来の選択肢が絞られてしまうという点や、一度始めると3 年間は続ける必要があり、途中で やめる場合には自分で学費を負担しなければならないという点などが時には問題となる可能性が考えられますが、日本でも実験的にこの制度を採り入れる価値は十分 にあると感じました。

また、このような社会制度に関するお話以外にも、実際にドイツに住んでいらっしゃる 方にしかわからないお話を多く聞けて、大変勉強になりました。例えば、難民に対してのスタンス(憲法には「難民の保護」が規定されているし、受け入れも積極的に行っているけれどもドイツの文化を守りたい気持ちも強いこと)や、ウクライナからの難民を受け入れることによどのような心理的 な違いや、社会統合に関する違いがあるのかをうかがって、自分の研究テーマに取り入れ られそうな視点を新たに見つけることができたと思います。

6. 参考文献

TDK「概要 $\underline{(https://www.tdk.com/ja/about_tdk/tdk_at_a_glance/index.html)}$

最終閲覧日:2022年7月29日

TDK「TDK ネットワーク(https://www.tdk.com/ja/worldwide/index.html)

最終閲覧日:2022年7月30日

TDK「TDK の事業(https://www.tdk.com/ja/about tdk/our business/index.html)

最終閲覧日:2022年7月30日

2. Visits at Mitsubishi Chemical Europe

神津 昂希・臼井 理咲子

企業紹介



図1 会社のミッション ビジョン バリュー

三菱ケミカルホールディングスは、機能商品、素材、ヘルスケアを扱う国内外に多数の関連会社を有する世界企業です。 機能商品としては、電子・電気関連商品、化学繊維、合成紙素材としては、炭素素材、合成樹脂、産業ガス、ヘルスケアとしては、医薬品、診断機器を主に扱っています。2021年度の売上収益(IFRS)は3兆9,769億円社数で、海外売上収益比率46.8%です。45カ国・地域に拠点を構え、グローバルにビジネスを展開しています。今回企業研修をさせていただいた三菱ケミカル株式会社は、三菱ケミカルHDのグループ会社の一つであり、日本国内最大の総合化学工業系メーカーです。三菱ケミカルHDの売上の30%を占め、(2021.3)化成品、電池材料、アクリル繊維など、幅広い素材を提供しています。アクリル樹脂の原材料であるMMAは世界シェア1位です。

KAITEKI実現

三菱ケミカルは、三菱ケミカルホールディングス(MCHC)グループの中核事業会社として、企業理念、ビジョン、価値基準を共有し、環境・社会の課題にソリューションを提供して、人・社会そして地球の持続可能な発展に貢献する「KAITEKI実現をめざしています。

KAITEKI経営を支える3つの軸

資本の効率化を重視する経営(Management of Economies) イノベーション創出を追求する経営(Management of Technology) サステナビリティの向上をめざす経営(Management of Sustainability)

当日の内容と感想

企業研修当日は、三菱ケミカルデュッセルドルフ支部の山西洋様にご担当いただき、オンラインの形で行われました。限られた時間の中で、さらにオンライン開催ということもありましたが、適宜質問を受け付けてくださり、双方向の深いやり取りが叶い、非常に充実した時間を過ごすことができたと感じています。

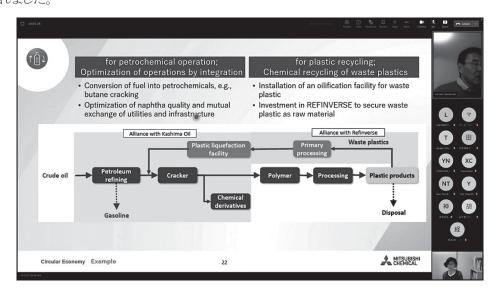
山西様には、ヨーロッパでの事情や現状も踏まえつつ、三菱ケミカルという企業について包括的にご説明いただいきました。事前に企業リサーチを行っていましたが、ケミカルという分野の性質上、それがカバーする領域や製品は非常に多く、それが企業の理解を困難にしていたのですが、実際に工場での経験もある山西様に一つ一つ丁寧に説明していただくことで、会社の歴史や経営規模などの基本情報と合わせて、徐々に企業形態の全体像を掴めたように思えます。紙幅の都合上、解説いただいたすべての製品やビジネスフィールドを同じ比重で網羅的に述べることはかなわないため、いくつかのポイントを書き綴るに留まりますが、研修におけるお話の一語一句が我々 GLP 生全員にとって非常に貴重で価値のあるものであったことは間違いありません。

まず、基本情報として三菱ケミカルが三菱ケミカルホールディングスグループを構成する会社の一つであり、その三菱ケミカル自体も旧三菱化学、旧三菱樹脂、旧三菱レイヨンの統合により設立されたものであるというお話をしていただきました。これゆえに三菱ケミカルは石油化学、医療、樹脂、先端素材など非常に多岐にわたる分野で事業を行えるのだと納得し、同時に、現在の高い技術力の裏側には長い歴史の中で培ったノウハウがあったのだということが垣間見えた瞬間でした。またこの企業概観に関し、昨年4月から新しくCEOに就任されたジョンマーク・ギルソン氏について、山西様から「ギルソン氏は先のCEOと比べて社内においても顔を出す機会が多く、簡単なビデオでも実際に社員に語りかけるように顔を出してお話になる」ということを聞きました。三菱という典型的な伝統会社も外国人の社長によって全く異なる路線、改革に進むということの実体験をお話いただき、実際に務める方にしか分からない貴重なエピソードをいただけたと思います。

続いて、三菱ケミカルのビジネスフィールドや製品についてお話いただきました。原料、高機能財の生産、加工技術を駆使した製品の製作、持続可能な社会のための取り組みが中心的事業であり、中でも、水族館のガラスなどに使われるアクリル樹脂の主原料で、世界シェアの40%を占め堂々の1位であるMMA、鉄の10倍の強度でありながらその僅か 1/4の重さであり、航空機、自動車など軽量化が必要な精密機械に幅広く採用されている炭素繊

Casel-b) MITSUBISHI Recycle system in Carbon Fiber business Based in Wischafen (near Stade), Germany. GFK & cNXT MCC owned in 2020 - CFK Valley Stade Recycling GmbH & Co. KG(CFK) mburgから車で約90分) carboNXT GmbH(cNXT) o Dusseldorf - Liscensed Carbon Fiber Reinforced Plastic(CFRP) recycling company. - Waste collection from Airbus BMWetc Business scope -collection, recycling, and sales of CFRP products -Recycle with the Pyrolysis Process - Variety of recycled CF/CFRP products

維、そして合成樹脂であるポリマーを加工するフィルム技術は三菱ケミカルの強みであるということでした。しかしそれにとどまらず、リチウムバッテリーの負極材並びに電解液 の提供、最先端とはむしろ真逆の産業であるコークスの生産でも大きな役割を果たしているとのことで、終始三菱ケミカルの社会への貢献度の高さに驚かれました。また、近年企業を語るうえでも欠かせない社会問題、環境問題への取り組みに関しては、他社との連携 で率先してサーキュラーエコノミーを推進しており、ご紹介していただいた事例では、エネオスとの共同事業で茨城県にケミカルリサイクル設備を建設し、廃棄プラスチックを油化し再利用できるようにする事業を開始しているとのことでした。また、ドイツに炭素繊 維リサイクルに関した会社を3社所有し、廃棄炭素繊維の収集、再利用、販売という一連の2ビジネスを行っているほか、2020年にはスイスにあるMinger Kunststofftechnik AGを買収し、そのプラスチックリサイクル技術を利用して製品の製造から再利用までを一貫して行うビジネスを展開することを目指しているとのことで、環境問題での先進地域であるヨーロッパにおいても三菱ケミカルが果たす役割と使命は大きく、この点に関しても貢献度の高さが感じられました。



今回、企業研修ということで、「三菱ケミカルってそもそもどんな会社?」というところ から始まったのですが、事前のリサーチと山西様のお話をから、ただケミカルという分野 において世界をリードする企業であるだけでなく、よりよい生活、社会環境、地球環境を目指しそのための化学力を持つという信念や矜持を有した企業であり、事実そうして世界に貢献している企業だということを感じさせられました。知らなかったことを知るというのは勿論のこと、こうしてヨーロッパで、世界で活躍する企業について深く理解できる機会を得られたのは、何にも代えがたい貴重な体験となりました。

参考文献

数字でみる三菱ケミカル

https://www.mitsubishichem-hd.co.jp/ir/digest.html

3. Visits at Tokio Marine Europe

胡 千惠 · 加藤 和也 · 陳 暁

1. 企業紹介

経営理念

「お客様の信頼をあらゆる活動の原点におき、企業価値を永続的に高めていきます。お客様 に 最高品質の商品・サービスを提供し、安心と安全を広げます。」

東京海上の歴史は非常に古く、日本初の損害保険会社として東京海上保険会社が設立された1879年にまで遡る。その翌年からロンドンやパリ、ニューヨークにも事業展開をするなど当初から海外に目を向けていたことが分かる。国内に自動車が1,000台ほどしかなかった1914年に日本初の自動車保険を発売し、その後も日本初の賠償責任保険や人身傷害保険を発売するなど、東京海上は日本の保険業界を牽引してきた。また2008年ごろからはイギリスやアメリカ合衆国の企業を買収し、欧米市場での事業を本格展開している。

事業は大きく分けると4 つに分かれており、火災保険や損害保険を取り扱い収益の約4 割を占める「国内損害保険事業」、生命保険を扱う「国内生命保険事業」、収益の半分近くを占める「海外保険事業」、そして「金融およびその他の事業」がある。特に国内損害保険事業では不透明な事業環境下でも安定的に利益を創出するためにデジタルと人の力の融合を中心としたビジネスモデルの進化を、国内生命保険事業では人生100 年時代における社会課題の解決のために商品販売一体戦略とプロセス全体でのDX を、経営戦略としてそれぞれ掲げている。

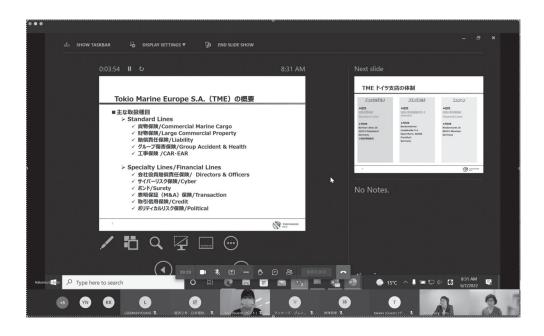
2. 研修概要

研修は企業紹介、グループセッション、ローカルスタッフとの対談の順で進み、適宜質 疑応答の時間をとっていただく形で行われた。企業紹介では主にグローバルな視点から見た 東京海上の姿について、ヨーロッパにおけるドイツ支店の立ち位置や他国の保険会社とのやり取りなどをご説明いただいた。グループセッションでは中村さん、高橋さん、大谷さんから個別にお話を伺い、東京海上のことから現地での生活のことまで様々な分野について自由に質問させていただいた。最後にドイツ人のMarkusさんからも質問に答えていただく形で、また違った視点から見た東京海上やドイツ文化についてお話していただいた。

3. 感想

経済学部2年 胡 千惠

東京海上の企業研修で最も印象に残ったことは、海外事業では保険の対象を日系企業に限定していることです。海外展開と聞いた際、海外の企業も保険契約の対象にしていると思い込んでいたため、そうではないと知った時はとても驚きました。理由を尋ねたところ、



保険金を支払うことになった場合を考慮し、限りある財源を日系企業に回したいという思いからこのような事業形態になっていると教えていただきました。また、今後海外企業を顧客にする可能性はあるか聞いたところ、現在日系企業の欧州進出が多くなっているため、日系企業の保険に対する需要が増加傾向にあるため、現状では海外の企業に事業展開をする予定はないと答えてくださいました。企業からの説明を聞く前は、海外に支部を設置しているにも関わらず、海外企業へ保険商品を販売していないことがもったいないと感じていたのですが、企業側からこのような業務形態にした理由やこの業務にかける思いを教えていただいた後は、この事業形態がとても合理的であるように感じられました。このように感じた理由は様々な理由ありますが、最も大きな理由であると考えた、海外企業が有するリスクを正しく見積もることが難しいという点について述べたいと思います。

東京海上は日系企業であるため、現地の保険会社に比べて、現地の企業がどのようなリスクに直面しているのかを理解することが難しく、現地の保険会社と競合して海外企業に保険を販売することのメリットが少ないと考えました。現地の保険会社は被保険者である企業と同じ文化を共有していることや、現地にある他の会社がどのような状況であったかなど前例が多数あることから、日系企業である東京海上より、その土地に根付いている価値観や会社のローカルな特性をより深く理解していると考えられます。そのため、保険商品作成において最重要とされる、今後会社がどのようなリスクに直面するのかについてより正確かつ的確な推測をすることができるのではないかと考えました。もし日本企業である東京海上が海外企業への保険商品販売に新規参入するには、収益を確保するために現地の会社のリスクを見積もる方法を手探り見つけなければならず、データ分析のために一からデータを収集する必要があると考えられます。市場に出回っていないデータであるため、

欲しいデータを入手することが困難であり、データ収集に膨大な時間と労力が必要になると思われます。そのため、現地企業への保険販売はリスクが高く、リターンを見積もることが困難であると考えられます。けれども、現在東京海上が行っているように、顧客対象を日系企業に絞った場合、日本で保険を販売してきた知見を生かし、日系企業の分析を行うことで、海外の保険会社よりも正確に分析ができると考えました。これによって、日系企業を対象として保険を販売することは自社のアドバンテージを生かした事業形態であると考えました。

経済学部2年 加藤 和也

今回の企業研修ではお仕事を含めた様々なお話を聞くことができて、皆さんがドイツで 普段どのような生活を送られているのか具体的にイメージすることができました。また保 険業については知らないことばかりだったのですが、ブローカーを通じた顧客とのやりと り などの基本的な仕組みからリニューアブルアセットに対する保険などの最近のトレンド ま で、保険に関する知識も深めることができました。

グループセッションで大谷さんが仰っていた『海外ならではの"狭い"コミュニティで人脈を広げることができる』というお言葉は非常に印象に残っています。海外に出たら必然的に広いコミュニティに属することになるだろうと思っていましたが、日本人のコミュニティに絞れば必ずしもそうではないことに気づきました。日本にいれば交流することが難しい人でも、ひとたび海外に出てしまえば日本出身というだけでひとつの小さなコミュニティに共に属することができ、そこで親交を深めることができるという海外に出ることの新たな魅力を見つけられました。

また、中村さんから頂いた英語学習のアドバイスもぜひ活用させて頂こうと思います。 大学時代にやっておけばよかったと後悔していることとして英語の勉強を挙げられていて、 皆さんのようにグローバルに活躍するためにはやはり英語が重要な鍵になっていることを 実感しました。それでも社会人になってから忙しい仕事と両立して英語を仕事で使えるレベルまでにされた方がいるのは、英語が苦手だけど将来はグローバルな仕事に携わりたい と考えている私にとって非常に心強かったです。

その他にもコロナによる変化についてのお話も興味深かったです。お客様との信頼関係が重要な保険業において、お客様のところに直接行って人間関係づくりをすることができない難しさがよくわかりました。デジタル化が進んで必要な分の効率化が進んだ一方で、こういった人間関係のような単純に無駄を省けばよいものではない分野で個々に工夫が求められているんだなと思いました。

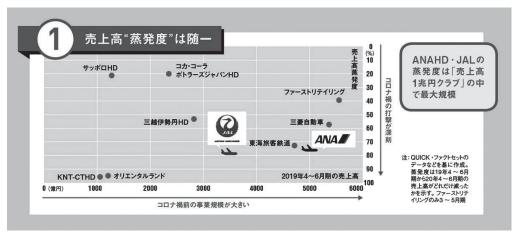
4. Visits in Japan Airlines

干坂 貴子・マッケーブ・ブレンナン

1. 企業紹介

日本航空株式会社(以下JAL)は、「安心安全」を根底に置く、日本を代表する大手航空会社である。1951 年に創立され、民営化などの変遷を遂げ現在に至っている。日本で初めてアメリカとの直行便の運行を始めたことでも知られ、その他ハワイなどアメリカや日本国 内間、そして貨物運送のためのフライトを中心に航空業界を支えている。もう一つの特徴としてはJAL グループとして知られる、研究開発から機内食の製造、LCCやホテルなどの運営を多数の子会社を通じて行っていることだ。詳しい収益の出所などについては、以下の項で具体的に説明している。近年ではサステナビリティにも強く取り組んでおり、CO2 排出量の削減や燃費の向上を加速度的に推し進めている。他にも留意すべき点として、航空業界の形態上、コロナ禍による打撃が最も大きかった企業の一つだということができる

(グラフ1 参照) そんな中で、経営判断や社会状況に合わせた取り組みについても興味深い企業であることは確かだ。

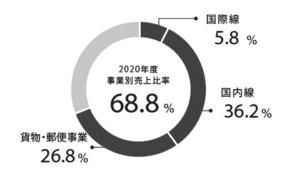


グラフ1 f 売上高1兆円クラブ」それぞれの規模とコロナ禍による打撃 (引用元:日本経済新聞 https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00151/102900032/)

2. 事業内容

事業内容の中で航空運送事業が占める割合は68.8%であり、残りの31.2%はその他の事業となっている(以下グラフ参照)。その中でも航空運送事業は主に国内線(36.2%)、貨物・郵便事業(26.8%)、そして国際線(5.8%)に分かれている。他にもこの事業には、空港旅客サービス、グランドハンドリング、空港周辺企業、旅客販売などが含まれる。その他の事業内容としては、パッケージ旅行の販売、クレジットカード事業、農業事業、ビジネスジェッ

ト事業、など様々な航空に関わらない事業も含まれている。これらの事業や多数の子会社の兼ね合いにより、JAL 株式会社が提供する総括的なサービスを実現することに成功していると考えられる。

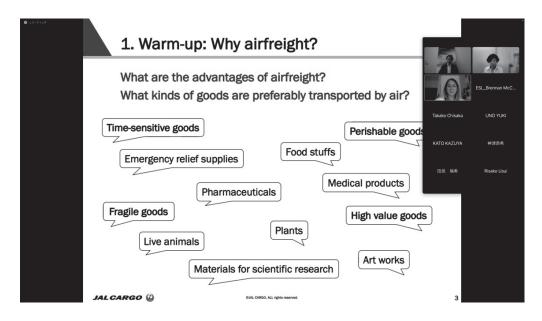


3. 当日の内容

当日の研修では、JAL の沿革と民営化についての説明、ドイツでの活動を中心に日本航空の航空産業について、そしてJALの物流会社JALCARGOの様子を、実際の現場で働いている社員の方からうかがった。冒頭の日本航空の話では、競合する全日本空輸(ANA)とのシェアなどを比較しながら、どのようにヨーロッパでの物流を担ってきたかについての説明を受けた。実際に日本の2大航空会社としてANAとの関わりは深いらしく、シェアの決め方についても自然に経済的に決定することの他に、政府による指示によって運行する便が決まることも多いことが印象的だった。また、JALの気候変動への取り組みについてのお話もうかがった。燃料の質の改善やコンテナの軽量化など具体的な策を知ることができた。

JALCARGOの説明としては、現地雇用をしているドイツの方、Staab様からの英語によるものだったことが特徴的であり、具体的なプロセスやコロナ禍に対応するための試行錯誤や判断について聞くことができた。また、非常に細かく厳しいチェックが都度必要であることも知ることができた。人の運送は減少する一方で、モノの輸送に関する需要が高まったことに驚いた。その変化に合わせるため、平時は旅客輸送に使用していた航空機のキャビンを、モノを輸送するためのスペースとして使用するなどという試みや別会社のチャーター機の使用についてなど、現実的で想像が容易であったためにわかりやすかった。加え、生徒の関心を掻き立てるような数々の質問や現場でとった写真、身近なことについての面白い問いかけを交えながら説明を進めてくれたために、とても興味をひくような内容となった。

JAL とJALCARGO の概要の説明に加え、社員の城さんとStaab さんにドイツでの生活やドイツ人の国民性に関するお話もしていただいた。



4. 感想

経済学部2年 マッケーブ・ブレンナン

JAL は他の多くの企業の中でも、その業務内容からコロナ禍の打撃を最も受けた大手企業の一つとして、どのようにこのような世界危機に対応したのかを、現地の人々の言葉からしっかりと理解することができ、他の企業研修からは得られないような特別な体験となりました。自分が想像できないようなことを、時代の変化に即座に合わせて考案し実行するような、とても高い順応性に感動いたしました。

その他、企業理念や会社としての環境への取り組みなどの話を通じ、実際に一つの会社 が どれだけ社会に変化をもたらせるかを実感することができました。JAL のような会社が提供 するサービスの性質上、必然的に地球温暖化につながってしまうことは否めないもの の、そんな中でも大胆な目標設定ができることと、大きな進歩が短い期間でできることを 知りました。私が今後ともアメリカとの行き来などで利用し続けたいと思えるようになっ たことからも、大きな投資が必要であるとはいえ社会貢献は企業自体の成長と拡大のため には不可欠であることも理解できました。私が就職してから、そしてもしいつか会社の方針を任される立場になった際、今回の研修で習ったことを大いに活用していきたいと思います。

さらに、前述のようなスケールの大きいお話以外にも、実際に現場で働く様子を細かく知ることができ、大いに興味を持ちました。私たちが普段何気なく利用しているサービス の裏では、例えばパイロットや荷物の搬入係以外に、快適で安全な経験のために裏で大き な貢献をしていることがいるということを再確認できました。

経済学部2年 干坂 貴子

今回の企業研修を通して様々なことを学ばせていただきましたが、その中でもドイツで のANA さんとフライトをどのように分けているかの詳細が興味深かったです。フランクフ ルト空港からは成田便をJAL さんが受け持ち、羽田便をANA さんが受け持っていること を初めて知りました。航空会社同士でどのようにそれぞれのフライトの担当を分けるか各 自で決めるのではなく、政府が割り当てを決めたというのも知りませんでした。さらに、Staab さんのベルリンに対する意見が面白かったです。ベルリン空港からなぜ日本との発着便が ないかという質問に対する答えとして、位置的に不便だという理由に加えて「ベルリンはそ もそもあまりよい都市ではないと思う」という現地に住んでいる方ならではの話を うかがう ことができました。多数の人が「東京の人は冷たい」というのと同様に、ドイツの 首都であ るベルリンでも人が冷たいという共通点を見つけることができました。また、関連貨物会 社のJAL CARGOさんの話も魅力的でした。運搬するものの種類によって異なる方法で設置 していて、その中でも動物を運搬する際は動物の安全のためにも種類によって はロープなど で固定させてしまうというのが一番印象に残りました。実際にStaab さんが貨物航空機で の作業をしていらっしゃる貴重な写真を拝見することもできました。航空会社といったら今 まではまず初めに旅客機を想像していましたが、貨物会社での仕事は様々な細かいチェッ クや規制があり大変でありつつも、とても興味深い業界だと思いました。

<u>5.</u> Visits at The Japan Fondation (Maison de la Culture du Japon à Paris)

法学部3年 戸塚 菜生

この度は、貴重な機会をありがとうございました。

公的機関で働いてらっしゃる方からキャリアのお話を聞くのは初めてだったので非常に 印象的な時間になりました。

また、グローバルの幅広いフィールドで活躍していくためには多様な考え方や経験を共有し、理解し合うことで同じ国の出身の人たちとの協働とはまた違った角度から物事を見られるようになるのだと感じました。

実際に、フランスでキャリアを積んでこられた小島さんのお話から、やはり日本と海外では「労働」に対する考え方に大きなギャップが存在しているのだと実感することができました。 正解がない議論ではありますが、改めて働くことについて考えてみる機会になったと感じます。

現在、将来について深く考えることが多い中で、自分がほかの人より得意として誰かのチカラになれることに目を向けて取り組んでいくのも一つの道かもしれない、というお言葉が非常に心に残りました。長いキャリアを歩んでいくにあたって、自分の強みを活かせる場所を探すこともこれから自分に必要なことだと実感することができました。

本当にありがとうございました。

経済学部2年 臼井 理咲子

本日は、大変興味深く示唆に富むお話をしてくださり、ありがとうございました。フランス・経済・芸術・コミュニケーション、など小島様のキャリアの歩み方と自身の興味分野に共通点を多く発見し、夢の実現の仕方のイメージがより具体化され、感銘を受けるとともに大変勉強になりました。小島様の、他者への思いやりと自分の信念の両方をリスペクトすることを大切に形作られてきたキャリア観は大変刺激的でした。来年に控えた留学期間は、小島様のアドバイスを参考にし、たとえ相手が言っていることが分からないものであっても、理解しようとしている意欲を見せることを忘れずに積極的に現地の方とのコミュニケーションに挑戦してみたいです!

寒さが日に日に増してきましたので、お身体大切に。

本日は、誠にありがとうございました。

社会学部2年 田邑 瑞希

今回の研修では、国際交流機関のほかにも様々な仕事の経験をお持ちの小島様のお話をお聞きしたことで、自分のキャリア形成を考えるうえでの視野を広げることができました。 その中でも特に印象に残ったのは、プロフェッショナルとして働くための専門性の大切さ と、自分の得意な分野や、好きな分野で活躍することの重要性です。これまで、大学卒業後、専攻分野における専門性を磨くため、また自分が研究の世界に向いているのかを知るため に大学院に進学することを就職を考えて諦めつつあったのですが、小島様のお話を伺って 前向きに検討したいと思えるようになりました。また「自分の得意な分野はどのようにして見つけることができるのか」とご質問したときに「他の人から言われたことを参考にすればよい」とお答えいただき、自分を見つめなおす上で新たな視点を得ることができました。今までは人に褒められることがあっても、「お世辞で言ってくれているのだろうから、真に受けてはいけない」と考えることが多かったのですが、それらの言葉を受け止めて自己分析に生かす方向で考えた方が今後に役立ちそうだなと気づきました。

また、異なる価値観を持つ人とともに働くうえで大切なことも多く伺うことができ、勉強になりました。特に、言葉が容易に通じなくてもコミュニケーションをとろうとする意思を見せる大切さは、大学生活で他国からの留学生と話したり、協力して作業を行ったりするときにも意識した方が良いと感じました。加えて、異なる国の人と関わるときに、その人の国の言語で文化や考え方を知ることの有用性を話されていたことも印象に残っています。言語は、それを使う人々の価値観や考え方を反映しているのではないかと感じることが多くありますが、そのことを踏まえても相手の国の言語を学ぶことはコミュニケーションを円滑にする以上の力を持っているように思われます。

最後になりますが、このたびは私たちのために貴重なお時間をいただきありがとうございました。

経済学部2年 神津 昂希

先日は貴重なお話をしていただき、大変ありがとうございました。主に、国際交流基金 でのキャリアについてお聞きする中で、「海外で働くということ」、また、そのために求められる様々な能力について教えていただき、非常に興味深く、有り難いお話でした。

私自身、将来のキャリアについて考えたときに、海外で働きたいという漠然とした願望 があり、いくつか興味のある業界があるものの、本当にそれがやりたいのか、それを続け られるのかという自信に欠け、悶々とした気持ちでいました。そんな中で小島さんのお話 を聞き、自分のやりたいことに素直になること、そして同時に自分の強み、得意なことを 最大限伸ばすことが、自分のキャリアにどれほど大きな役割を果たすかを考えさせられました。自分がダメになる前に本当にやりたいことに飛び込んだという小島さんの経緯から、やりたいことをただ待っているだけでは命取りになるということを聞き、早めのアクショ ンの重要さ、そして何より、それを可能にするだけの専門性の確立・特化が不可欠であることも強く感じました。この専門性と言語についてはやはり強調してもしきれないのだなと思い、それらの重要性を再認識できました。これに関し、フランス語で苦労されたお話 が印象深かったです。

また、仕事上でのお話としては、管理職としてフランスの現地社員に仕事をお願いした

ところ、自分のタスクに含まれないから断られた、というエピソードが大変印象深かったです。労働者主権、(良い意味での)全体」に勝る個人主義が垣間見られ、グループや会社の歯車の1つとして自分が仕事をしているんだという一般的な日本的意識と、自分はこれらの仕事に誇りをもって従事し、それが会社やグループのためになるのだろうという外国的意識の違いを感じられました。まさに「全体のための個人」近個人があってこその全体」という相反な考えが現れているように思えました。

このような非常にリアルで、そのために逆に、大きな励みともなるようなお話をしていただき、本当に貴重な経験となりました。大変ありがとうございました。

フランスでの仕事風景







→ 現地に馴染み、多様な考え・経験を共有し、理解しあい、より良くしていく。

経済学部2年 宇野 有紀

本日は、国際交流基金の小島瑞希さんにお越しいただき、具体的な仕事内容から就活まで 多種多様な話題についてお聞きすることができた。今回の研修を終えて、私は、如何なる 業界や企業に就職しても、自分軸を持つことは大切だと気付かされたため、以下では小 島 様のお話から抽出した二つの軸について説明していく。

一つ目は、自分の興味・関心と向き合い、正直になることである。小島さんのキャリアをご参考にすると、正直に生きることの大切さが明確になる。小島さんは日本経済新聞に就職後、そこで任された業務が自分と合っていないことに気づき国際交流基金に転職された。自分のやりたいことと仕事内容が異なる場合、入社後に抱く疑問や違和感を放置せず、もう一度自己分析を行い、自分の強みを活かせる職種や職場を選び直す選択肢を残してもいいのだと気付かされた。小島さんは、パリでフランス人と仕事をした経験があって、現在 は通訳の勉強をされている。転職先での出会いや出来事は、必ず次に活かされるため、仕 事を選ぶプロセスにおいても能動的に動くことが大切だと感じた。

二つ目の軸は、社会人になっても学び続ける姿勢を持つことである。小島さんは、組織内で人を動かせるようになるためには、専門的な知識や学歴を持っている方が望ましいと話されていた。学部卒かつ組織内で育てられた人は、大きなビジョンを持って前例のない取り組みをしょうとする人がいないことを例にあげている。大きな事業を起こすには、学士以上の学歴や社会人としての経歴などを積んだ方が、同僚や上司を説得しやすいということを学んだ。

つまり、今回の企業研修を経て私は、社会人になっても常に自分と正直に向き合い、学 び続ける大切さを教わった。転職を自由にできる時代であるからこそ、このメリットを最大限生かして、自分のキャリアを形成していきたい。現在は、大学を卒業後、就職をする方向性でいるが、社会人になって学び直したいと思ったら、資格試験や大学院に進学することも選択肢の一つとして残そうと思った。

社会学部3年李 旻炯

世界各地で日本の文化を発信する専門機関である国際交流基金は、私自身も当基金が主催する日本語能力試験(JLPT)を何度も受験したことがあるため、まったく馴染みがないわけではなかった。今回の企業研修を受けて、国際交流基金で日本語教育だけではなく様々な交流活動を通じて日本のソフトパワーを強化し、文化をもって世界と日本を繋いでいることを、現場で実務に携わった方の生々しいお話とともに学ぶことができた。

国際交流基金は外務省の傘下にある組織で、省庁が建てた政策的目標を現場レベルで具体的な企画を立ち上げて実現する役割を担っている。研修を担当していただいた小島さん は在パリ日本文化会館の勤務経験があり、今は日本の本部で勤務しておられるとのことで、それまで歩んでこられたキャリアーを振り返りながら、実際どのような事業に携わってき たのか、そこで難しいと感じたことと得たことは何なのかについて、現場の人ならではの 個人的なお話も交えながらとてもフランクに話していただいた。ホームページや本では学べないプラクティカルな話が多く、国際交流基金の勤務環境と実際の業務内容についても 思い描いてみることができた。

特にパリ事務所でご勤務されていた頃の回顧が印象深く、国際交流基金だけでなく多様な機関・民間企業から派遣された人々と歩調を合わせながら仕事を進めて行くことの難しさ、特に現地のスタッフと業務を分担する際に起こるコミュニケーションの困難さについて話された。ただ、そのようななかでもフランスの多様な文化に対する受容力の高さと、議論を重ねていくプロセスを楽しむ雰囲気を学び、ご自身もパリ事務所での勤務経験を通じてそのように変化したところがあるという話では、とても共感しながらも、現地文化の良い部分を受け入れて自分を変化させることを恐れない高い適応力が、海外で円満に生活して自分も成長していくためには大きな力となることに改めて気づいた。

最後のところではキャリアデザインについても話していただき、就職活動や進学を目前 に控えた学生たちにとって非常にためになる経験談と助言を惜しみなく拝聴した。小島さ ん自身も違う業界から中途採用で国際交流基金に転職されたとのことで、道は一つだけではなく、視野を広げて自分との弛まぬ対話を重ねることで人生の軌道修正はいつでもできる ということを、ご自身をその証明として話していただき、大きな励ましとなった。

貴重なお話を聞かせていただき、どうもありがとうございました。



経済学部2年 加藤 和也

今回は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。様々な点で感じたことや考えたことがあるので、まとまりませんが箇条書きに近い形式で書かせていただきます。まず経済学を勉強することの利点について、ロジカルな考え方を身に付けることができ るというのを聞いてなるほどと思いました。学部二年ということもあり、授業の内容が入 門レベルから少しずつ中級レベルに近づいていっているのですが、商学部の授業などと比 べていつまでたっても社会に出た時にどう生かせるかが分からない状態でした。これは理論分野の勉強がメインだからというのもあるかもしれませんが、この考え方を聞いて、経 済学の

内容そのものではなく、そこで用いる論理的な思考法が社会でも役に立つと聞いて 経済学の勉強に対するモチベーションが上がりました。

次に「税金を使って働いている以上政策的な意義が求められる」というお話についてです。 文化交流でも政権の意向にさらされるため、文化的価値を最大化したいという思いとの間 にジレンマがあることは確かにあり得なくはないなと感じる一方で、実際にそうだと 知ると 少し悲しい気持ちになりました。必ずしも政権の意向などが文化的価値を貶めるわけでは ないと思いますが、その文化の持つ可能性みたいなものが狭まってしまうのだろうなと思い ました。

海外ではある分野のプロとして働くならその分野の院卒は普通、というお話も印象的で

した。私は進路として就職をメインに考えているのですが、院進という選択肢も捨てたわ けではありません。興味もある一方で、本心では文系で院に進むことを少しためらっているというのがあります。もし院に進むとしたら自分に必要なことは、自分が進みたい道を決めること、そしてその分野のプロとして働く覚悟を持つこと、それが学べるところがあれば院に進む、こういう感じなのかなと思いました。

フランス人の性格についてのお話も面白かったです。フランスでの勤務を経てフランス人のマインドが取り込まれた、という点に関しては、以前別の企業研修でドイツで働かれ ている方のお話を伺った時も似たようなことを聞けたので、「大人になってからでも他の国の文化の中である程度長期間生活すると、その国の文化的精神を取り込むことができる」という自分の中での仮説がだんだんと確信に変わってきました。小島さんがおっしゃっていたように、良いところを取り入れるようにすることができれば、そういった経験を積むことで人間としてレベルアップできるのかなと感じました。

このほかにも、「フットワークを軽く動く」など今後の大学生活に生かせそうな話をたくさん 聞くことができました。本当にありがとうございました。

経済学部2年 干坂 貴子

この度は貴重なお話をたくさんありがとうございました。国際基金でのご活躍の話に加え、労働環境や女性としてのワークライフバランス、そして大学生活や転職についてなど様々なお話を聞くことができ、たくさんのことを学ばせていただきました。

数少ない経済学部女子の先輩として、就職活動やその先の転職についてのお話を聞くことができたことは非常に貴重な経験となりました。自分が将来どの業界で仕事をしたいのかを考え始めてはいるのですが、自分が知っている業界についてしかまだ知識がないため、無知の業界でインターンをしてみることも良いかもしれないと最近考えています。実際、業界ごとで働いている人たちの性格や遊び方が異なるというお話はとても興味深かったです。業務内容に興味があっても、周りの環境が自分に合っていなければ働きづらくなってしまうため、業界ごとの人々の特徴についても色々知っていきたいと思いました。私の父は就職してからずっと同じ企業で働いているのですが、会社への忠誠心も大事だと思う反面、私自身は将来少なくとも一度は転職をし異なる企業でキャリアを築きたいと今のところは考えています。今回小島様が広告会社から国際基金へ転職されたお話を聞き、一層転職することを視野にいれることができました。数日前まさに友人との会話の中で転職の話題がでた際、転職をしたくても就職活動の時に「転職する気満々」というのを隠すのは難しそうだと話していました。これについて何かアドバイスがあればいただきたいです。

大学2 年生が終わりに差し掛かっているのにも関わらず、インターンもまだできていない 上に大 学生活が一瞬で過ぎてしまうことにとてつもない焦りを今感じている中で、小島様 の励ましのお 言葉で少しばかり冷静になることができました。小島様の結婚後も仕事を 続け、キャリアを積み ながらも子供を育てていくというのは私の将来の理想像です。これはよく経済学部の女友達とも話していることなのですが、結婚してもずっと仕事を続けたいという考えの女友達が周りに多いこともあり、小島様の現在の生活に憧れを抱き、私自身も卒業後実現させたいと改めて思うことができました。

改めまして、この度は貴重なお話をありがとうございました。お身体をご大事になさっ てください。

フランスで働き、生活する中で感じたこと(は:個人的意見会な)

- □ 文化に対する受容力の高さ
 - 一般市民が文化活動に熱心。パリでは様々な国の文化の鑑賞が、夜遅くまで可能。特に日本文化は人気。 人気が高いのは、日本食、伝統的な美術(浮世絵等)、日本映画、日本の建築、日本庭園、ZEN。
- □ 労働法の強さ・経営サイドの難しさ

 残業時間・出社時間への厳しい制限、繋がらない権利 (droit de déconnexion) 、
 労働者を護るためのあらゆる策が存在。→労務コストが高い。
- □ 議論好き、人との意見交換を大事にする
 - 異なる意見を持つ相手と意見交換し、議論を重ねるプロセスを楽しむ国民性。 →相手の言うことが完全に分からなくても、コミュニケーションを取ろうとする意欲が大切。
- どのような個人も人権が尊重されるどのような境遇であれ、当人が惨めな思いをしなくて済むように 法律・社会保障が設計されてきた歴史がある。失業も恥ではない。
- □ フランス語の重要性



経済学部2年 マッケーブ・ブレンナン礼

本日は大変ご貴重なお話、ありがとうございました。全体として同じ大学の最近の先輩のお話を、実際に10年後の自分の姿を想像しながら聞くことはとてもためになりました。家族を築きながら海外でご活躍されている姿や、実際にそこに至るまでの道のりについてお聞きできたことが、今後自分の人生を築き上げる上で多くの不安を解消してくれるように感じました。今までは自分にとっては遠く離れた、自分がいることが想像しづらいような場所や立場からのお話だったために、今回の機会はとても新鮮でした。特に、これから就職を考える私たちの目線でお話をいただいたおかげで、現在抱えているさまざまな悩みが軽減されました。

中でも大きな悩みとして、就職をする上で圧倒的に狭い視野しかない立場から、どのような職業が自分に最も合うのかに関する正しい判断ができずに低迷していたことがあります。 大学入学前の学部を決める段階でも同じ悩みにうち当たりましたが、何も経験していない時点で判断することをとても難しく感じていました。結局最も無難で留学の選択肢も広いとされる経済学部への入学が叶い、幸い日本社会はあまり学部へのこだわりがないため、特に不安を感じることなく過ごせてこられました。しかし、大学で年月を過ごそうと も、実際の社会に出た後の仕事のあり方や自分のスキルの実用性などは知らないままでした。 そこで、実際に日経新聞に就職されてから1年後に集めた情報を用いて転職し、人生に安定性 と豊かさを実現している小島様に憧れました。自分は多くのことに迷いながら正解を導き 出そうと必死でしたが、正解は後からでも、社会人として見聞を広めた後でも見つかること 実例として知ることができ、大変ためになりました。

その他、海外で働くことによる可能性の広まりや、今後の多くの出会いに目を向けることができ、希望を持つことができました。将来の不安ではなく、可能性により目を向けられるような、そんなお話をしていただき、誠にありがとうございました。新しい家族と海外での生活などさまざまな変化がある時期と存じますが、今後の更なるご活躍をお祈り申し上げます。

経済学部2年 陳 暁

本日の講義では、日本から世界に飛び出し、ヨーロッパで働くこととなった小島様にお話を伺いました。私は、小島様がキャリアの形成にあたって、どのように考え、どのように悩み、そして最終的に踏み出したのか、非常に感銘を受けました。今まで漠然と年収や、社会的地位など世の中で一般的となっている価値評価をもとに今後のキャリアについて考えていましたが、就職というものについて、本質的な部分から細かく分解していただき、今までになかった視点を得ることができて大変勉強になりました。自分の今後について考える上で、よりワクワクできるような環境に進みたいという思いがより一層強くなりました。また、就職以外の部分についても、世界から日本はどのように見られているのかについて私は大変興味深かったです。本日はありがとうございました。

経済学部2年 胡 千恵

本講演では、小島さんの実体験を元にフランスでの生活や就業について興味深いお話を 何うことができた。私は、小島さんのお話を聞いて、小島さんの行動力に驚かされた。また、来年の 長期留学でフランに行く可能性があるため、実体験をもとにしたフランスでの生活やフラン ス人の扱い方に関するお話はとても役に立ったように感じる。

小島さんのお話において印象に残ったエピソードが2 つある。小島さんの国際交流基金へ 転職したお話とフランス人の上司としてどのように部下を扱い、動かすかについてのお話 である。

まず、国際交流基金に転職した話について述べたい。私は、このエピソードを通して、自分の やりたいことを追求する大切さを感じた。これから就活が始まる中で、私はどのような職に つけば良いのか、どのような職につきたいのかについて悩んでいる。自分自身の興味分野 はある程度明確になってきたものの、他の分野に関する知識が足りないことから、比較対象 が少なく、それが本当に自分のやりたいことなのか、自信を持てずにいる。また、自分のやりた いことを達成できる場が官公庁や日銀など公共機関になるものの、公共機関 の煩雑な手続き業務に苦手意識を感じているため、自分の興味分野で突き進んでいいのか迷っている。そのような中で、小島さんは自分の興味分野を明確に理解し、それを目的として就職している。そして、職場において、興味分野を追求することができないと感じてから、自ら情報収集をし、早々と転職をし、自分に合った職場を見つけている。また、小島さんは社会人になってからの方が多くの情報を得ることができる、と話していた。このようなお話を聞いたことによって、私は、現段階においては就活に関することは考慮せずに、自分の興味分野をもう少し追求してもいいのではないかと思った。興味分野にあった就職先を見つけ、それが自分と合わなかった場合、転職することもできるということを知ったからだ。

次に、小島さんのフランスで勤務した時の話について述べたい。フランス人の上司として勤務した経験から、「フランス人の扱い方」について話していたことが印象的だった。とりあえず機嫌を損ねないようにさせる、という実体験からなる赤裸々な「フランス人取扱説明書」は、この先の人生でとても使えそうだと感じた。また、私が上海に住んでいた際も、小島さんが感じたことと同じように、自分の実体験で構成された「中国人取扱説明書」があった。ステレオタイプだと批判されるかもしれないが、実際大半の中国人に適応していると感じる。このような「扱い方」には、現地でその地の人々と濃密な時間を過ごしたからこそ感じ取れる何かがあると感じる。小島さんの、包み隠さず、地に足のついたお話がとても好印象であり、フランスで苦労した分大きな収穫を得ているのだと感じた。

Chapter 4 PERSONAL REFLECTIONS

Socially Distanced Autopsy on the Modern World

Minhyoung Lee

As I stepped into the century-old library building, pondering on what to write on my personal review about the year-long seminar for the field study to Europe, the signboard hung in front of the main door suddenly caught my attention. Nothing was special; it was a small, simple signboard, with a well-known Latin phrase written on it. TEMPUS FUGIT – time flies, it said. For some reason, the reality that the year 2022 is ending finally hit me hard at that exact moment.

Time did fly. It is hard to believe that eight months have passed since the seminar started, and already ended few weeks ago. It is hard to believe that three years have passed since the Covid-19 pandemic began. It is hard to believe that ten months have passed since a European country, a permanent member of the United Nations Security Council, launched a full-scale invasion to other European country, one of the most economically vulnerable nations in the continent. The war did not only cause numberless deaths and atrocities reported from the region, but also boosted various economic and social anomalies which were already ongoing due to the pandemic. Such unprecedented circumstances eventually stymied our plans of going on a field study to Europe, which seemed very likely at the beginning of the year.

Notwithstanding the global turmoil and changing plans, I have learned and improved a lot through participating in the seminar. By conducting a thorough research, scrutinising numerous tomes and treatises, and writing a research paper, I was able to strengthen my critical reading skills and an ability to systemise the study from its beginning to the end. Online visits to various enterprises and organisations provided invaluable information with vivid accounts of the actual vocational life in each industry. Not to mention the online conference with the students at Université Paris Cité, which was a precious opportunity to directly communicate with the students in Europe.

I would like to refrain from asserting that our alternative online field study was a perfect substitute for an actual field trip. Nevertheless, in spite of a deep regret lingering in my heart, I also think the prevalent sense of uncertainty and frustration also stimulated my research to reflect the contemporary situation of Europe. The European continent, technically a few countries in the western part of it, has been a leader of the world for centuries. They made the rules of modern world and disseminated a good number of new ideas to the world, such as human rights, cultural relativism, western democracy, capitalism, as well as nation state, colonialism, fascism, and hegemonism. The last century saw the collapse of Europe and its struggle to regain the international presence. The world order established by the Europeans has not fully but certainly failed in some ways, and the aftermaths are now threatening the European themselves. An ongoing crisis and eventually cancelled field trip feels like a painful but inevitable part of this year's program, and the

discussions regarding the related topics were the most memorable part of the seminar.

For me, the year-long research was akin to performing an autopsy. Europe did not "die out", but it "stays alive" in a different way, yet ill. To understand and cope with the illnesses modern- day Europe and the whole world suffer, it was critical to cut through and open up the thick shell of the vague images overlaid upon the old empires and outdated paradigms, which still casts a long shadow on our modern societies.

This autopsy of mine could not have been delivered without significant support of the seminar's other members. Every class meeting was an inspiration and a broadening of perspective. I am deeply grateful to Professor Masuda, who supplied us with precise and professional help in all aspects of the seminar, including the meticulous comments for the research paper and during the discussion session. I would also like to thank Professor Martchev for assisting with English and presentation skills.

Special thanks to the fellow students for all the thought-provoking comments and personal encouragement. It was the first time after my three-year hiatus in studying to take part in a class with such vibrant and open-minded atmosphere. As I was not from the faculty of economics, I was quite worried if I could not give out any constructive comments during the discussion or meaningful feedback to their research. However, it turned out to be a valuable opportunity to explore a totally new field of study, thanks to the passion and excellence of the students. It was a great honour to study and discuss with such brilliant students. Times are hard, but I still have faith in all my fellows to enjoy and improve themselves while they study abroad.

I send my best wishes for all the aforementioned, wherever they may be and whatever they may do. Thank you.

Looking back on the Days I Spent at Prof. Masuda's Seminar

Yoshitaka Nakajima

It is hard to believe that it's been almost a year since my friends and I first introduced ourselves to one another, sitting on the lawn of the West Campus. In April, I thought that a whole year seminar was just so long and I wasn't sure I would be able to enjoy it. But gradually I started to take great pleasure in going to school on Tuesday and spending some time at the seminar with them. They were so friendly and sociable, and it was fun to be with them. It's a great shame that we couldn't go to Europe, but I am quite satisfied that I got to know Professor Masuda and everyone in the seminar.

The Importance of Not Being Obsessed with Numbers

Koki Kozu

What I have learnt in this seminar is the importance of not being obsessed with numbers. I will describe this in more detail here.

The lectures about economics which I took when I was a first-year student were four beginner classes – Introduction to Economics, Introduction to Economic History, Introduction to Statistics, and Introduction to Economic Thought – plus introductory microeconomics. I would like you to imagine, from this series of classes, that I was trapped with calculations and numbers. In these lectures, although I learnt numerous things, including the theory of equilibrium and the way to analyse some data, most of which were used in solving the math problems related to economic problem sets. When I was able to solve economic problem sets – utility maximization problems, cost minimization problems, equilibrium points, and so forth – I was honestly happy because I felt that I was gradually becoming able to adapt myself to realistic economic phenomena. As I repeated this process, however, I came under the illusion that it was natural to measure the economy with numerical values before I knew it. In other words, I had fallen into a kind of biased "numerical supremacy", thinking that I can't analyse the economy without numbers. While it's true that some concrete figures are needed to discuss economic phenomena, I had gone beyond that point, and my stance was that the numerical values were totally sufficient for analysis.

This was such an extreme way of thinking that I was puzzled when I first entered this seminar. Because there were no calculations or numbers at all! I felt like, "Why? Despite the fact that this is an economics seminar". Our first activity was reading in a circle, far from anything to do with numbers! I confess, I wasn't very motivated at first. This was because I assumed that the seminar would focus on European economics and that we would be analyzing it with numerical values.

However, as I continued with our seminar activities, I realized one important thing. That is that numbers are not everything. I don't remember the exact timing, but I realized at a certain moment this essential thing that everyone would take for granted. In considering the present, it is significant to discuss how the past was, and in that sense, a deeper understanding of European history through reading in a circle will be the foundation for analysing the present itself. Additionally, in analysing the present, it is significant to research how production takes place in an economy, and in that sense, a series of corporate surveys will be the foundation for discussing labour and production differences between Japan and Europe. Furthermore, in confirming whether or not my analysis is correct, it is significant to view it from various perspectives, and in that sense, frequent discussions with people from various backgrounds in the seminar will be the foundation for nurturing the idea of relativization and objectivity.

Thus, when looking back, I realized once again that all of the seminar activities had very crucial aspects, which have helped and will help me elaborate my research. I have the same idea about the importance of numerical values in analysis, but through this seminar, I have come to understand that numbers alone do not play the leading role, but the context, background, and arguments for using them are equally essential. This seminar was only one year long, but I am convinced that what I learnt here will remain with me for decades to come.

Living with an Awareness of the Issues

Nao Tozuka

I participated in the Short-term Overseas Study in Europe because I wanted to take advantage of one of Hitotsubashi University's characteristics, which is to have low barriers between faculties thus allowing me to acquire a wide range of knowledge according to my interests, and to develop my ability to perceive things from multiple perspectives, not only from a legal perspective but also from economic, social, and cultural perspectives, by participating in this program. Furthermore, although the period during which I can actually conduct on-site research in Europe is limited, the curriculum provides a one-year seminar format for preparing for the research, analysing and understanding the current situation in the EU, discovering and trying to find solutions to global issues, and improving our communication skills of using English along the way. I was attracted by the fact that the curriculum provides students with the opportunity to visit the site and conduct overseas research as the culmination of their studies, after they have acquired more knowledge, a global perspective, and communication skills. In addition, I found this program when I was away from the experience of devoting myself to something during the Covid-19 crisis, so I wanted to focus on one thing by expanding on my own interests together with other Hitotsubashi students with various backgrounds for a year.

Looking back on the one-year seminar, I feel that it was a very fulfilling time, as we deepened our thinking on various aspects, ranging from social issues to future career perspectives, such as a deeper study of European history and the characteristics of each country, writing our own research reports, receiving lectures by our university seniors working in Europe, exchange meetings with students from the University of Paris, and discussions on crisis awareness regarding the Ukrainian war. I feel that I had a very productive time, deepening my thinking from a variety of perspectives. I believe that it is because I was able to accumulate a variety of experiences which I had never had before. Through this irreplaceable opportunity, I was able to find a consistent axis that I should cherish in the future. That is, to always live with an awareness of the issues. It was very stimulating to spend time with my fellow seminar students, each of whom has interests and concerns in a wide range of fields and lives with an awareness of issues. By placing myself to such an environment, I feel that I was able to expand the meaning of learning in every direction. I am grateful to my seminar members and the professor for reminding me of this. I will continue to be aware of the issues of the world and I would like to take action and proactively work on the things I want to change and challenge.

The Importance of Learning Together

Mizuki Tamura

I participated in this program, mainly because I was interested in France. When I was a first-year student, I learned about French society, culture and education in the process of studying French as my second foreign language. For example, I learned that education in France is quite different from what we have in Japan, which piqued my interest. I thought I would be able to know more about France by taking part in this program. Also, I was very interested in spending one year, which seems long compared to other courses, researching one thing. I expected that this program would give me a precious opportunity that may help me prepare for studying in my Main Seminar during my junior and senior years. In addition, the fact that we can make a presentation in front of university students studying in Paris and get feedback from them seemed exciting because undergraduate students in Japan, like me, usually can get little feedback or advice from foreign students even when they research on something related to foreign countries. Also, I thought I would be able to broaden my perspectives by meeting students with various backgrounds and learning with them for four semesters.

Now, looking back on the program as a whole, I have got more things than I expected before. First of all, I can analyse things more deeply thanks to a lot of advice and important questions from my teacher and fellow students. There were many things that I would not have realized if I had done the research alone. Also, I learned a lot from other people's research on subjects I hadn't known well before, such as nuclear sharing, economic policy in Germany, regional language in France, etc. They gave me great awareness that I cannot get by taking classes in my faculty. Of course, I think I can improve my ability in academic research like finding necessary books and data, reading and using them accurately, and structuring them from a broad perspective. In particular, I think I learned a lot from the experience of reading one book on world history over the course of a year, which will be useful for me in the future. One of the things I sincerely appreciate is the presence of my fellow students with whom I was learning thorough this program. They gave me not only a lot of new knowledge and awareness but also career choices which I didn't even think of. They all have high goals and motivate me in every way. It will be a great asset for me to learn and interact with my wonderful colleagues. After this program, I will continue to be interested in what I don't know and learn alongside people who have something I don't.

Looking Back

Kazuya Kato

Looking back, the past year was over in the blink of an eye, and this shows how fulfilling it has been. Although we were not able to actually go to France and the Netherlands, it was still definitely a year of learning. I will write my impressions separately for our Special Seminar and other activities.

In the Special Seminar, we read and discussed a book on modern and contemporary world history throughout the year. I did not choose world history in high school, so reading this book, which was straightforward and detailed, was difficult at times, but learning about the history that became the context for shaping the modern world was very meaningful. However, the most important thing I learned through the reading was how to read a text accurately and understand it correctly. The experience of carefully reading the book while considering various things, such as the relationship between sentences and the reasons for their placement in a paragraph, was new and valuable to me. The experience of writing a research report also left a strong impression on me. I have written many reports since entering university, but never have I spent so much time reading, researching, and studying, and it was challenging to consider a single theme from various angles and come to my own conclusions. Considering that I will eventually write my thesis, I believe it was a valuable experience. That is the reason that it was so difficult to summarize the contents of the report into a presentation of only 8 minutes. It was also interesting to listen to the presentations of my classmates, which expanded my knowledge of their areas of interest.

It was also meaningful, in at least a couple of ways, to have the experience of listening online to company employees who actually work or have worked abroad. First, I am now able to imagine many kinds of concrete future visions for my career plans, which had been vague. Through this training, we heard from people in a variety of industries, ranging from insurance companies to airlines. Not only did I learn about the current state of each industry, the issues they are tackling, and their future prospects, but I was also able to form an image of what it would be like to work overseas. Second, I found adequate answers to my topics of interest, such as the relationship between language and personality, and national character of several countries. For example, I found that most of the people who gave me this training realized the hypothesis I had made in my first year of college, that when people who speak more than one language switch languages they speak, their personalities also change. It was nice to actually ask them these questions and get answers.

Finally, the main reason I joined this seminar was because I was looking for stimulation, and it was a truly inspiring year. In this class, there were students with a wide variety of talents, abilities, and personalities, for example, who can speak English at the same level as native speakers, who are

very knowledgeable enough to answer any topic, who are aiming to enter graduate school, etc., and being surrounded by those students and teachers who were very kind, enthusiastic, and close to us was invaluable to me. I cannot thank them enough.

Personal Reflections

Takako Chisaka

This year turned out differently than I had imagined. What I had in mind was going to Paris and Amsterdam with my seminar peers and having valuable experiences abroad with some prior knowledge about Europe. Since the COVID situation in Japan started to settle down, all of us were pretty certain that we would be able to go abroad this year, but we were all very disappointed and saddened by the school's decision not to let us go. Instead of the 10 days trip that was previously planned, we had a zoom session for 2 hours with university students in Paris. This was an exciting opportunity because though the whole session was so much shorter than I hoped it would be, it was inspiring to hear French students' views on Japanese cultures, also presented in Japanese. To be completely honest, after it was decided that we could not physically present our topics to French students, it was difficult for us, including myself, to stay motivated to complete our research paper and presentations.

On the other hand, the seminar part of this course was enjoyable every week, and I enjoyed being in a seminar as a second-year student. We got to make presentations a couple of times about various topics and have discussions sometimes. I enjoyed spending time with everyone in the seminar since they were friendly and funny. The fact that I could see through the conversations that some people have entirely different perspectives on some topics was also a valuable experience—for me. Also, I liked having the chance to listen to multiple companies' presentations because it broadened my future career options. Overall, though there were a lot of assignments to complete, and we ended up not being able to go on the trip itself, I enjoyed this seminar, of course because—I got to learn more things about Europe, but mostly because I got to bond with new people in our weekly class meetings.

Knowing My Weakness

Chie Hu

I was dreaming to enter this program before I entered this university. When I was deciding which university to go, GLP course and a program for a study trip in Europe strongly attracted me. I was dreaming to go to France and the Netherlands. Since I have never been there before, I thought I could widen my horizons by communicating with people from different cultures along the trip. However, the trip was cancelled due to many restrictions. It was unfortunate that the dream didn't come true, but I was able to learn from my talented and hard-working classmates.

Discussion and presentations were the main part of the coursework. Not only did I have to learn the contents of the discussion or the presentation, but I also noticed that I needed to improve my discussion and presentation skills throughout the class. When we were discussing conscription, I was surprised at how weak I am at verbalizing my thoughts. Since it was a brand-new topic—that I had never thought about before, I had some thoughts about the topic, but I couldn't express them specifically. During the discussion, some of my classmates used simple examples to explain complex concepts or illustrate the idea in their minds. I tried to imitate that way of thinking, but—it was too hard for me to do it immediately. This experience helped me clarify my weakness and what I can do every day to improve them. I felt the same thing during the presentation in Professor Martchev's class. I was satisfied and used to my own style of slide making and the presentation. However, after listen to others' presentations, I figured out many places for improvement, such as including humour and the layout of presentation slides.

What I mentioned above are skills that my classmates made me think I need to improve on. Other than that, I was also impressed with their attitudes toward the study. It motivated me to face all tasks more seriously and gain knowledge in different areas. Being part of this seminar has challenged me to widen my view even further and understand my weaknesses better.

This seminar would not have been possible without Professor Masuda, who guided us throughout. She helped us to dig our thoughts deeper by encouraging us to see through the essence of things. My thanks and appreciation also go to my friends who are talented and hard-working. They gave me an opportunity to know myself better and rethink my future career from multiple perspectives.

Self-Discovery

Yuki Uno

Looking back at my personal statement that I wrote one year ago for this Global Leaders Program (GLP) course, I had high ambitions to forge strong bonds with the other GLP students and make improvements as a scholar. By participating in this course, not only was I able to achieve my initial goals, but also became well aware of my strengths and weaknesses.

One strength I've honed after engaging in conversations with my fellow classmates is the ability to take in criticism. For example, when I presented the first draft of my research paper—about religious discrimination in France, some students gave me constructive feedback about the limitations of my findings, as it was only concluded from academic journals written in Japanese. After taking their criticism into consideration, I decided to make and distribute a survey regarding this issue to students at the University of Paris in order to gain additional materials that reflected—the real voices of the people who were involved. Also, when an exchange student from France participated in one of the GLP courses, I proactively asked him for sections that needed clarification and was able to learn more about French values in the end. Therefore, the journey of re-evaluating my work countless times and taking the initiative to do extra investigation made me realize that—I have a strong sense of responsibility in making my final product the best version that it could possibly be.

On the contrary, one weakness I've identified by joining this course is logically explaining my ideas and making them convincing. Especially since this course required you to give comments on other people's work, it was imperative to explain your thoughts in ways that made it easy to understand for everyone. Seeing my classmates' excellent speaking techniques, I figured that the first step in becoming a good "explainer" was to attentively listen to your classmates and accurately grasp the essential points that they intend to deliver. After mastering that, the process of re-organizing their main arguments in ways that they haven't done and verbally explaining it with reasoning is crucial to contributing positively to their revision of their work. I need further practice before I can give full and effective feedback in the future.

To end these personal reflections, I would like to express my greatest gratitude towards Professor Masuda and Professor Martchev, who have provided me the opportunity to engage in discussions with my classmates and discover my strengths and weaknesses as a scholar. My achievements would not have been possible without their help and their time invested in this course.

Personal Reflections

Xiao Chen

The International Field Studies in Europe is offered as part of the GLP Program. This program provides an exciting chance for us to visit the EU and gain first-hand experience. I was drawn to this program even before I entered Hitotsubashi University, as the overseas research is a fantastic opportunity for me to expand my knowledge of the world and discover new perspectives.

The class began by reading "Western History", by Shingo Minamizuka, Shigeru Akita, and Norie Takazawa. This book provides a comprehensive overview of historical events and presents the world situation in each period by contrasting different nations. Despite having taken world history courses in high school, I was struck by the number of new insights and discoveries from reading this book. Furthermore, the practice of understanding the framework of the text and then identifying the most critical points from its logical structure helped me to improve my writing skills. Additionally, interacting with alumni who have either lived or are currently living in Europe, allowed me to gain a deeper understanding of the cultural and social differences between countries such as Germany and France based on their personal experiences.

Throughout my research on PACS, I experienced both academic and personal growth. As I am not fluent in French, I relied on materials written in Japanese to gather information, but they were outdated. To stay up to date on recent developments, such as the implementation of same-sex marriage in France, I also sought out information from newspapers and made appointments to speak with researchers who know French society. By comparing information from various sources, I was able to gain new perspectives on the issues at hand. I discovered that cultural backgrounds play a crucial role in shaping views on same-sex marriage and partnerships. For example, the traditional French family is quite different from the traditional Japanese family, and I would like to further explore this topic in the future. However, I found it challenging to quantitatively evaluate the effects of PACS on society. Despite my efforts to find relevant studies, the effects of PACS on society were primarily influenced by other social factors, making it difficult to see the direct relationship between the specific logic of PACS and society. To overcome this problem, I plan to continue studying economics, specifically the measurement of the effects of policies.

Overall, throughout this study project, I came to realize the importance of examining the world and contemplating various issues by comparing them with the context in which I find myself. Unfortunately, this year, due to the unstable political situation and the spread of COVID-19, I was unable to visit Europe, but even so, I was able to acquire valuable knowledge that will be useful for the future.

Reflecting on a Year in the GLP Program

Brennan McCabe

Over a year as part of the GLP program, there was substantial personal growth in understanding the world and other views and how I am expected to act at a college level. Being in a seminar for the first time, the opportunity to write a full research paper at the college level, with professional criticism and advice, made me understand what is expected of me as a higher-education student. Closer relationships with the professor, suggested by readily accessible means of communication through the platform "Slack," helped me excel in the academic responsibilities and tasks assigned, as well as comprehending the advanced material, mainly about the political history of the European region. Flexible yet strict final deadlines also taught me the skill to actively and effectively account for various matters and act responsibly as part of a group.

Though initial plans were not executed according to the schedule set at the beginning of the year, despite the easing coronavirus restrictions on international travel, it was still a valuable experience preparing for the event. The two-hour zoom session with students from Paris University as an alternative event to cover for the unexpected cancellation did not seem like a sufficient opportunity to present the extent of my research fully; making new connections across seas was a valuable outcome. Now that I have roots in a foreign country I have not even been to, future opportunities abroad have considerably broadened. The interaction with individuals who are already interested and familiar with Japanese culture and language also helped as a good stepping stone in interacting with those with a completely different background.

Overall, the GLP program was a once-in-a-lifetime opportunity that taught us many things before others could even experience anything similar and gave us a glimpse into our future regarding connecting with people in a foreign country. We could not take part in arguably the most appealing aspect of this program, but what I was able to absorb was much more than what I initially expected when the trip had been cancelled. I would recommend this program to anyone who desires a unique experience early in their student career and is interested in meeting diligent peers from and outside of Hitotsubashi.

My Personal Reflections

Risako Usui

I decided to apply for this seminar program last spring because I was attracted by the field study in Europe. I wanted to make the most of this opportunity to practice French and gain direct experience in overseas business practices, especially about topics of sustainability. So, I was disappointed when they announced that the field study was being cancelled for multiple reasons. I do hope students will be given opportunity to visit Europe as it is planned next year. However, I was able to learn so many things from these 9 month-long seminar programs with valuable experiences. I would like first to thank Mrs. Masuda, Mr. Martchev and the staff from the Global Office for their continuous help and support.

For me, the most remarkable takeaway was that I could learn how to narrow down one's interest to create something which you present to the public, like an essay or a presentation. The discussion and peer editing time in the class allowed me to absorb the way to decide the theme which fits my interests and to analyse points in a logical and meaningful way. This experience would not have been possible without all members of this seminar who are always passionate about learning. I got inspired by them so much. I truly hope the relationship we established through this program will last even after graduation when we are given chances to apply the leadership we learned to real-world cases to make a change in our society.



